東京大学
大学院農学生命科学
研究科・農学部

概　要

Graduate School of Agricultural and
Life Sciences/Faculty of Agriculture
The University of Tokyo

2022 Highlights

研究科長・学部長挨拶

目次 CONTENTS

1. 沿　革 …… 2
2. 歴代研究科長・学部長一覧 …… 7
3. 組　織 …… 8
4. 土地・建物 …… 13
5. 附属施設等 …… 14
6. 教職員 …… 18
7. 学　生 …… 19
8. 学部卒業生・大学院修了者 …… 21
9. 教育活動 …… 23
   (1) 学部教育 …… 23
   (2) 大学院教育 …… 33
10. 社会的活動 …… 43
11. 研究活動 …… 45
12. 国際交流 …… 47
13. 環境安全管理室の活動状況 …… 52
14. 領域横断型教育プログラム …… 53
15. その他の活動 …… 54
16. 自己点検・評価及び外部評価の実施について …… 55
17. 予　算 …… 56
18. 出版・印刷物・データベース …… 57

付　農学生命科学研究科・農学部配置図
　　附属施設等分布図

Graduate School of Agricultural and Life Sciences/
Faculty of Agriculture The University of Tokyo

ご　挨　拶

大学院農学生命科学研究科・農学部では、農業、林業、水産業、畜産業、食品産業における生産・加工・流通、さらにそれらを取り巻く社会科学的側面を対象とする教育と研究がおこなわれています。また、都市や農村の景観あるいはイヌやネコのような伴侶動物など､私たちの生活の質の向上に欠かせない分野も対象としています。

近代農業は、多くの化学肥料や農薬を使うことにより収量を増加させる多投入・多収穫の農業を確立して安定した食料供給に貢献し、多くの人々を飢餓から救いました。これは、農学がこれまで果たしてきた大きな成果と言えます。ところが、この多投入の農業や無節操な農業開発が環境に与える影響が極めて大きいことが問題となり、地球環境に配慮した持続的な農業生産が求められるようになりました。現在の80億人の世界人口は、2058年には100億人に達すると予測されています。安全で快適な生活と地球環境の保全が人類にとって最大の課題であり、その解決に向けた技術的・社会的な対策を担う農学の役割は、ますます大きくなっています。

農学は、さまざまな種の生物の利用と自然環境の保全との調和を目指す学問領域です。農学には、生命科学、環境科学から、人文社会科学に至るさまざまな分野があり、それらが基礎と応用の両面で発展し有機的に結びついています。生物は計り知れない機能を有しており、私たちが利用しているものはそのほんの一部に過ぎません。生物が有するさまざまな機能を解明し、人間社会の将来に役立てることが期待されているのです。環境問題や食料問題の解決に役立つ新たな機能を備えた生物を見いだし活用することも農学の役割です。つまり、農学は生物機能の活用を通して持続可能な社会の構築に貢献する学問と言うことができます。

農学生命科学研究科では、生命の理解とその応用に向けて、分子レベルから個体レベル、さらには群落、生態系、生物圏のレベルで研究が行われています。バクテリアや酵母などの微生物から高等動植物に至る多様な生物とそれらの生産物を対象として、実験室や国内外のフィールドで先端的な研究が展開されています。専門領域についての深い理解を目指すとともに、多様な学問分野から構成される農学を実感できる、分野横断型教育プログラムの充実を図っています。産学官民連携型の教育プログラムである「アグリコクーン」では、企業や行政と連携した現場での活動を通じた課題解決型教育を提供しています。「アグリバイオインフォマティクス教育研究プログラム」では、農学に関連したバイオインフォマティクスの実践的基礎教育と個別の研究指導を実施しています。また、本研究科が主体となって環境調和農学国際卓越大学院プログラムを2018年度から開始しました。このプログラムは、食料・生物資源の生産・流通をデータ駆動型に変換して環境負荷を最小化し、持続可能な生物生産を多様なステークホルダーと協創できる人材を育成することを目的としています。

農学部は、確かな専門性とともに俯瞰的な視座の養成を目的に、農学を段階的・体系的に学ぶためのカリキュラムを提供しています。農学部では、それぞれの専門に関する講義や実習・実験だけではなく、食や環境、生物多様性、バイオマス利用など農学の対象を俯瞰する講義も用意されています。

また、演習林や生態調和農学機構、牧場、水産実験所、動物医療センターなどの附属施設が充実しており、講義で学んだ知識を産業の現場での課題解決に結び付けるための教育を支えるとともに、研究の場としても活用しています。

社会の要請に柔軟に対応できる優れた人材の育成と総合科学としての農学が社会課題の解決に貢献することを目指して、農学生命科学研究科では教職員一丸となって努力してまいります。

農学生命科学研究科長・農学部長

堤　伸浩

1 沿　革

年　次		摘　要
1874. 4	明治 7. 4	現在の新宿御苑内に内務省農事修学場創設
1877.10	10.10	農事修学場を農学校と改称 現在の北区西ヶ原に内務省樹木試験場創設
1877.12	10.12	農学校、現在の駒場に移転
1878. 1	11. 1	1月24日農学校開校式、農場開設
1880.11	13.11	家畜病院開設
1881. 4	14. 4	農学校、樹木試験場を農商務省へ移管
1882. 1	15. 1	下総種畜場内の変則獣医生徒が農学校に所属
1882. 5	15. 5	農学校を駒場農学校と改称
1882.12	15.12	樹木試験場を東京山林学校と改称
1886. 7	19. 7	駒場農学校と東京山林学校を合併し、東京農林学校となる
1890. 6	23. 6	東京農林学校を帝国大学に合併し、分科大学として農科大学設置（農学科、林学科及び獣医学科を置き､実施農業に従事する者を養成するためそれぞれの学科に乙科を設ける） 農場設置
1893.11	26.11	農芸化学科設置
1894.11	27.11	千葉演習林設置
1897. 6	30. 6	勅令第208号により帝国大学を東京帝国大学と改称
1898. 5	31. 5	乙科を廃し、実科を設置
1898. 9	31. 9	演習林本部設置
1899. 4	32. 4	農業教員養成所開設
1899.10	32.10	北海道演習林設置
1902. 4	35. 4	農業教員養成所が農科大学の附属となる
1902. 9	35. 9	台湾演習林、代々木演習林及び府中演習林設置
1909. 3	42. 3	植物実験圃場設置
1910. 4	43. 4	水産学科設置
1912.12	大正元.12	朝鮮演習林設置
1914. 6	3. 6	樺太演習林設置
1916.12	5.12	秩父演習林設置
1919. 2	8. 2	勅令第13号により東京帝国大学農学部となる
1922. 9	11. 9	愛知演習林設置
1925. 3	14. 3	農業経済学科及び農学科農業土木学専修設置
1925. 5	14. 5	箱根演習林設置
1925.11	14.11	富士演習林設置
1926. 3	15. 3	二宮果樹園設置
1929.10	昭和 4.10	林学科田無苗圃設置
1935. 4	10. 4	農学科農業土木学専修を廃し、農業土木学科を設置 実科が独立し、東京高等農林学校となる
1935. 5	10. 5	箱根演習林廃止
1935. 7	10. 7	農学部、本郷区向ヶ丘弥生町に移転
1935. 8	10. 8	農場、北多摩郡田無町に移転
1936. 7	11. 7	水産実験所設置（愛知県知多市新舞子）
1937. 4	12. 4	農業教育養成所が独立し、東京農業教育専門学校となる
1940. 8	15. 8	熱帯林業研究所設置
1941. 3	16. 3	林学科に林業学専修と林産学専修を設ける
1943. 1	18. 1	樹芸研究所設置
1943. 4	18. 4	植物実験圃場を林学科樹木実験圃場と改称
1943. 9	18. 9	二宮果樹園を二宮農場と改称
1944. 3	19. 3	農学科畜産学専修設置
1945.10	20.10	台湾、樺太及び朝鮮演習林、熱帯林業研究所を終戦により廃止
1946. 4	21. 4	農学科畜産学専修及び獣医学科を廃し、畜産学科（甲類、乙類）設置
1947.10	22.10	東京帝国大学を東京大学と改称

年	次	摘　要
1948. 4	昭和23. 4	農業土木学科を農業工学科と改称
1949. 4	24. 4	牧場設置
1950. 1	25. 1	獣医学科再設置
1951.10	26.10	農学部規則制定
1953. 3	28. 3	東京大学大学院に人文科学・社会科学・数物系・化学系・生物系の5研究科設置
1953. 7	28. 7	牧場および家畜病院官制化
1954. 9	29. 9	園芸実験所開設
1955. 6	30. 6	放射性同位元素施設開設
1956. 1	31. 1	二宮農場を二宮果樹園と改称
1956. 4	31. 4	林学科林業学専修を林学科とし、林学科林産学専修を林産学科としてそれぞれ設置
1957. 4	32. 4	バイオトロン設置
1963. 4	38. 4	田無苗圃を田無試験地と改称
1964. 4	39. 4	農学科を農業生物学科と改称 畜産学科と獣医学科を統合し畜産獣医学科と改称 農業工学科に農業土木学専修と農業機械学専修を設ける
1965. 4	40. 4	東京大学大学院数物系・化学系・生物系の３研究科を医学系・工学系・理学系・農学系・薬学系の５研究科に改組（東京大学大学院農学系研究科設置） 園芸実験所、放射線育種共同利用施設設置
1965. 5	40. 5	大学院農学系研究科規則制定 農学部図書館開館
1970. 3	45. 3	水産実験所が静岡県浜名郡舞阪町に移転
1975. 4	50. 4	園芸実験所を緑地植物実験所と改称
1976. 5	51. 5	生物環境制御システムセンター設置
1977. 4	52. 4	農業生物学科に農業生物学専修と緑地学専修を設ける
1977.10	52.10	農学部図書館は外国雑誌センター館（農学系）に指定
1981. 4	56. 4	大学院農学系研究科畜産学専門課程と獣医学専門課程を統合し畜産獣医学専門課程を設置（修士課程）
1982. 4	57. 4	放射性同位元素施設設置
1983. 4	58. 4	畜産獣医学専門課程（博士課程）を設置
1984. 4	59. 4	獣医学学部教育６年制実施 生物生産工学研究施設設置
1987. 4	62. 4	大学院農学系研究科専門課程制から専攻制へ 大学院農学系研究科に応用生命工学専攻（独立専攻）を設置
1987. 5	62. 5	生物環境制御システムセンター廃止
1988. 4	63. 4	畜産獣医学科を獣医学科と改称
1988. 8	63. 8	600MHz超伝導フーリエ変換核磁気共鳴装置（NMR）設置
1990. 4	平成 2. 4	大学院農学系研究科畜産獣医学専攻を獣医学専攻と改称し、４年制博士課程となる 農業工学科の２専修（農業土木学専修・農業機械学専修）制度を廃止し、農業工学科となる
1990.10	2.10	林産学科に材料科学・住工学専修と森林バイオマス化学専修を設ける
1991. 4	3. 4	大学院農学系研究科に応用動物科学専攻（独立専攻）を設置
1993. 4	5. 4	生物生産工学研究施設を廃し、生物生産工学研究センター（学内共同教育研究施設）設置（10年時限）
1994. 4	6. 4	大学院農学系研究科を大学院農学生命科学研究科に改称 学科を廃止し、課程制へ移行（５課程制） 応用生命化学（農芸化学が改称）、応用生命工学、応用動物科学、獣医学の４専攻の整備
1995. 4	7. 4	生産・環境生物学（農業生物学が改称）、森林科学（林学が改称）、水圏生物科学（水産学が改称）の３専攻の整備 アジア生物資源環境研究センター（学内共同教育研究施設）設置（10年時限）
1996. 4	8. 4	農業・資源経済学（農業経済学が改称）、生物・環境工学（農業工学が改称）、生物材料科学（林産学が改称）の３専攻の整備
1997. 4	9. 4	大学院農学生命科学研究科に農学国際専攻（独立専攻）設置
1998. 6	10. 6	寄付講座「食シグナル・生体統御系間相互作用（明治乳業）」設置（設置期間５年間）
1999. 4	11. 4	農場、演習林、牧場、農学部の事務が合同し、農学系事務部が発足
2000. 3	12. 3	東京大学弥生講堂竣工 創立125周年記念式典を挙行 公用車車庫を農学資料館に改修

年	次	摘　要
2000. 4	平成12. 4	生圏システム学専攻設置 附属施設を学部附属から研究科附属に移行 学系事務室を４総務事務室（８掛）に再編
2001. 1	13. 1	農学部図書館を農学生命科学図書館と改称
2002.10	14.10	寄付研究ユニット「荏原バイオマスリファイナリー(荏原製作所)」設置(設置期間5年間)
2003. 4	15. 4	生物生産工学研究センター（学内共同教育研究施設）設置（時限による転換）
2003. 6	15. 6	寄付講座「食シグナル・生体統御系間相互作用（明治乳業)」設置（時限による転換、設置期間５年間）
2003. 7	15. 7	21世紀COEプログラムに「生物多様性・生態系再生研究拠点」が採択される
2003.10	15.10	生命科学総合研究棟竣工
2003.12	15.12	寄付講座「機能性食品ゲノミクス（ILSI JAPAN)」設置（設置期間５年間）
2004. 4	16. 4	国立大学法人法の規定により「国立大学法人 東京大学」となる 森林科学専攻樹木実験圃場を農学生命科学研究科附属施設の1つに加え、小石川樹木園と改称
2004. 7	16. 7	文部科学省科学技術振興調整費により、アグリバイオインフォマティクス人材養成ユニットを設置（設置期間５年間） 国際学術課を教務課に改称し、総務課総務事務室と併せて教務課（４係）に再編
2005. 4	17. 4	放射線育種共同利用施設を放射線育種場共同利用施設と改称
2005.12	17.12	魅力ある大学院教育イニシアティブプログラム 産学官民連携型農学生命科学研究インキュベータ機構を設置
2006. 4	18. 4	寄付講座「植物医科学（池田理化)」設置（設置期間５年間） 技術基盤センターを農学生命科学研究科附属施設の1つに加えた 農学部教育課程５課程22専修を３課程15専修へ移行 連携講座「エコロジカル・セイフティー学（独立行政法人農業環境技術研究所)」設置（設置期間５年間）
2006.11	18.11	食の安全研究センターを農学生命科学研究科附属施設の1つに加えた
2007. 1	19. 1	家畜病院を動物医療センターと改称 寄付講座「共生社会基盤形成を通じた国土の保全管理（前田建設工業・熊谷組)」設置（設置期間３年間）
2007. 4	19. 4	寄付講座「味覚サイエンス（日清食品)」設置（設置期間５年間） 事務組織を係制からチーム制に移行（附属施設を除く）
2008. 3	20. 3	二宮果樹園閉園
2008. 8	20. 8	弥生講堂アネックス竣工
2008.12	20.12	寄付講座「機能性食品ゲノミクス（ILSI JAPAN)」設置（時限による転換、設置期間５年間）
2009. 7	21. 7	農学生命科学図書館リニューアルオープン
2010. 4	22. 4	生態調和農学機構設置（農場と緑地植物実験所を改組し、演習林田無試験地の教育研究機能を組み入れた） バイオトロンおよび小石川樹木園を技術基盤センターに統合
2010.10	22.10	国際農業開発学コース（IPADS）を設置
2010.12	22.12	フードサイエンス棟竣工
2011. 4	23. 4	寄付講座「木質構造学（JKHD)」設置（設置期間３年間） 寄付講座「植物医科学（池田理化)」の設置期間を５年間から７年間に期間変更 連携講座「エコロジカル・セイフティー学」設置（時限による転換、設置期間５年）
2011. 6	23. 6	演習林の研究部を企画部と教育研究センターに改組 田無試験地を田無演習林に改称 愛知演習林を生態水文学研究所に改称 富士演習林を富士癒しの森研究所に改称
2012. 2	24. 2	生命科学総合研究棟Ｂ竣工
2012. 3	24. 3	緑地植物実験所閉所 研究科ロゴマーク制定（商標登録2016.4.）
2012. 4	24. 4	農学部教育課程３課程15専修を３課程14専修へ移行 寄付講座「植物医科学（イオン１%)」の設置期間を７年間から８年間に期間変更 寄付講座「味覚サイエンス（日清食品)」設置（時限による転換、設置期間５年間） 総務課研究支援チーム国際交流担当を教務課留学生チームに移し、国際学務支援チームに再編

年	次	摘　要
2012.10	平成24.10	寄付講座「微生物潜在機能探索（公益財団法人発酵研究所）」設置（設置期間５年間）
2013. 4	25. 4	技術部を設置
2013.12	25.12	寄付講座「機能性食品ゲノミクス（ILSI JAPAN）」設置（時限による転換、設置期間５年間）
2014. 4	26. 4	寄付講座「木質構造学（JKHD）設置（時限による転換、設置期間２年間）
		寄付講座「植物医科学（ニッポンジーン）」設置（時限による転換、設置期間５年間）
2015. 3	27. 3	弥生キャンパス内に「上野英三郎博士とハチ公の像」建立
2015. 5	27. 5	寄付講座「食と生体機能モデル学（フォーデイズ）」設置（設置期間５年間）
2016. 4	28. 4	社会連携講座「栄養・生命科学（サントリーグローバルイノベーションセンター株式会社）」設置（設置期間５年間）
		連携講座「エコロジカル・セイフティー学」設置（時限による転換、設置期間５年）
2016. 8	28. 8	寄付講座「バイオマス・ショア（光友ファシリティーズ）」設置（設置期間３年間）
2016.10	28.10	寄付講座「醸造微生物学（キッコーマン）」設置（設置期間５年間）
2016.11	28.11	社会連携講座「育種ゲノミクス」設置（設置期間５年間）
2017. 2	29. 2	寄付講座「養生訓を科学する医食農連携（共生バンク）」設置（設置期間５年間）
2017. 4	29. 4	放射性同位元素施設をアイソトープ農学教育研究施設に改称
		寄付講座「味覚サイエンス（日清食品）」設置（時限による転換、設置期間５年間）
2017. 6	29. 6	社会連携講座「健康栄養機能学」設置（設置期間３年）
2017.10	29.10	寄付講座「微生物潜在酵素（天野エンザイム）」設置（設置期間５年）
		連携研究機構「ワンヘルス連携研究機構」設置（設置期間10年）
2018. 2	30. 2	連携研究機構「微生物科学イノベーション連携研究機構」設置（設置期間３年４ヶ月間）
2018. 4	30. 4	寄付講座「バイオマス・ショア（光友ファシリティーズ）」を寄付講座「バイオマス・ショア（三菱ガス化学）」に名称変更
		連携研究機構「地域未来社会連携研究機構」設置（設置期間10年間）
2018. 9	30. 9	One Earth Guardians育成機構を設置
2018.12	30.12	連携研究機構「微生物科学イノベーション連携研究機構」の設置期間を３年４ヶ月間から10年間に期間変更
2019. 3	31. 3	寄付講座「バイオマスショア（三菱ガス化学）」の設置期間を３年間から３年８ヶ月間に期間変更
2019. 4	31. 4	連携研究機構「生命倫理連携研究機構」設置（設置期間10年間）
		寄付講座「食品機能学」設置（設置期間５年間）
		寄付講座「動物疾患データ解析」設置（設置期間３年間）
		寄付講座「植物医科学」設置（時限による転換、設置期間５年間）
2019. 9	令和元. 9	寄付講座「持続可能な自然再生科学研究」の設置（設置期間５年間）
2020. 1	2. 1	寄付講座「養生訓を科学する医食農連携（共生バンク）」を寄付講座「養生訓を科学する医食農連携寄付講座（メディカルビアーラ）」に名称変更、設置期間を５年間から５年２ヶ月間に期間変更
2020. 2	2. 2	連携研究機構「知能社会創造研究センター」設置（設置期間10年）
2020. 3	2. 3	寄付講座「食の健康科学（ニップン）」設置（設置期間３年間）
		寄付講座「バイオマス・ショア（三菱ガス化学）」を寄付講座「バイオマス・ショア」に名称変更、設置期間を３年８ヶ月間から４年８ヶ月間に期間変更
2020. 4	2. 4	連携研究機構「海洋アライアンス連携研究機構」設置（設置期間10年）
		連携研究機構「高齢社会総合研究機構」設置（設置期間10年）
2020. 5	2. 5	寄付講座「食と生体機能モデル学」設置（時限による転換、設置期間５年間）
2020. 6	2. 6	社会連携講座「健康栄養機能学」設置（時限による転換、設置期間３年間）
2020.12	2.12	連携研究機構「スポーツ先端科学連携研究機構」設置（設置期間9年4ヶ月）
2021. 2	3. 2	連携研究機構「放射線科学連携研究機構」設置（設置期間6年2ヶ月）
		連携研究機構「災害・復興知連携研究機構」設置（設置期間10年）
2021. 4	3. 4	連携研究機構「統合ゲノム医科学情報連携研究機構」設置（設置期間10年）
		連携研究機構「デジタル空間社会連携研究機構」途中参加（設置期間10年/2020～）
		社会連携講座「微生物エコテクノロジー」の設置（設置期間３年間）
		社会連携講座「地球規模感染症制御学」の設置（設置期間５年間）
		社会連携講座「栄養・生命科学」の設置（時限による転換、設置期間５年間）
		アジア生物資源環境研究センターが改組し、農学生命科学研究科附属施設となる
		生物生産工学研究センターが改組し、アグロバイオテクノロジー研究センターに改称され、農学生命科学研究科附属施設となる

年　次		摘　要
2021．4	令和 3．4	演習林の教育研究センターを教育・社会連携センターとフィールドデータ研究センターに改組 寄付講座「微生物膜輸送工学」設置（改組による再編、設置期間５年５ヶ月間／2019～） 寄付講座「微生物代謝工学」設置（改組による再編、設置期間４年間／2020～） 寄付講座「木材利用システム学」設置（改組による再編、設置期間３年６ヶ月／2019～） 連携講座「エコロジカル・セイフティー学」設置（時限による転換、設置期間５年間） 農学系事務部を農学部・農学生命科学研究科事務部に改称
2021.10	3.10	寄付講座「醸造微生物学（キッコーマン）」設置（時限による転換、設置期間４年６ヶ月間）
2021.11	3.11	寄付講座「OSG国際防疫獣医学」設置（設置期間５年間） 寄付講座「フィールドフェノミクス」設置（設置期間３年５ヶ月間）
2021.12	3.12	寄付講座「味覚サイエンス（日清食品）」の設置期間を５年間から６年間に期間変更
2022．3	4．3	寄付講座「微生物潜在酵素（天野エンザイム）」の設置期間を５年間から５年６ヶ月間に期間変更
2022．4	4．4	寄付講座「食と動物のシステム科学」設置（設置期間３年間）

2 歴代研究科長・学部長一覧

氏　名	任　期
松井直吉（農科大学長）	1890（明治23） 6. ～1911（明治44） 2.
古在由直（農科大学長）	1911（〃 44） 2. ～1919（大正 8） 4.
古在由直	1919（大正 8） 4. ～1920（〃 9） 9.28
川瀬善太郎	1920（〃 9） 9.28～1924（〃 13） 10.16
町田咲吉	1924（〃 13） 10.16～1927（昭和 2） 10.15
鈴木梅太郎	1927（昭和 2） 10.15～1928（〃 3） 10.18
岩住良治	1928（〃 3） 10.19～1931（〃 6） 1. 6
麻生慶次郎	1931（〃 6） 1. 6～1933（〃 8） 1. 5
諸戸北郎	1933（〃 8） 1. 6～1934（〃 9） 3.30
高橋偵造	1934（〃 9） 3.31～1936（〃 11） 3.30
佐藤寛次	1936（〃 11） 3.31～1939（〃 14） 3.30
薗部一郎	1939（〃 14） 3.31～1941（〃 16） 3.30
鈴木文助	1941（〃 16） 3.31～1941（〃 16） 11. 7
三浦伊八郎	1941（〃 16） 11. 8～1944（〃 19） 11. 7
田中丑雄	1944（〃 19） 11. 8～1948（〃 23） 11. 7
浅見興七	1948（〃 23） 11. 8～1950（〃 25） 11. 7
吉田正男	1950（〃 25） 11. 8～1952（〃 27） 11. 7
坂口謹一郎	1952（〃 27） 11. 8～1954（〃 29） 11. 7
磯邊秀俊	1954（〃 29） 11. 8～1957（〃 32） 11. 7
住木諭介	1957（〃 32） 11. 8～1960（〃 35） 11. 7
越智勇一	1960（〃 35） 11. 8～1962（〃 37） 11. 7
神谷慶治	1962（〃 37） 11. 8～1965（〃 40） 11. 7
大島泰雄	1965（〃 40） 11. 8～1967（〃 42） 11. 7
畑村又好	1967（〃 42） 11. 8～1968（〃 43） 11. 4
古島敏雄	1968（〃 43） 11. 5～1969（〃 44） 4. 6
篠原泰三	1969（〃 44） 4. 7～1970（〃 45） 2.19
川田信一郎	1970（〃 45） 2.20～1971（〃 46） 3.23
山田浩一	1971（〃 46） 3.24～1971（〃 46） 10.10
松井正直	1971（〃 46） 10.11～1977（〃 52） 10.10
逸見謙三	1977（〃 52） 10.11～1981（〃 56） 3.31
望月公子	1981（〃 56） 4. 1～1984（〃 59） 3.31
鴻巣章二	1984（〃 59） 4. 1～1986（〃 61） 3.31
高橋信孝	1986（〃 61） 4. 1～1989（平成元） 3.31
和田照男	1989（平成元） 4. 1～1992（〃 4） 3.31
鈴木昭憲	1992（〃 4） 4. 1～1994（〃 6） 9.30
佐々木惠彦	1994（〃 6） 10. 1～1996（〃 8） 3.31
小林正彦	1996（〃 8） 4. 1～1999（〃 11） 3.31
林　良博	1999（〃 11） 4. 1～2003（〃 15） 3.31
會田勝美	2003（〃 15） 4. 1～2007（〃 19） 3.31
生源寺眞一	2007（〃 19） 4. 1～2011（〃 23） 3.31
長澤寛道	2011（〃 23） 4. 1～2013（〃 25） 3.31
古谷　研	2013（〃 25） 4. 1～2015（〃 27） 3.31
丹下　健	2015（〃 27） 4. 1～2019（〃 31） 3.31
堤　伸浩	2019（〃 31） 4. 1～

3 組　　織

(1)大学院農学生命科学研究科・農学部

農学部

課　　程	専　　修
応用生命科学	生命化学・工学　応用生物学　森林生物科学　水圏生物科学 動物生命システム科学　生物素材化学
環境資源科学	緑地環境学　森林環境資源科学　木質構造科学 生物・環境工学　農業・資源経済学　フィールド科学　国際開発農学
獣医学	獣医学

農学生命科学研究科

専　　攻	基幹講座／寄付講座／連携講座／協力講座
生産・環境生物学	基幹講座　資源創成生物学、応用生物学領域、基礎生物学領域 寄付講座　植物医科学 協力講座　アジア生物資源学、生産生態学
応用生命化学	基幹講座　生物機能化学、生物生産化学、食品科学 寄付講座　食品機能学、味覚サイエンス、食の健康科学 社会連携講座　栄養・生命科学、健康栄養機能学 協力講座　食品安全化学、放射線農学
応用生命工学	基幹講座　生物分子工学、生物機能工学 寄付講座　微生物潜在酵素、醸造微生物学、微生物代謝工学、微生物膜輸送工学 社会連携講座　微生物エコテクノロジー、酵母発酵学 協力講座　生物生産工学、生命情報解析
森林科学	基幹講座　森林生命環境科学、森林資源環境科学 協力講座　アジア生物環境学、森林生態圏管理学
水圏生物科学	基幹講座　水圏生物工学、水圏生命科学、水圏生産環境科学 協力講座　海洋生物科学
農業・資源経済学	基幹講座　国際食料システム学、農業構造・経営学、開発政策・経済学 協力講座　生態調和経済学
生物・環境工学	基幹講座　生物環境情報工学、地域環境工学、生物システム工学 寄付講座　バイオマス・ショア 連携講座　エコロジカル・セイフティー学 協力講座　生態調和工学
生物材料科学	基幹講座　生物素材科学、材料・住科学、バイオマス化学 協力講座　アジア生物資源学
農学国際	基幹講座　国際動物生産学、国際植物生産学、地球生物環境学、国際開発環境学 社会連携講座　地球規模感染症制御学 協力講座　国際生態系管理
生圏システム学	基幹講座　生物保全学、生圏管理学 連携講座　エコロジカル・セイフティー学 協力講座　生圏相関科学
応用動物科学	基幹講座　高次生体制御学、動物機能科学 協力講座　実験資源動物科学
獣医学	基幹講座　比較動物医科学、病態動物医科学 寄付講座　食と生体機能モデル学、動物疾患データ解析、持続可能な自然再生科学研究 食と動物のシステム科学 協力講座　疾患モデル学、食品病原微生物学、高度医療科学、応用定量生命科学

領域横断型教育プログラム	アグリバイオインフォマティクス教育研究プログラム、 産学官民連携型農学生命科学研究インキュベータ機構、One Earth Guardians 育成機構

附属施設

生態調和農学機構　演習林　牧場　動物医療センター　水産実験所　アジア生物資源環境研究センター
アグロバイオテクノロジー研究センター　アイソトープ農学教育研究施設　農学生命科学図書館
放射線育種場共同利用施設　技術基盤センター　食の安全研究センター

農学部・農学生命科学研究科事務部

総務課　総務チーム（総務・広報情報担当　勤務時間・旅費担当）　人事チーム（人事・給与担当）
研究支援チーム（附属施設・研究協力担当　研究者国際交流担当　環境安全担当）
附属生態調和農学機構事務室　附属演習林千葉演習林事務室　附属演習林北海道演習林総務チーム
附属演習林北海道演習林経理チーム　附属演習林秩父演習林事務室
附属演習林生態水文学研究所事務室　附属牧場事務室　附属動物医療センター事務室
附属水産実験所事務室
図書チーム（情報管理担当　情報サービス担当　図書情報担当　雑誌情報担当）

経理課　予算・決算チーム（財務・資産管理担当）　施設整備チーム（施設保全管理担当）
経費執行チーム

教務課	学生支援チーム（学部学生担当　大学院学生担当　学生生活担当） 国際学務支援チーム（留学生担当）　専攻支援チーム

(2)寄付講座一覧

寄付講座とは、個人又は団体の寄附による基金をもって大学の教育研究活動を実施するため、学部及び研究科等の大学院組織に置かれる講座をいう。

寄付講座の名称	味覚サイエンス（日清食品）／Taste Science（Nissin Food Products Co.）
設置期間	2007年（平成19年）４月１日～2012年（平成24年）３月31日更新 2012年（平成24年）４月１日～2017年（平成29年）３月31日更新 2017年（平成29年）４月１日～2023年（令和５年）３月31日６年間
寄付者	日清食品ホールディングス株式会社
担当教員及び職名	特任教授　朝倉　富子 特任教授　阿部　啓子
研究目的	味覚は動物の摂食行動の起因として、人間にとっては食文化の原点として、さらには工業生産の主軸として、きわめて重要で、広範に亘る研究対象となっている。しかも最近は分子生物学やゲノム科学の導入により､その研究は先端ライフサイエンスの主要な一翼を担うまでに至っている。こうした背景を踏まえて発足した本寄付講座「味覚サイエンス」は、味覚の分子機構とその健康との関わりの解明を目的にしつつ、農学生命科学を特徴づける物質科学的視点をもこれに加え、学術・教育・産業に広く、深く貢献することを目的とする。

寄付講座の名称	植物医科学／Clinical Plant Science
設置期間	2006年（平成18年）４月１日～2014年（平成26年）３月31日更新 2014年（平成26年）４月１日～2019年（平成31年）３月31日更新 2019年（平成31年）４月１日～2024年（令和６年）３月31日５年間
寄付者	株式会社ニッポンジーン 株式会社サカタのタネ 日産化学株式会社
担当教員及び職名	特任教授　難波　成任 特任教授　市川　和規 特任教授　渡邊　健 教授（兼務）　山次　康幸 特任助教　宮崎　彰雄 特任助教　北沢　優悟
研究目的	地球上で生産可能な食糧の35%、23億人分の食糧が毎年植物病により失われている。これに対して、「植物病理学」をはじめとする植物保護関連のさまざまな分野がこれまで対策を講じてきた。しかし、気候変動、世界経済のグローバル化、農業生産の大規模化、野菜工場など超集約的農業の展開、さらに園芸愛好家の急増（国民の４人に１人）などにより病気の診断・治療・予防の需要は増加の一途である。本講座第１期では学部教育の実施、教科書発刊、我が国初の「植物病院」の本学開設、「植物医師」養成プログラムの構築、先端的臨床診断技術開発などを実現した。また第２期では、プロの「植物医師」のサポートのもと地域における「コミュニティ植物医師」養成やコミュニティ植物病院開設など、社会啓発活動を推進した。第３期では、「植物医師」認定事業の開始、植物医師会設立、JA等の連携植物病院開設を実現した。そこで第４期では、植物医師スキルアップ教育プログラムの実施、連携植物病院の全国展開、次世代診断技術の開発などを計画している。

寄付講座の名称	食品機能学／Food Functionality Science
設置期間	2019年（平成31年）４月１日～2024年（令和６年）３月31日５年間
寄付者	食品産業コンソーシアム
担当教員及び職名	特任准教授　岡田　晋治 特任助教　石島　智子
研究目的	抗メタボに加え、脳認知機能活性化、身体ロコモ改善などに効果を持つ“次世代機能性食品”の科学的エビデンスの数々を産学連携型の共同研究によって取得・発信することを目指す本講座は、基礎研究はもとより未病者介入試験に至る一連の応用研究を実施し、先進的な“未病マーカー”の探索・確立を目途に、食の本質を極め、研究・教育・産業の面で新たな社会貢献を果たす。

寄付講座の名称	微生物潜在酵素（天野エンザイム）／Laboratory of microbial enzyme potential（Amano Enzyme）
設置期間	2017年（平成29年）10月１日～2023年（令和５年）３月31日５年６ヶ月間
寄付者	天野エンザイム株式会社
担当教員及び職名	特任教授　尾仲　宏康 特任講師　浅水　俊平 特任助教　星野　翔太郎
研究目的	バイオプロセス産業における微生物酵素および抗生物質をはじめとする微生物由来の低分子化合物が人類にもたらした恩恵は計り知れない。近年の微生物ゲノムの大規模解読により、微生物の潜在能力は予想以上に大きいことが明らかになった。こうした背景を踏まえ、本寄付講座では新しい概念に基づく微生物共培養を用いたスクリーニングの実践を中心に、微生物の「ものづくり」潜在能力を引き出す新たな研究を展開することを目的とする。

寄付講座の名称	食と生体機能モデル学／Food and Physiological Models
設置期間	2015年（平成27年）５月１日～2020年（令和２年）４月30日更新 2020年（令和２年）５月１日～2025年（令和７年）４月30日５年間
寄付者	フォーデイズ株式会社

担当教員及び職名	教授（兼務）　堀　　正敏 特任准教授　伊藤　公一 特任助教　　山中　大介
研　究　目　的	さまざまな食品添加物あるいは飼料添加物の機能的側面を明らかにするためには、その研究に最適化した動物モデルを用いることが必要である。本講座では、種々の食品、食品添加物あるいは飼料添加物の開発に必要な動物モデルの開発とそれら動物モデルを用いた機能解析を行い、食品あるいは飼料添加物開発の基礎研究を実施する。

寄付講座の名称	醸造微生物学（キッコーマン）／Brewing Microbiology
設　置　期　間	2016年（平成28年）10月１日～2021年（令和３年）９月30日更新 2021年（令和３年）10月１日～2026年（令和８年）３月31日４年６ヶ月間
寄　付　者	キッコーマン株式会社
担当教員及び職名	特任教授　丸山　潤一 特任助教　片山　琢也
研　究　目　的	日本の伝統である醸造技術・発酵技術に不可欠な「醸造微生物」に関する基礎研究を通じて、技術力の向上、研究成果の社会還元、研究者の育成に貢献することを目的とする。

寄付講座の名称	微生物代謝工学／Microbial Metabolomics
設　置　期　間	2016年（平成２８年）４月１日～2020年（令和２年）３月31日更新 2020年（令和２年）４月１日～2024年（令和６年）３月31日４年間
寄　付　者	協和発酵バイオ株式会社
担当教員及び職名	教授（兼務）　西山　　真 特任准教授　富田　武郎
研　究　目　的	人類や社会の発展に貢献するため、微生物の生命現象や生物機能を分子レベルで理解し、その秘めた能力を最大限に活用することが期待されている。こうした状況を背景として、第Ⅰ期は、特にタンパク質の翻訳後修飾を介した微生物の環境応答や代謝調節など、応用微生物学でまだあまり手をつけられていない領域に関して強力に研究を推し進めた。第Ⅱ期は、それでもなお未解明のまま残された生理状態変化に対応する代謝変換の機構を、タンパク質･酵素の構造に立脚した研究を展開することで解明し、応用微生物学研究を飛躍的に発展させることを目指す。

寄付講座の名称	木材利用システム学／Wood Utilization System
設　置　期　間	2016年（平成28年）10月１日～2019年（令和元年）９月30日更新 2019年（令和元年）10月１日～2023年（令和５年）３月31日３年６ヶ月間
寄　付　者	農林中央金庫
担当教員及び職名	教授（兼務）　井上　雅文 特任教授　　永田　　信 特任助教　　長坂　健司
研　究　目　的	木質資源の有効利用による地球環境貢献が認識され、地域木材の利用拡大への関心が高まっているとともに、自然科学と社会科学の融合による木材の加工・流通・利用に関する新たな研究領域の確立が期待されている。本寄付講座では、木質資源を有効かつ持続的に利用するためのシステム構築を目指して、木材の利用に関する地球環境、地域経済、社会影響評価、マーケティング、政策等の研究を行う。また、研究者およびステークホルダーネットワークの形成を目指すとともに、成果の社会還元に努める。

寄付講座の名称	持続可能な自然再生科学研究／Environmental Science for Sustainable Development
設　置　期　間	2019年（令和１年）９月１日～2024年（令和６年）８月31日５年間
寄　付　者	株式会社サンタミネラル
担当教員及び職名	教授（兼務）　　堀　　正敏 特任教授　　杉浦　勝明 特任教授　　播谷　　亮
研　究　目　的	SDGsの改善目標を実現するため、室内実験とフィールドワークを行う。水圏環境生物の特性を明らかにし、その理解の上で地球環境の保全を目指す。地上の植物・微生物についても生活環境におけるヒト・動物との関わりを明らかにし、微生物の環境分布制御を通じより良い生活環境の構築を目指す。特に環境における人獣共通感染症病原体の制御や樹病の防除を目指す。

寄付講座の名称	微生物膜輸送工学／Microbial Membrane Transport Engineering
設　置　期　間	2019年（令和元年）10月１日～2024年（令和６年）３月31日５年５ヶ月間
寄　付　者	公益財団法人　発酵研究所
担当教員及び職名	特任教授　川崎　　寿 特任助教　篠田　恵子 特任助教　浜本　　晋
研　究　目　的	ダボス会議で有名な世界経済フォーラムの2016年注目技術トップ10の一つに「システム代謝工学 Chemicals from renewable sources' microorganisms」が挙げられており、微生物機能を活用した再生可能資源からのものづくりは、世界の政治・経済のリーダーからも認知・期待される持続可能・循環型社会に欠かせない技術である。しかしながら、細胞膜を横切る物質輸送には未解明の部分も多く、これがものづくりのボトルネックとなるケースも多い。細胞膜に存在する膜タンパク質は輸送以外にも重要な機能を担うものが多く、Natureなどのトップジャーナルに掲載される細胞生物学・構造生物学領域の論文は膜タンパク質に関するものも多い。しかし、その機能発揮に必要な周囲の脂質分子との相互作用を含む動的な挙動の理解は遅れている。本寄付研究部門では、革新的な輸送系解析技術の活用並びにコンピューターシミュレーションの支援による輸送タンパク質機能解析および輸送タンパク質間ネットワーク解析に基づく独創的かつ先導的な研究を行い、生物機能を活用したものづくりにイノベーションをもたらすことを通じて持続可能・循環型社会に貢献することを目的とする。

寄付講座の名称	食の健康科学（ニップン）／Food-related health science
設置期間	2020年（令和2年）3月1日～2023年（令和5年）2月28日3年間
寄付者	日本製粉株式会社
担当教員及び職名	特任准教授　小林　彰子
研究目的	少子高齢化に伴い増加する世界規模での社会問題を食の科学の面から解決することを目指す。健康寿命の延伸に繋がる食品および食品成分の新たなシーズを探索し、構造を明らかにすると共に、生体内での働きを正確に捉える。薬による治療ではない、食による疾病予防や健康維持、QOLの向上に繋がる新規素材を提案すると共に科学的エビデンスを構築する。

寄付講座の名称	OSG　国際防疫獣医学／OSG Veterinary Science for Global Disease Management
設置期間	2021年（令和3年）11月1日～2026年（令和8年）10月31日5年間
寄付者	株式会社OSGコーポレーション、創業者　湯川　剛
担当教員及び職名	教授（兼務）　芳賀　　猛 教授（兼務）　猪熊　　寿 特任助教　　前澤　誠希 特任助教　　藤本　悠理
研究目的	アジアでは、畜産の急速な発展と集約化に伴い、動物感染症がまん延し、安全な畜産物の安定供給、畜産の持続可能性を脅かしている。本寄付講座では、アジア諸国との国際連携や国際貢献を視野に、動物の感染症防疫に関する学術研究の発展と獣医学教育の質の向上を通じた人材育成と畜産業の振興を目的とする。獣医学のあらゆる分野を通じて、学術・教育・産業に幅広く貢献する目的で進める。

寄付講座の名称	フィールドフェノミクス／Field Phenomics
設置期間	2021年（令和3年）11月1日～2025年（令和7年）3月31日3年5ヶ月間
寄付者	北海道更別村
担当教員及び職名	准教授（兼務）　岩田　洋佳 特任准教授　　郭　　威
研究目的	農学研究及びスマート農業において、圃場における作物生育状態や生育環境等の詳細なデータの収集・解析・評価法が重要な基盤技術となる。JST CRESTプロ「農業ビッグデータ」（2015～2021）で、欧米と同様の先進的大規模農業が行われている北海道十勝（更別村）に研究拠点（東大サテライトオフィス）を設置し、フィールドフェノミクス、IoT、AI、ビッグデータ等の先端研究を進めてきた。本寄付講座では、そこでの実績を踏まえるとともに、研究教育を行うキャンパスとして活用し、地元農業者、関連企業等との共同研究を進めやすいという現地での大きなメリットを活かしてフィールドフェノミクスや関連技術のさらなる発展を目指す。また、それらの応用の社会実装を加速するための基盤を現場に寄り添う形で構築する。そのために、地元の農業者、行政、学校との連携も強化する。

寄付講座の名称	食と動物のシステム科学／Food and Animal Systemics
設置期間	2022年（令和4年）4月1日～2025年（令和7年）3月31日3年間
寄付者	株式会社リヴァンプ
担当教員及び職名	准教授（兼務）　村田　幸久 特任助教　小林　幸司 特任助教　永田　奈々恵（応用動物科学専攻動物機能科学講座）
研究目的	過去数十年で急増している人と動物の慢性的な疾患や体調不良を21世紀病と呼び、これにはアレルギーや腸炎、肥満、自閉症などが含まれる。これらの疾患の原因として環境や食を含む生活習慣の変化からくる腸内細菌の減少などが考えられているが、慢性かつ緩徐な病態を評価することは難しく不明な点が多い。本講座は、環境や習慣の何がこれらの疾患を増やしているのかを明らかにするとともに、これらの疾患に対する診断と治療方法の提案を行うことを目的に掲げ、腸内細菌や食の機能に注目した研究を推進する。さらに、これらの病態を明らかにする数理モデルや画像解析モデルのプラットフォーム構築と応用を目指す。

(3)社会連携講座一覧

社会連携講座とは、民間企業又は独立行政法人等から受け入れる共同研究の一環として、学部及び研究科等の教育研究を行う大学院組織等に置かれる講座をいう。

社会連携講座の名称	栄養・生命科学／Nutri・Lifescience
設置期間	2016年（平成28年）4月1日～2021年（令和3年）3月31日更新 2021年（令和3年）4月1日～2026年（令和8年）3月31日5年間
連携機関	サントリーグローバルイノベーションセンター株式会社
教育上の担当分野	応用生命化学専攻：食品生化学
担当教員及び職名	特任教授　　佐藤　隆一郎 特任准教授　　清水　誠 准教授（兼務）　山内　祥生
研究及び教育目的	運動機能を科学的に究明し、食と運動の機能に精通した人材の育成

社会連携講座の名称	健康栄養機能学／Nutrition for Health
設置期間	2017年（平成29年）6月1日～2020年（令和2年）5月31日更新 2020年（令和2年）6月1日～2023年（令和5年）5月31日3年間
連携機関	味の素株式会社
教育上の担当分野	応用生命化学専攻・食品生化学

担当教員及び職名	特任教授　　加藤　久典 特任准教授　賈　　慧娟 特任助教　　五十嵐　麻希
研究及び教育目的	高齢化などによる人類の健康課題に対し、アミノ酸の科学を利用し、食と栄養を通じた解決を図るため、アミノ酸・たんぱく質などの栄養素・食品成分について、健康維持・疾病予防にどのように作用するのかを分子レベルで明らかにし、その情報の提供により人類の健康に貢献する。

社会連携講座の名称	微生物エコテクノロジー／Microbial Ecotechnology
設　置　期　間	2021年（令和３年）４月１日～2024年（令和６年）３月31日３年間
連　携　機　関	ダイキン工業株式会社
教育上の担当分野	応用生命工学専攻、生物材料科学専攻、アグロバイオテクノロジー研究センター
担当教員及び職名	教授（兼務）　　大西　康夫 教授（兼務）　　野尻　秀昭 教授（兼務）　　五十嵐　圭日子 特任准教授　　原　　啓文 特任講師　　砂川　直輝 特任助教　　鈴木　研志
研究及び教育目的	環境に負荷をかけない経済活動である「バイオエコノミー」を目指した環境先進技術および材料開発を実現することで、SDGsが目指す社会に貢献する。併せて、社会人教育、大学院教育などにおける当該分野の専門教育にあたる。

社会連携講座の名称	地球規模感染症制御学／Global Infectious Diseases Control Science
設　置　期　間	2021年（令和３年）４月１日～2026年（令和８年）３月31日５年間
連　携　機　関	カルテック株式会社
教育上の担当分野	農学国際専攻
担当教員及び職名	特任教授　　間　陽子 准教授（兼務）　　松本　安喜 特任助教　　松浦　遼介
研究及び教育目的	現在、新型コロナウイルスの世界的蔓延は「感染症パニック」という言葉に代表されるように、生命と社会・経済に大きな打撃を与え続けており、その対策は急務となっている。地球規模で深刻化する感染症を克服する方法を確立するために、幅広く共通に有効性を示す光触媒の効果を、農学を基盤とする水産業、農業、林業、畜産業等の現場で検証する。

(4)連携講座一覧

連携講座とは、高度な研究水準をもつ民間等の研究所や国立の研究機関の施設・設備と人的資源を活用するため、研究機関等との間で協定を結び、それらの研究員に教授等の委嘱を行い大学院教育に従事させ、また、学生にこれらの研究機関等での研究指導を受けさせることができる講座をいう。

連携講座の名称	エコロジカル・セイフティー学／Ecological Safety
設　置　期　間	2006年（平成18年）４月１日～2011年（平成23年）３月31日更新 2011年（平成23年）４月１日～2016年（平成28年）３月31日更新 2016年（平成28年）４月１日～2021年（令和３年）３月31日更新 2021年（令和３年）４月１日～2026年（令和８年）３月31日５年間
連　携　機　関	国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構　農業環境変動研究センター
教育上の担当分野	生物・環境工学専攻：大気環境学、土壌環境学、物質循環学、生態系計測学 生圏システム学専攻：農村緑地生態学
担当教員及び職名	教授　　山口　紀子 教授　　和穎　朗太 教授　　山中　武彦 准教授　小野　圭介
連　携　目　的	東京大学大学院農学生命科学研究科における教育研究の実施に関し、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構　農業環境変動研究センターが協力して学生の資質向上とともに学術及び科学の発展に寄与することを目的とする。

(5)連携研究機構

連携研究機構とは、既存の組織の枠を超えた学の融合による新たな学問分野の創造を促進するために設置された、複数の部局等が一定期間連携して研究を行う組織をいう。

本研究科と関連する組織には「感染症連携研究機構」、「微生物科学イノベーション連携研究機構」、「地域未来社会連携研究機構」、「生命倫理連携研究機構」、「知能社会創造研究センター」、「海洋アライアンス連携研究機構」、「高齢社会総合研究機構」、「スポーツ先端科学連携研究機構」、「放射線科学連携研究機構」、「災害・復興知連携研究機構」、「統合ゲノム医科学情報連携研究機構」、「デジタル空間社会連携研究機構」、「エネルギー総合学連携研究機構」、「ワンヘルス・ワンワールド連携研究機構」、「次世代知能科学研究センター」、「構造生命科学連携研究機構」がある。

4 土地・建物

(1)土地

112,834㎡（弥生キャンパス、地震研究所、定量生命科学研究所、グランド等を含む）

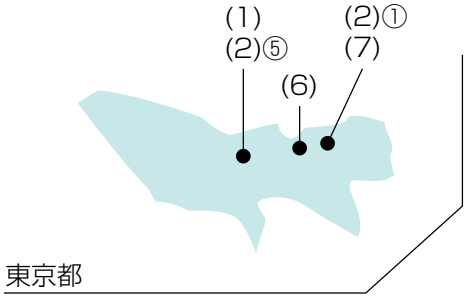
(2)建物

（2022.4.1現在）

建物名	建築年度	面積（延㎡）	主な使用専攻等
1号館	1926(大正15)	9,747	生産・環境生物学専攻、森林科学専攻、農業・資源経済学専攻、生圏システム学専攻、演習林（企画部、教育・社会連携センター、フィールドデータ研究センター）
2号館	1935(昭和10)	9,382	応用生命化学専攻、応用生命工学専攻、水圏生物科学専攻、生物材料科学専攻、アイソトープ農学教育研究施設(RI)
2号館別館	1967(昭和42)	2,810	応用生命化学専攻、応用生命工学専攻、生圏システム学専攻、農学国際専攻、水圏生物科学専攻
3号館	1941(昭和16) 1998(平成10)	12,391	研究科長室、事務部、教授会室、会議室、水圏生物科学専攻、獣医学専攻、生産・環境生物学専攻、森林科学専攻、応用生命化学専攻、応用生命工学専攻、電子顕微鏡室、産学官民連携室、アイソトープ農学教育研究施設（RI)、アジア生物資源環境研究センター
5号館	1970(昭和45)	1,960	生物材料科学専攻
6号館	1977(昭和52)	1,344	応用生命化学専攻、応用生命工学専攻、バイオトロン、生物・環境工学専攻
7号館A棟	1993(平成5) 1994(平成6)	8,512	応用動物科学専攻、獣医学専攻、水圏生物科学専攻、生物・環境工学専攻、生物材料科学専攻、農学国際専攻、森林科学専攻、農業・資源経済学専攻、生産・環境生物学専攻、バイオトロン、アジア生物資源環境研究センター、生圏システム学専攻
7号館B棟	1997(平成9)	3,524	
生命科学総合研究棟	2003(平成15)	5,176 (4,366) 計9,542	生産・環境生物学専攻、農学国際専攻、応用生命化学専攻、応用生命工学専攻、アイソトープ農学教育研究施設（RI)、バイオトロン、(定量生命科学研究所)
生命科学総合研究棟B	2011(平成23)	3,677 (3,278) 計6,955	生産・環境生物学専攻、応用生命化学専攻、応用生命工学専攻、獣医学専攻（定量生命科学研究所）
アグロバイオテクノロジー研究センター	1985(昭和60)	2,799	アグロバイオテクノロジー研究センター、応用生命工学専攻
農学生命科学図書館	1964(昭和39) 1993(平成5)	4,161	閲覧室、書庫、事務室、会議室、ゼミナール室、PC端末室
動物医療センター	1990(平成2)	3,010	大動物診療施設、小動物診療施設、検査室施設、獣医学専攻、ゼミナール室、事務室
フードサイエンス棟	2010(平成22)	3,577	食の安全研究センター、産学連携等研究室
東別館	1953(昭和28)	446	応用生命化学専攻、NMR装置
環境調整工学実験室	1971(昭和46)	138	生物・環境工学専攻
定量生命科学研究所	1960(昭和35)	1,155 (5,209) 計6,364	農学国際専攻（定量生命科学研究所） 生圏システム学専攻（定量生命科学研究所）
農学資料館	1937(昭和12)	69	
危険物薬品庫	1966(昭和41) 1971(昭和46) 1976(昭和51) 1976(昭和51) 1978(昭和53) 2001(平成13)	91	(全6棟)
核磁気共鳴装置実験室	1988(昭和63)	120	
弥生講堂	1999(平成11)	998	一条ホール、会議室等
弥生講堂アネックス	2008(平成20)	480	セイホクギャラリー、エンゼル研究棟講義室等
その他		778	物置、ポンプ室、蛋白質研究棟、I-REF棟一部使用、その他（3棟）
計		76,345	
圃場温室		338	ガラス温室等
計		338	
合　計		76,683	

5 附属施設等

(1)生態調和農学機構



設 置 目 的：

生態調和農学機構は、農場と緑地植物実験所を統合し、演習林田無試験地（現田無演習林）の教育研究機能を組み入れて、2010年4月1日に誕生した。耕地・緑地・林地からなる田無キャンパスを拠点とし、持続的な生態系サービスと調和する農林業と社会のありかたを解明することをめざして、農学教育研究を進めている。

生態調和農学機構では、教育研究を3つの領域で行う。情報・社会領域では、農林業と社会の関係性を、食品安全、環境保全等の観点から究明する。農林生態系領域では、国土と景観の保全に役立つ生態系管理・評価法を追究する。生物・物質循環領域では、農林業と環境をめぐる生物と物質の挙動を究明する。

こうした教育研究を通して、農林業や農村が今後の持続的社会への移行に果たす役割を明らかにしていく。

所 在 地：

田無キャンパス（旧農場）：東京都西東京市緑町1-1-1

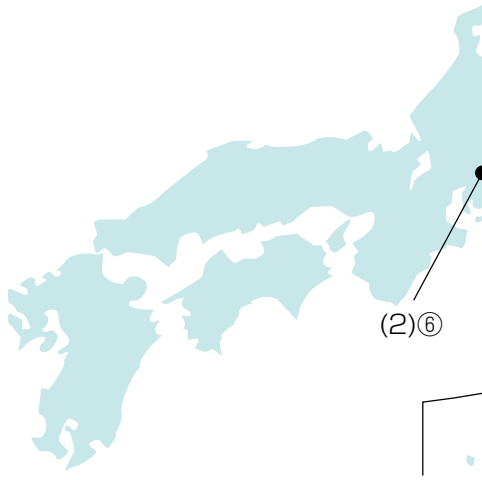
設 置 年 月：

農学校内農場　1878年（明治11年）1月　多摩農場　1935年（昭和10年）8月
園芸実験所　1954年（昭和29年）4月　生態調和農学機構　2010年（平成22年）4月

土 地：田無キャンパス（旧農場）214,857㎡

建 物：田無キャンパス（旧農場）9,001㎡

(2)演習林



設 置 目 的：

演習林は、森林に関する基礎的ならびに応用的試験研究を行うとともに、学生の実習に供することを目的とした研究教育施設である。

1890年東京農林学校が帝国大学と合併して、農科大学が新設され、1894年その附属施設として我が国初の演習林が房総半島の東南部清澄山林に設置された。これが現在の千葉演習林である。

1898年には官制としての演習林長が置かれ、演習林本部が設置された。その後我が国の森林帯あるいは森林の状況に応じて、北海道演習林以下の各地方演習林が順次設置された。

今日では、演習林は、演習林企画部、教育・社会連携センター、フィールドデータ研究センターと7つの地方演習林とによって構成されている。

① **演習林企画部、教育・社会連携センター、フィールドデータ研究センター**
所 在 地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）　設 置 年 月：1898年（明治31年）9月
建 物：農学部1号館内

② **千葉演習林**
所 在 地：千葉県鴨川市天津770　設 置 年 月：1894年（明治27年）11月
土 地：21,689,068㎡（借入3,790㎡）☆　建 物：3,327㎡

③ **北海道演習林**
所 在 地：北海道富良野市山部東町９番61号　設 置 年 月：1899年（明治32年）10月
土 地：227,137,444㎡（借入30,885㎡）☆　建 物：5,163㎡

④ **秩父演習林**
所 在 地：埼玉県秩父市日野田町1-1-49　設 置 年 月：1916年（大正5年）12月
土 地：58,117,472㎡（借入6,946㎡）☆　建 物：2,124㎡

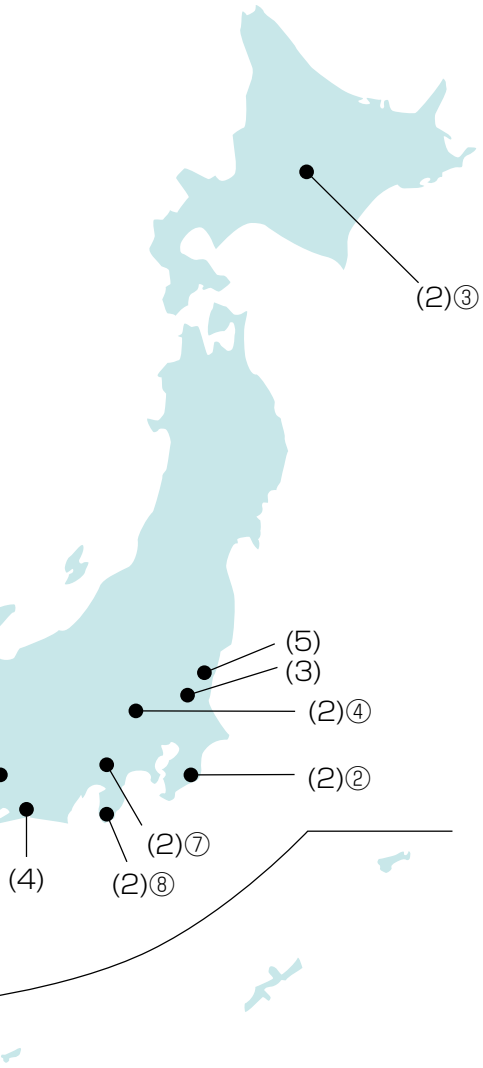
⑤ **田無演習林**
所 在 地：東京都西東京市緑町1-1-1　設 置 年 月：1929年（昭和4年）10月
土 地：88,605㎡　建 物：782㎡

⑥ **生態水文学研究所**
所 在 地：愛知県瀬戸市五位塚町11-44　設 置 年 月：1922年（大正11年）9月
土 地：12,938,602㎡　建 物：1,935㎡

⑦ **富士癒しの森研究所**
所 在 地：山梨県南都留郡山中湖村山中341-2　設 置 年 月：1925年（大正14年）11月
土 地：78,645㎡（借入331,106㎡）☆　建 物：278㎡

⑧ **樹芸研究所**
所 在 地：静岡県賀茂郡南伊豆町加納457　設 置 年 月：1943年（昭和18年）1月
土 地：2,470,219㎡（借入7㎡）☆　建 物：1,871㎡

☆…（　）内数字は外数である。



(3)牧場（高等動物教育研究センター）

設 置 目 的：

多くの大型産業動物を飼養・維持して、獣医学専修、動物生命システム科学専修、国際開発農学専修、応用動物科学専攻などの学部及び大学院生に対して実習研修教育にあたり、かつ畜産物の安心安全を保障する人材の育成教育などを通じて市民への食の安全研修にもあたる。加えて、専任教職員と大学院学生にて産業動物科学分野の研究を遂行し、かつ教員と学生による獣医科学、動物科学、医科学分野、全学向け体験活動などの教育と研究のための施設をも提供する。

所 在 地：茨城県笠間市安居3145
設 置 年 月：1949年（昭和24年）4月
土 地：364,882㎡
建 物：7,794㎡
家畜飼育頭数：ウマ9　ウシ20　ヤギ83　ブタ35　ニワトリ450

(4)水産実験所（水圏生物教育研究センター）

設 置 目 的：

農学部学生・大学院学生（水圏生命科学専修・国際開発農学専修・生圏システム学専攻）に対する実習施設の提供、実験所専任教員による水産増養殖に関する研究の遂行、教員・大学院学生による水生生物の生理・生態・病理・生物化学・育種・養魚・魚病・水質環境等の研究のための施設の提供。

所 在 地：
静岡県浜松市西区舞阪町弁天島2971-4
設 置 年 月：
1936年（昭和11年）7月　愛知県知多市新舞子（当時の知多郡旭村大字日長）に新舞子実験所開設
1937年（昭和12年）12月　愛知県渥美郡渥美町伊川津（当時の渥美郡泉村大字伊川津）に伊川津実験所開設
1970年（昭和45年）3月　現所在地に移転統合
土 地：
19,795㎡（借入）
建 物：2,683㎡

(5)放射線育種場共同利用施設

設 置 目 的：

全国大学関係等の業務を処理するための共同利用施設。農林水産省農業生物資源研究所放射線育種場（1960年4月設立）のガンマー圃場及びガンマー温室その他の施設を大学等の研究者も共同利用できるようにすることを目的に設立されたもので、植物の放射線による遺伝、育種等に関する研究施設である。

所 在 地：
茨城県常陸大宮市上村田2425（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構次世代作物開発研究センター放射線育種場内）
設 置 年 月：1965年（昭和40年）4月
土 地：379㎡（借入）
建 物：81㎡（39㎡借入）☆

☆…（　）内数字は外数である。

(6)小石川樹木園

設 置 目 的：

小石川樹木園は、森林植物学に関する教材を植栽、提供するために、1909年に文京区白山の本学大学院理学系研究科附属植物園の北側0.66haに、樹木実験圃場として設置された。2004年には本研究科附属施設となり、樹木に関する生理学、病理学および遺伝・育種学や、森林昆虫の生態学および生理学等の教育研究と実験材料の提供を行っている。

所 在 地：
東京都文京区白山3-7-1
設 置 年 月：
1909年（明治42年）3月（当時は、植物実験圃場。2004年（平成16年）4月に小石川樹木園と改称）
土 地：
6,600㎡（永久借用）
建 物：
65㎡

(7)弥生地区

・動物医療センター

設 置 目 的：市民に公開している動物診療施設であり、開業獣医師からの紹介症例を診察する二次診療施設として運営している。年間のべ約12,000頭を超える市民の伴侶動物について、約90名のスタッフ（教職員、研修獣医師、大学院生など）が対応している。これらの診療活動を通じて、学部生に対する臨床獣医学の講義・実習や臨床獣医師の卒後研修を行なっている。さらに、各種疾病についての基礎研究ならびに臨床研究を実施しており、学内外との共同研究も活発に行われている。
所 在 地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）
設 置 年 月：1880年（明治13年）11月
建 物：3,091㎡

・アイソトープ農学教育研究施設

設 置 目 的：放射性同位元素関係の教育研究を目的とし、学部内共同利用施設として設置された。年間の利用者数は、1,000人近くにのぼる全学で最も利用されているアイソトープ施設。
2017年4月1日より放射線生態学（radioecology）の基盤を支えるため「アイソトープ農学教育研究施設」へ改称し、福島を中心としたフィールドに根ざした教育研究を推進している。
所 在 地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）
設 置 年 月：1955年（昭和30年）6月
建 物：生命科学総合研究棟内　997㎡

・技術基盤センター

設 置 目 的：東京大学大学院農学生命科学研究科・農学部の教育・研究の高度化を専門性の高い技術の面から推進することを目的とする。
所 在 地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）
設 置 年 月：2006年（平成18年）4月1日
主 な 施 設：

・バイオトロン

設 置 目 的：農林生物の実験・研究は季節及び気象要因に左右されるところが大きく、実験の正確さや再現性に欠ける。その欠陥を補い、制御環境下で農林生物の実験を行うための学部内共同利用施設として1957年（昭和32年）に設置された。自然光ガラス温室、人工照明室、小動物飼育室（水棲動植物・昆虫を含む）からなり、温度・湿度・光などを人工的に調節して、四季の環境条件を再現し、また定温度下にて、植物・小動物・昆虫・菌類・水棲動植物の生育・生理・生態・病理・育種学及び分子生物学的実験研究を行うことを目的としている。
所 在 地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）
設 置 年 月：1957年（昭和32年）4月
建 物：農学部6号館・7号館内　約500㎡
生命科学総合研究棟内　75㎡

・食の安全研究センター

設 置 目 的：生産段階から製品に至るまでのフードチェーン全体における食の安全の科学的研究と低リスク食品の開発を行う。食品が媒介する感染症や放射性物質汚染などのリスク評価、それらによる健康被害リスクを低減するための研究、食の安全に関する科学的情報の収集と整理、経済的影響の評価などを様々な専門領域の研究者によって実施する。
所 在 地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）
設 置 年 月：2006年（平成18年）11月1日
建 物：フードサイエンス棟内3,577㎡

・アジア生物資源環境研究センター

設 置 目 的：世界各地で起こっている人為による環境劣化や地球規模環境変動に対し、環境修復や生物生産の頑健性の強化、資源利用システムの協創構築などにより、生物資源利用の持続性を確保するための研究を、様々なステークホルダーとの協働により統合的に推進し、国際連携と現地実践による専門人材育成と地域社会への貢献を担うことを目的とする。
所 在 地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）、東京都西東京市緑町1-1-1
設 置 年 月：2021年（令和3年）4月（全学センターのアジア生物資源環境研究センターは1995年4月に設置された）
建 物：農学部3号館・7号館B棟内、田無本館内

・アグロバイオテクノロジー研究センター

設 置 目 的：作物生産、環境浄化、微生物利用等の微生物と植物が関わる重要な生命現象を対象に、先進的な基礎農学研究を推進することを目的とする。そのため、研究科内の分野横断的研究の推進や、所有する資産（共通機器）の維持発展と研究科内共同利用を推進する。3つの研究部門（環境保全工学、細胞機能工学、植物機能工学）、7つの連携部門（分子育種学、細胞遺伝学、応用微生物学、生物情報工学、森林化学、酵

母発酵学、微生物エコテクノロジー)、ならびに2つの寄付講座（微生物代謝工学、微生物膜輸送工学）から構成される。全学センターとしての生物生産工学研究センターを改組して2021年4月に発足した。

所　在　地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）
設 置 年 月：2021年（令和3年）4月1日
建　　物：アグロバイオテクノロジー研究センター棟内　1,188㎡

・農学生命科学図書館

設 置 目 的：農学生命科学研究科・農学部における教育及び研究活動を支援するため、図書・雑誌を収集・保存し、学生・教職員の利用に供する。1977年度からは農学系外国雑誌センター館に指定され、農学・生命科学分野の外国雑誌の収集と、全国の大学・研究機関ならびに研究者等に対する情報サービスを行っている。
所　在　地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）
設 置 年 月：1965年（昭和40年）5月
　　2009年（平成21年）3月　耐震改修工事竣工
建　　物：建築面積1,151㎡　建築延べ面積4,161㎡
主 要 設 備：パソコン（46台）
閲 覧 席 数：147席
蔵書冊数（含演習林）：456,142冊（和書269,093冊、洋書187,069冊）
図書年間増加冊数：6,814冊（和書2,563冊、洋書4,251冊）
雑誌所蔵タイトル数：13,399種（和雑誌7,895種、洋雑誌5,504種）
継続購入雑誌タイトル数：612種（和雑誌233種、洋雑誌379種）

図書館外観

図書館館内

図書館内ラウンジ

アグロバイオテクノロジー研究センター建物
（写真提供:アグロバイオテクノロジー研究センター）

「問題土壌の環境修復と持続的利用」フィールドセミナー
（カンボジア）
（写真提供：アジア生物資源環境研究センター）

6 教 職 員

(1)教職員数

(2022.5.1現在)

区　分	教　授	准教授	講　師	助　教	計	事務職員	技術職員	計
1研究科・学部	80	84	2	60	226	78	1	79
2生態調和農学機構	1	3		1	5	4	10	14
3演習林	4	4	6	10	24	18	61	79
4牧場		1			1	2	8	10
5動物医療センター	2				2	5		5
6水産実験所	1			2	3	1	3	4
7技術基盤センター					0		10	10
8アジア生物資源環境研究センター	4	5			9			
9アグロバイオテクノロジー研究センター	3	3		2	8			
合　計	95	100	8	75	278	108	93	201

(2)在職教員の出身校（学部卒）

(2022.5.1現在)

大学名		教　授			准教授			講　師			助　教		
		男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	計
東京大学	農学部	66	1	67	53	6	59	4		4	30	7	37
	理学部	3		3	3		3			0			0
	工学部	2		2	1		1			0	2		2
	文学部			0		1	1			0			0
	経済学部			0		1	1			0			0
帯広畜産大学				0			0	1		1		1	1
北海道大学		1		1	4		4	1		1			0
東北大学		2		2	3	1	4			0	1		1
山形大学				0	1		1			0			0
宇都宮大学				0			0			0		1	1
埼玉大学		1		1	1		1			0			0
千葉大学		1		1			0			0			0
横浜国立大学		1		1			0			0			0
信州大学				0	1		1			0			0
筑波大学				0	1		1			0	2		2
東京工業大学				0	1		1			0			0
東京農工大学		2	1	3	3	1	4			0	4		4
岐阜大学				0	1		1			0			0
静岡大学				0	1		1			0	1		1
名古屋大学		1		1			0			0			0
三重大学		1		1			0			0			0
京都大学		2	1	3	3	1	4	1	1	2	2		2
大阪大学				0		1	1			0			0
神戸大学		1		1			0			0	1		1
島根大学				0	1		1			0			0
岡山大学				0			0			0	1		1
山口大学				0	1		1			0			0
九州大学		1		1		1	1			0			0
宮崎大学		1		1			0			0			0
その他		4	2	6	8		8			0	12	10	22
合　計		90	5	95	87	13	100	7	1	8	56	19	75

7 学　　生

(1)学部学生定員・在籍者数

(2022.5.1現在)

区分		定員	後期課程 3年 小計 男性	後期課程 3年 小計 女性	後期課程 4年 小計 男性	後期課程 4年 小計 女性	後期課程 5年 小計 男性	後期課程 5年 小計 女性	後期課程 6年 小計 男性	後期課程 6年 小計 女性	研究生 小計 男性	研究生 小計 女性	合計 小計 男性	合計 小計 女性	特別聴講学生
			(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)		
応用生命科学課程	生命化学・工学専修	152	55		88						2		145		
			48	7	67	21					0	2	115	30	
			(1)		(3)						(0)		(4)		
	応用生物学専修		17		17						1		35		
			13	4	11	6					1	0	25	10	
			(1)		(0)						(0)		(1)		
	森林生物科学専修		5		7								12		
			5	0	7	0							12	0	
			(0)		(0)								(0)		
	水圏生物科学専修		16		18						1		35		
			13	3	13	5					1	0	27	8	
			(0)		(0)						(0)		(0)		
	動物生命システム科学専修		8		4								12		
			5	3	2	2							7	5	
			(1)		(0)								(1)		
	生物素材化学専修		13		11								24		
			10	3	11	0							21	3	
			(0)		(0)								(0)		
環境資源科学課程	緑地環境学専修	108	6		6								12		
			5	1	5	1							10	2	
			(0)		(0)								(0)		
	森林環境資源科学専修		11		8						1		20		
			9	2	8	0					0	1	17	3	
			(0)		(0)						(0)		(0)		
	木質構造科学専修		7		10						1		18		
			5	2	9	1					1	0	15	3	
			(0)		(0)						(0)		(0)		
	生物・環境工学専修		7		27								34		
			6	1	24	3							30	4	
			(0)		(1)								(1)		
	農業・資源経済学専修		33		36								69		
			29	4	29	7							58	11	
			(0)		(1)								(1)		
	フィールド科学専修		9		12								21		
			9	0	10	2							19	2	
			(0)		(0)								(0)		
	国際開発農学専修		21		22								43		
			15	6	16	6							31	12	
			(1)		(0)								(1)		
獣医学課程	獣医学専修	30	30		27		30		33				120		
			17	13	19	8	16	14	24	9			76	44	
			(1)		(0)		(0)		(0)				(1)		
合計		290	238		293		30		33		6		600		
			189	49	231	62	16	14	24	9	3	3	463	137	
			(5)		(5)		(0)		(0)		(0)		(10)		

(2)大学院学生定員・在籍者数

(2022.5.1現在)

専攻名	修士					博士								研究生		合計	
	定員	1年		2年		定員	1年		2年		3年		4年				
		小計		小計			小計		小計		小計		小計				
		男性	女性	男性	女性		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
		(内外国人学生)		(内外国人学生)			(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)	
生産・環境生物学	28	32		24		13	16		11		18				3		104	
		21	11	14	10		10	6	7	4	15	3			0	3	67	37
		(8)		(3)			(6)		(6)		(7)				(3)		(33)	
応用生命化学	34	64		61		16	20		15		17				7		184	
		34	30	34	27		10	10	11	4	11	6			4	3	104	80
		(9)		(11)			(8)		(6)		(12)				(6)		(52)	
応用生命工学	43	36		43		20	9		12		11				8		119	
		27	9	30	13		4	5	9	3	7	4			2	6	79	40
		(7)		(11)			(5)		(6)		(5)				(8)		(42)	
森林科学	20	16		17		10	2		9		8				8		60	
		12	4	15	2		1	1	6	3	6	2			7	1	47	13
		(2)		(5)			(2)		(3)		(1)				(4)		(17)	
水圏生物科学	30	30		41		15	19		17		27				2		136	
		25	5	29	12		10	9	12	5	18	9			2	0	96	40
		(4)		(6)			(5)		(10)		(12)						(37)	
農業・資源経済学	17	17		12		8	7		8		7				3		54	
		12	5	11	1		4	3	6	2	6	1			2	1	41	13
		(4)		(3)			(6)		(6)		(3)				(3)		(25)	
生物・環境工学	17	13		28		8	2		3		7				1		54	
		11	2	21	7		2	0	2	1	7	0			1	0	44	10
		(2)		(7)			(1)		(2)		(4)				(1)		(17)	
生物材料科学	17	26		33		8	6		6		14				2		87	
		14	12	26	7		5	1	5	1	11	3			2	0	63	24
		(4)		(5)			(2)		(1)		(2)						(14)	
農学国際	43	38		40		19	21		12		20				4		135	
		20	18	27	13		9	12	8	4	13	7			2	2	79	56
		(18)		(22)			(13)		(8)		(11)				(3)		(75)	
生圏システム学	25	22		18		18	8		2		12				5		67	
		12	10	13	5		3	5	1	1	10	2			1	4	40	27
		(8)		(4)			(4)				(3)				(5)		(24)	
応用動物科学	19	17		18		8	3		4		9				3		54	
		7	10	9	9		1	2	0	4	4	5			2	1	23	31
		(3)		(4)			(1)		(1)		(3)				(3)		(15)	
獣医学						13	13		15		13		18		4		63	
							10	3	7	8	10	3	10	8	2	2	39	24
							(2)		(3)		(1)		(4)		(4)		(14)	
合計	293	311		335		156	126		114		163		18		50		1117	
		195	116	229	106		69	57	74	40	118	45	10	8	27	23	722	395
		(69)		(81)			(55)		(52)		(64)		(4)		(40)		(365)	

8 学部卒業生・大学院修了者

(1)学部卒業生　24,024人　（2022.5.1現在）

(2)大学院修了者　修士課程 11,192人　博士課程 5,027人

(3)論文提出による学位授与者数　4,708人

(4)卒業・修了後の進路

学部卒業生

区　分	卒業生数	就職先等				
		大学院生	官公庁	民間会社	教育機関	その他
2017年度	268	152	12	82	2	20
2018年度	279	167	7	75	1	29
2019年度	262	146	9	77	1	29
2020年度	237	130	7	64	2	34
2021年度	263	157	14	63	0	29

大学院修了者（博士・満期退学者を含む）

区　分		修了生数	就職先等				
			博士課程進学	官公庁	民間会社	教育・研究機関	その他
2017年度	修士	266	35	25	171	8	27
	博士	101	0	2	26	22	51
2018年度	修士	279	55	19	159	5	41
	博士	125	4	2	23	30	66
2019年度	修士	291	62	12	183	1	33
	博士	100	1	2	50	2	45
2020年度	修士	278	53	17	156	3	49
	博士	99	1	1	20	32	45
2021年度	修士	296	54	14	124	0	104
	博士	127	2	1	21	26	77

(5)主な就職先（2021年度）

学部卒業生

応用生命科学課程

農林水産省、横浜市、Avinton ジャパン、いなば食品株式会社、株式会社オースビー、中京テレビ放送、東日本旅客鉄道株式会社、日本タタ・コンサルタンシー・サービシズ株式会社　他

環境資源科学課程

国土交通省、農林水産省、経済産業省、国際協力機構、国際協力銀行、アクセンチュア株式会社、アスカ監査法人、有限責任あずさ監査法人、株式会社オースビー、オリックス株式会社、鹿島建設株式会社、株式会社 言楽舎、株式会社コーポレイトディレクション、昭和システムエンジニアリング株式会社、株式会社 JERA、ソニーグローバルソリューションズ株式会社、中部電力、株式会社 Tsuzucle、株式会社 DeNA、株式会社 DYM、東京海上アセットマネジメント株式会社、東京海上日動火災保険株式会社、日鉄エンジニアリング株式会社、日本財団、日本不動産研究所、日本放送協会、日本郵船株式会社、株式会社みずほフィナンシャルグループ、みずほリサーチ＆テクノロジーズ株式会社、三菱商事株式会社、株式会社三菱 UFJ 銀行、株式会社安川電機、楽天グループ株式会社、株式会社リッチリンク　他

獣医学課程

農林水産省、特許庁、東京都、宮崎県庁、埼玉県庁、さいたま市、オリンパス株式会社、キヤノンメディカルシステムズ株式会社、キリンホールディングス株式会社、株式会社グッドパッチ、社台ファーム、白石動物病院、株式会社 Zpeer、第一三共株式会社、中外製薬株式会社、日本中央競馬会、株式会社パルノビ、北海道農業共済組合、山形県農業共済組合　他

大学院修了者　修士

生産・環境生物学専攻

富山県、コーエーテクモホールディングス、さくら少額短期保険株式会社、サントリーホールディングス株式会社、農研機構、株式会社船井総合研究所、株式会社ベイカレント・コンサルティング、株式会社みずほフィナンシャルグループ、レンゴー株式会社　他

応用生命化学専攻

農林水産省、味の素株式会社、アマゾンジャパン合同会社、エバラ食品工業株式会社、キユーピー株式会社、株式会社講談社、三栄源エフ・エフ・アイ株式会社、第一三共株式会社、ネクスジェン株式会社、株式会社日清製粉、株式会社日清製粉ウェルナ、株式会社野村総合研究所、ハウス食品株式会社、株式会社日立ハイテク、ミヤリサン製薬株式会社　他

応用生命工学専攻

農林水産省、特許庁、アクセンチュア株式会社、SMBC 日興証券株式会社、エステー株式会社、和キリン株式会社、ゲンキー株式会社、サントリーホールディングス株式会社、株式会社 SHIFT、石油資源開発株式会社、ソニー株式会社、日本 IBM、日本マイクロソフト株式会社、日本生命保険相互会社、パナソニック株式会社、株式会社東洋新薬、マッキンゼー・アンド・カンパニー・インコーポレイテッド・ジャパン、株式会社三井住友銀行、三菱 UFJ モルガン・スタンレー証券株式会社、株式会社明治、明治安田生命保険相互会社、理研ビタミン株式会社　他

森林科学専攻

株式会社 SHIFT、清水建設株式会社、東京建物株式会社、三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング　他

水圏生物科学専攻

アマゾンウェブサービスジャパン合同会社、EA ファーマ株式会社、伊藤忠商事株式会社、株式会社 NTT データ・イントラマート CSI、株式会社キオクシア、株式会社サイバーエージェント、サントリーホールディングス株式会社、JP エレクトリクス株式会社、国立研究開発法人 水産研究・教育機構、東都水産株式会社、日本アルコール産業株式会社、株式会社野村総合研究所、株式会社日立製作所、日立物流ソフトウェア株式会社、ライオン株式会社　他

農業・資源経済学専攻

農林水産省、経済産業省、金融庁、日本工営株式会社　他

生物・環境工学専攻

農林水産省、フューチャー株式会社、中国建設銀行　他

生物材料科学専攻

環境省、出光興産株式会社、株式会社イトーヨーカ堂、ENEOS 株式会社、株式会社エムツウ補償構造設計、エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ株式会社、Sky 株式会社、株式会社 SUBARU、住友ベークライト株式会社、タマホーム株式会社、デュポン株式会社　他

農学国際専攻

水産庁、農林水産省、アマゾンジャパン合同会社、飯野運輸株式会社、EY ストラテジー・アンド・コンサルティング株式会社、カバー株式会社、KDDI 株式会社、、独立行政法人国際協力機構、サントリーホールディングス株式会社、ソフトバンク株式会社、日本放送協会、野村総合研究所、みずほリサーチアンドテクノロジーズ、三井不動産株式会社、森ビル株式会社、楽天グループ株式会社、株式会社りそな銀行、株式会社リンクアンドモチベーション、株式会社ポケットマルシェ、Zhejiang Jiaxing Digital City Laboratory Company Limited　他

生圏システム学専攻

東京都庁、日本銀行、いであ株式会社、サントリーホールディングス株式会社、合同会社東北野生動物保護センター、パシフィックコンサルタンツ株式会社、株式会社バンダイナムコエンターテインメント、株式会社日比谷アメニス、株式会社ブレック研究所、三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング株式会社、三菱商事株式会社　他

応用動物科学専攻

日鉄ソリューションズ株式会社、アサヒビール株式会社、エーザイ株式会社、大塚製薬株式会社、小野薬品工業株式会社、塩野義製薬株式会社、株式会社テラスカイ・テクノロジーズ、デロイトトーマツファイナンシャルアドバイザリー合同会社、日本農産工業株式会社、野村證券株式会社、フナコシ株式会社、医療法人社団友志会　他

大学院修了者　博士（満期退学者を含む）

生産・環境生物学専攻

国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構、立教大学　他

応用生命化学専攻

味の素株式会社、ハウス食品株式会社　他

応用生命工学専攻

国立大学法人京都大学、国立研究開発法人理化学研究所　他

森林科学専攻

一般財団法人砂防フロンティア整備推進機構　他

水圏生物科学専攻

国立研究開発法人水産研究・教育機構、株式会社鈴廣蒲鉾本店、国立大学法人東京大学、国立研究開発法人理化学研究所　他

農業・資源経済学専攻

国立大学法人神戸大学、国際農林水産業研究センター　他

生物・環境工学専攻

スキャン・エックス株式会社、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構　他

生物材料科学専攻

MSD 株式会社

王子ホールディングス株式会社、国立研究開発法人産業技術総合研究所、国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構、住友林業株式会社、国立大学法人東京大学、日置電機株式会社、国立研究開発法人理化学研究所　他

農学国際専攻

学校法人順天堂、国立大学法人東京大学　他

生圏システム学専攻

株式会社自然回復　他

応用動物科学専攻

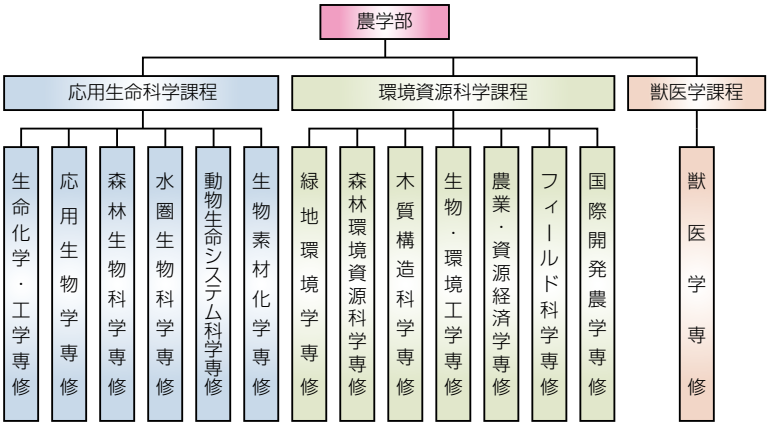
アステラス製薬株式会社、株式会社羊土社　他

獣医学専攻

農林水産省、アステラス製薬株式会社、住友ファーマ株式会社、第一三共株式会社、テルモ株式会社一般財団法日本生物科学研究所、バイエル薬品株式会社、株式会社メディカル・アーク、国立研究開発法人理化学研究所　他

9 教育活動

(1)学部教育



①農学部のめざす教育

人類は人口の増加の一方でエネルギー・食糧資源供給に限界の見える時代を迎え、特に食糧と環境をめぐってさまざまな問題に直面している。農学部は、農学を構成する応用諸科学に関する専門教育を段階的・体系的に行い、食糧・資源・環境等の問題の解決に必要な高度の専門知識と幅広い視野を有し、社会・文化・産業活動を通じて地球社会の要請に応えることのできる洞察力・実践力・指導力を備えた人材を育成する。

②課程・専修制

農学部では平成６年度にそれまでの学科制を廃止し、５課程19専修からなる課程・専修制を導入した。この制度は学生のカリキュラム選択に自由度を確保するとともに、段階的・体系的に専門性を高めていく方式によって、高度化する農学教育の要請に応えることをねらいとしている。現代の農学は専門領域への分化が進み、新しい専門領域も生まれているが、理想的な学部教育を実現するため、過度な細分化はせずに、現在は３課程14専修で運営されている。

課程・専修制では、学生は学部・課程・専修という三層の構造のもとで学習し、進学内定後の２A1、２A2には全ての農学部生に開かれた農学総合科目と、農学分野の基礎を学ぶ農学基礎科目を中心に履修することになる。農学総合科目は広い視野から問題関心の醸成をはかるオムニバス形式の講義であり、農学部独特のカリキュラムとなっている。本郷に進学後は課程専門科目、農学共通科目および専修専門科目を学ぶことになる。課程専門科目は専門性が格段に高まる点で農学基礎科目とは異なっている。農学共通科目では専門家としての倫理と安全管理を学ぶ。専修専門科目は実験・実習・演習科目で、基本的に必修となっている。４年次には、研究室に所属して卒業研究に取り組むことになる。

カリキュラムの内容は、平成27年度から４ターム制への移行に併せて、様々な見直しを行った。農学の基礎から応用までを段階的に広く深く学べるように科目区分の改訂を行った。平成28年度進学者から適用された新カリキュラムにおいては卒業に要する単位数を、６年制の獣医学専修（144単位）を除き84単位から76単位に削減したことにより、予習復習を行う時間を確保させて、自発的な学びの深化を促すこととした。農学部では、SPタームやWタームでのカリキュラムに独自の工夫を凝らしている。これによって、専門的な実験・実習に一定期間集中的して取り組めたり、海外のサマープログラムへの積極的な参加が可能になったりするなど、学生に効果的な学修の機会を提供できるようになった。また、すべての専修の学生が必修科目として農学リテラシーを学ぶことになっており、それに加えて専門分野にあわせた安全・倫理面の講義を受講している。これらカリキュラム変更や教員の授業の改善では、学生による授業評価を積極的に活用している。

③フィールド科学の教育

農学部では授業に占める演習、実験、実習等の割合がもともと高いが、特にフィールドワーク（野外実習）を重視しており、これが他学部にはみられない特色となっている。生態調和農学機構、演習林、水産実験所、牧場などの附属施設のみならず、学外の様々な施設と提携して、実践的な演習の充実を図っている。一部の専修では海外における実習も行っており、グローバルな視野に立つ人材育成をめざしている。

(ａ)農学部での授業科目名

農学総合科目

人口と食糧	生態系の中の人類	土壌圏の科学	水の環境科学
環境と景観の生物学	生物の多様性と進化	環境と生物の情報科学	化合物の多様性と生理機能Ⅰ
化合物の多様性と生理機能Ⅱ	バイオマス利用学概論	森林資源と木材利用	食の安全科学
放射線環境学			

農学基礎科目

基礎有機化学	基礎分析化学	基礎微生物学	分子生物学
基礎生物化学	生物統計学	植物生理学	細胞生物学
遺伝学	植物分類・形態学	昆虫学	動物生態学
森林環境科学汎論	集団遺伝学	動物分類学	植物生態学
木質構造科学概論	流れ学	情報工学	基礎高分子化学
基礎物理化学	農業資源経済学汎論	農業史概論	ミクロ経済学
動物生理学	応用動物科学概論		

農学共通科目

農学リテラシー	環境倫理	生命倫理	技術倫理

農学展開科目

食と人間	食と健康システム演習	バイオマス利用研究特論	生物配列解析基礎
ゲノム情報解析基礎	バイオスタティスティクス基礎論	構造バイオインフォマティクス基礎	フードクリエーションサイエンス
フロンティアライフサイエンス	生態統計学	サイエンスコミュニケーション	サイエンスコミュニケーション演習
自然再生事業モニタリング実習	農学現象の数理科学的理解	ワン・アーソロジーⅠ	ワン・アーソロジーⅡ
ワン・アーソロジーⅢ	Basics for Science Communication in English		

課程専門科目　応用生命科学課程専門科目

農芸化学概論Ⅰ	農芸化学概論Ⅱ	分析化学	生物無機化学
環境土壌学	土壌生態学	植物栄養学	植物分子生理学
有機化学	生物制御化学	生物有機化学	微生物生理学
細胞微生物学	微生物遺伝学	応用微生物学	微生物生態学
生物情報科学Ⅰ	生物情報科学Ⅱ	タンパク質・酵素学Ⅰ	タンパク質・酵素学Ⅱ
生物化学	動物細胞生物学	栄養化学	食品化学
食品生化学	食品・生物機能化学	環境科学	天然物有機化学
発酵工学	食品微生物学	食品生物構造学	植物機能制御学
食品免疫・腸管機能学	栽培植物学	植物病理学	耕地生態学
作物学Ⅰ	昆虫遺伝学	植物育種学	バイオメトリックス
園芸学Ⅰ	持続的植物生産学	雑草学	園芸学Ⅱ
植物分子育種学	作物学Ⅱ	昆虫生理学	昆虫系統分類学
環境微生物学	植物分子遺伝学	ストレス生物学	保全生態学
昆虫病理学	栽培学	昆虫利用学	植物ウイルス学
菌類学	植物細菌学	昆虫生態学	農業気象学
造林学	森林植物学	森林動物学	森林土壌学
森林遺伝育種学	森林生態生理学	森林生態学	樹木学
樹木医学	野生動物管理論	森林水文学	自然保護論
アジア生物環境学	森林生態圏管理学	自然環境学汎論	生物環境物理学
森林風景計画学	森林経理学	森林政策学	森林利用学
水生動物学	水圏環境科学	水生生物化学	水生動物生理学
水圏生物工学	水圏天然物化学	魚類発生学	魚類遺伝育種学
浮遊生物学	水産食品科学	水生植物学	水生動物栄養学

漁業学	生物海洋学	水産資源学	水産増養殖学
海洋生態学	魚病学概論	応用遺伝学	応用免疫学
動物細胞制御学	動物細胞生化学Ⅰ	動物細胞生化学Ⅱ	動物行動学
動物生命システム科学Ⅰ	動物生命システム科学Ⅱ	組織学	発生学
神経生理学	内分泌・代謝生理学	体液生理学	環境衛生学
薬理学総論	実験動物学	臨床栄養学総論	臨床栄養学各論
生物多様性科学	生殖生物学	動物生命科学基礎	放射線動物科学
生物素材化学概論	森林生物化学	植物バイオマス化学	バイオマス生物工学
木材化学	高分子材料学Ⅰ	高分子材料学Ⅱ	生体高分子科学
生物材料組織学	セルロース科学	有機反応機構	バイオマスエネルギー工学
界面科学	木材物理学	材料強度学	木質材料学Ⅰ

課程専門科目　環境資源科学課程専門科目

ランドスケープエコロジー	自然共生社会論	園芸学Ⅰ	耕地生態学
森林風景計画学	森林植物学	樹木学	森圏管理学
保全生態学	緑地計画学	生態工学	都市農村計画学
ストレス生物学	森林生態学	自然環境学汎論	自然保護論
森林リモートセンシング	農村計画学	生物多様性科学	リモートセンシング情報解析学
森林生態圏管理学	アジア生物環境学	景観解析	沿岸環境動態論
昆虫生態学	農業気象学	持続的植物生産学	雑草学
レクリエーション計画論	森林社会学	国際農業プロジェクト論	生物環境物理学
森林経理学	森林政策学	森林利用学	森林土壌学
森林遺伝育種学	森林水文学	砂防工学	森林資源経済学
国際森林学	森林生産基盤学	森林生産工学	森林計測学
造林学	森林動物学	森林環境経済学	森林評価学
生物海洋学	水産資源学	構造力学	木材物理学
材料強度学	生物材料組織学	木質材料学Ⅰ	木質材料学Ⅱ
木質構造学	住宅計画論	高分子材料学Ⅰ	高分子材料学Ⅱ
建築住環境学	バイオメトリックス	木材化学	建築設計製図Ⅰ
建築設計製図Ⅱ	建築法規	建築生産施工	生物素材化学概論
生体高分子科学	土壌物理学	ポストハーベスト工学	制御工学
農地環境工学	水利環境工学	環境地水学	生物環境工学
生物機械工学	測量学	水理学	水文学
水工システム学	土質力学	農業基盤計画学	生体計測情報学
生物環境情報工学	水処理工学	植物環境システム学	バイオマスエネルギー工学
材料力学	農業IoT概論	生物プロセス工学	生物環境要素学
生物・環境熱力学	農業経営概論	ゲーム理論基礎	農業経済学
マクロ経済学	農政学	農業史	農業経営学
政治経済学	数量経済分析	比較農業政策論	開発経済学
フードシステム論	農村開発経済学	応用数量経済分析	国際農業経済論
比較農業法	農村社会学	地域農業マネジメント	協同組合論
地域社会概論	海外農業研究	国際農業生態学	国際森林環境学
国際植物利用学	国際水産開発学	国際農業工学	国際動物資源科学
環境経済学	環境生物化学	国際地域農業開発と生産者組織	国際開発実践論

課程専門科目	獣医学課程		
組織学	発生学	獣医解剖学	神経生理学
内分泌・代謝生理学	体液生理学	環境衛生学	薬理学総論
細胞情報薬理学	薬理学各論	動物細胞生化学Ⅰ	動物細胞生化学Ⅱ
細菌学	ウイルス学	実験動物学	応用遺伝学
応用免疫学	動物行動学	臨床栄養学総論	臨床栄養学各論
食品衛生学	寄生虫学	動物感染症学	病理学総論
毒性学	人獣共通感染症学	公衆衛生学総論	獣医衛生学
生殖生物学	獣医魚病学	内科学総論・呼吸器病学	循環器病学
消化器病学	肝臓病学	泌尿器病学	内分泌病学Ⅱ
臨床病理学	内分泌病学Ⅰ	獣医事法規	外科学・手術学総論
眼科学	麻酔・鎮痛学	画像診断学	臨床繁殖学
家禽疾病学	病理学各論	外科消化器病学	外科泌尿生殖器病学
外科呼吸器循環器病学	外科軟部組織病学	獣医疫学	神経病学
血液病学	皮膚病学	運動器病学	神経外科学
馬臨床学	産業動物臨床学Ⅰ	産業動物臨床学Ⅱ	産業動物臨床学Ⅲ
臨床薬理学	臨床行動学	野生動物医学	科学プレゼンテーション
獣医倫理・動物福祉学	放射線生物学	医療面接・コミュニケーション	

専修専門科目	応用生命科学課程		
生命化学・工学専修			
応用物理工学実験	応用環境科学実験	応用微生物学実験	応用生物化学実験
生命化学・工学実習			
応用生物学専修			
応用生物学基礎実験Ⅰ	応用生物学基礎実験Ⅱ	フィールド農学基礎実習	フィールド農学応用実習
フィールド農学集中実習	応用生物学専門実験	応用生物学研究演習	
森林生物科学専修			
森林科学基礎実習Ⅰ	森林科学基礎実習Ⅱ	森林科学基礎実習Ⅲ	森林科学基礎実習Ⅳ
森林生物科学実験	森林風景計画実習	森林政策学演習	森林利用学実習
森林科学総合実習	森林経理学実習	森林土壌学実験	
水圏生物科学専修			
水圏生物科学実験Ⅰ	水圏生物科学実験Ⅱ	水圏生物科学実験Ⅲ	水圏生物科学実験Ⅳ
水圏生物科学実習	漁業学実習	水産実習	
動物生命システム科学専修			
動物生命システム科学実習Ⅰ	動物生命システム科学実習Ⅱ	動物生命システム科学実習Ⅲ	動物生命・形態学実習
動物生命・牧場実習	動物生命システム科学実習Ⅳ	動物生命システム科学実習Ⅴ	動物生命システム科学実習Ⅵ
動物生命システム科学演習			
生物素材化学専修			
生物材料生物学実験	生物材料化学実験	生物材料物理学実験	生物素材化学実験Ⅰ
生物素材化学実験Ⅱ	バイオマス科学実習	生物素材化学実習	生物素材化学演習

専修専門科目	環境資源科学課程		
緑地環境学専修			
緑地デザイン実習	ランドスケープエコロジー実習	緑地環境実地実習	保全生態学実習
応用生物学基礎実験Ⅰ	緑地環境学研究演習		

森林環境資源科学専修

森林科学基礎実習Ⅰ	森林科学基礎実習Ⅱ	森林科学基礎実習Ⅲ	森林科学基礎実習Ⅳ
森林生物科学実験	森林風景計画実習	森林政策学演習	森林利用学実習
森林科学総合実習	森林経理学実習	森林土壌学実験	

木質構造科学専修

生物材料生物学実験	木質構造科学実験	生物材料物理学実験	生物材料化学実験
森林科学実習	木質構造科学実習	建築設計製図Ⅲ	建築設計製図演習Ⅰ
建築設計製図演習Ⅱ	木質構造科学演習		

生物・環境工学専修

応用解析および演習Ⅰ	生物・環境工学実験Ⅰ	生物・環境工学実験Ⅱ	生物・環境工学実験Ⅲ
応用解析および演習Ⅱ	情報処理演習	水理学演習	生物環境工学演習
測量・空間情報解析実習	機械設計及び製図	生物・環境工学フィールドワーク	生物・環境工学実習

農業・資源経済学専修

農村調査概論	農業・資源経済学演習Ⅰ	農業・資源経済学演習Ⅱ	農業・資源経済学演習Ⅲ
農作業実習	地域経済フィールドワーク実習	農業・資源経済学研究演習	

フィールド科学専修

生物多様性科学実習	保全生態学実習	ランドスケープエコロジー実習	森圏管理学実習
沿岸生態学実習	森林科学総合実習	フィールド科学演習	

国際開発農学専修

国際農学情報処理演習	農場実習	森林実習	臨海実習
牧場実習	英語表現法	国際農学実験・実習Ⅰ	国際農学実験・実習Ⅱ
海外実習	ISAD Food Resources	ISAD Economics	ISAD Environmental Science
国際開発農学概論			

専修専門科目　獣医学課程

獣医学専修

組織学実習	解剖学実習	生体機能学実習	細菌学実習
食品衛生学実習	ウイルス学・免疫学実習	実験動物学実習	獣医学基礎実習
獣医公衆衛生学実習	寄生虫学実習	病理学実習	基礎臨床学実習Ⅰ
動物衛生学実習	基礎臨床学実習Ⅱ	毒性学実習	基礎臨床学実習Ⅲ
大動物臨床・臨床繁殖実習	総合臨床学インターンシップ	応用獣医学インターンシップ	小動物内科臨床実習
小動物外科臨床実習			

（b）教養学部での授業科目名（2022年度開講）

総合科目D（人間・環境）

環境と生物資源～生物多様性と保全～、～農学フィールドワーク論～
食糧と環境～海洋生物資源の利用と特性～、～農業生産学概論～
森林環境資源学～森とダム、森の最終形、森と癒し～
水と土の環境科学～食を支える水と土の環境科学～
住環境の科学～人と木と木造建築～
放射線環境科学～放射線農業影響学～

総合科目E（物質・生命）

微生物の科学～微生物の世界～、～微生物のバイオテクノロジー～
アグリバイオロジー～植物の機能とその利用～
植物医科学～植物医科学概論～
応用動物科学Ⅰ～動物生命科学へのいざない～
応用動物科学Ⅱ～高等動物の比較生物学：獣医学へのいざない～
食の科学～食の科学～
天然物の科学～生命を支える生理活性物質～
生物素材の科学～バイオマスの科学～
森の生物学～共存する森林生物～
海の生命科学～海の生命科学～

全学自由研究ゼミナール

微生物の生きざま―基礎から応用研究のはなし―
動物細胞研究法入門
地球医のすすめ：タネ蒔く農学部有志
環境浄化・保全の微生物学
伊豆に学ぶプラス
獣害問題とは何の問題か
チョコレートはお好き？外来種は？
Agric Scientists Studio Interview
古典落語で知る江戸の自然・文化
ワンパクなタンパク質を科学する：実習編

全学体験ゼミナール

海の生命科学入門
春の奥秩父を巡る、秋の奥秩父を巡る
危険生物の知識（春編、秋編）
体験して考える森林ガイドボランティアの現在と未来
徹底検証・スギ&ヒノキ～もっと知ろう、木材のこと～
東大の別荘「癒しの森」で心も体もリフレッシュ
森に学ぶ
伊豆に学ぶ
房総の常緑樹林で森林動態を学ぶ
房総の森と生業（なりわい）を学ぶ
ダムと土砂と海
森の魅力をマッピング～GPSを使ったオリジナル地図づくり～
森のエネルギーを使いこなす
人の手で作り管理する森林
雪の森林に学ぶ～北海道演習林

初年次ゼミ

木質バイオマスの利用の意義と方法について考える
生物の生き様を支える遺伝子/タンパク質
私たちの身近にあるワンパクなタンパク質を科学する
生物多様性と生態系の持続可能性
どうしてこんなに違うのか？哺乳類の種差を考える。
日常生活の視点から食料と農山村を考える
農林水産バイオマス資源の持続的な利用
食品の選択行動について考える
植物工場は持続可能な農業システムか？
「食の問題」を科学者目線で考えよう
生物が人類にとって有用な化合物を作るしくみを考える
植物研究入門～生態系からゲノム編集まで～

（c）キーワードから見た農学部の教育・研究の取り組み
（1）持続可能な循環型社会の構築＝農学

私たち人間は、産業革命や技術革新を通して生活の質の向上を目指してきた。実際に生活は便利になり、人類は人口の増加を伴って発展してきたが、それに伴い、資源や食料問題、地球温暖化や異常気象などの環境問題、生活習慣病や感染症など、様々な問題が生じている。これら、個人レベルから地球レベルまでと幅広い問題の多くは人類の営みによってつくられているわけだが、これらの負担を未来の世代に背負わせるのか？

農学とは、今後長きにわたり持続可能な循環型社会を構築する学問である。そこには、宇宙船地球号という考えのもと、我々人類だけではなく自然との調和・共生を通して、我々の衣食住に関する問題解決や質の向上を目指すという思いがある。つまり、地球のものを『使う』だけではなく、地球を『育てる』ことが農学の使命だと考える。

ここでは、持続可能な循環型社会を構築する上で直面する諸問題を解決する農学部の取り組みについて、環境、食と健康、そして生物資源という３つの分野を紹介する。同じキーワードの中でも各専修で特色のある取り組みがあり、そしてこれら３つの分野がお互いに強く結びついていることが分かる。

(2)キーワード「環境」
農学部の「環境」＝自然や社会との共生を目指す

新たな国際協力・農業開発

- 持続的な農業･環境･資源利用技術を開発する
- 現地の人々の本質的ニーズをとらえる
- 異なる学問分野を学び俯瞰的な考え方を身につける
- 実践と観察から生きた知識を得る
- 学問と政策と実践をつなぐ総合力と創造力を養う

節水灌漑の水田調査（インドネシア）

サンプリング方法の創意工夫中（農場実習）

食料生産のための環境を守る

- 70億の人口を養う環境
- 安全･安心の食は環境から
- 環境を救う「植物力」
- 福島の農業を放射能から守る
- 海外に広がる数多くの研究フィールド
- 遺伝子、ゲノムから生態系まで多彩なアプローチ

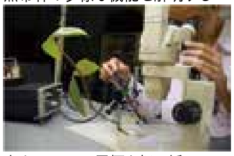
アルカリ土壌地帯の植生回復（中国）

水田の放射性セシウム調査（福島）

森林の環境を知り、森林を守り育てる

- 森林の有する多様な機能
  CO_2吸収、水源かん養、土砂災害防止、快適環境の形成、生物多様性の保全など
- 森林の荒廃や消失
  人間活動の拡大、自然災害、病虫獣害など
- 森林を総合的に理解し、森林の保全、育成、持続的な利用に活かす

高さ90mのクレーンで観測を行い、熱帯林の多様な機能を解明する


太さ50μmの電極を根に挿入して、樹木のストレス耐性を解明する

海洋環境・生態系と人類の共存

- 海洋：生命誕生の場
  多種多様な生物と生態系
  地球最後のフロンティア
- 水圏における生物生産と物質循環過程の解明
- 水圏生態系の保全と利用
  生態系サービスの享受
  自然と人間のつき合い方
- 持続可能性の追求
  地球の有限性と環境収容力
  水産資源管理、生態系管理
- 地球的な視野をもって活躍できる人材の育成

学術研究船「白鳳丸」による調査航海

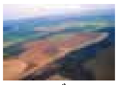
臨海実習での定置網揚げ

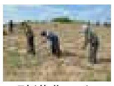
ウナギの卵とレプセファルス幼生

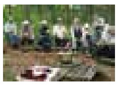
健全でうるおいのある「みどり」を育む

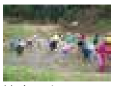
- 地球環境とみどり
  グローバルな環境問題によって危機的な状況に瀕している「みどり」の再生と持続的利用が必要
- 成熟社会とみどり
  人口減少や高齢化など社会構造の転換に対応した、人と「みどり」の新たな関係づくりが必要
- 持続型社会とみどり
  人間活動と自然環境の調和した「みどり」豊かな社会の実現には、グローバル・ローカルの視点が必要

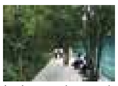
人と自然が調和した緑地環境＝「ランドスケープ」を目指して！


アマゾンの農地開発


砂漠化した土地の緑化


生きがいの場としてのみどり


教育の場としてのみどり


都市に再生した森

海を渡る黄砂

農学と工学を融合し、環境を科学する

- 生物と環境をはかり解析する
  ・ミクロスケール（細胞、土粒子）からマクロスケール（地域、地球規模）まで
- 食と環境を科学し応用する
  ・物質循環、持続可能な農業
  ・ポストハーベスト、食の安全・安心
  ・農業ロボット、精密農業、植物工場
- 地域環境を考え地域をデザインする
  ・農業、農地の多面的機能
  ・グリーンイノベーション

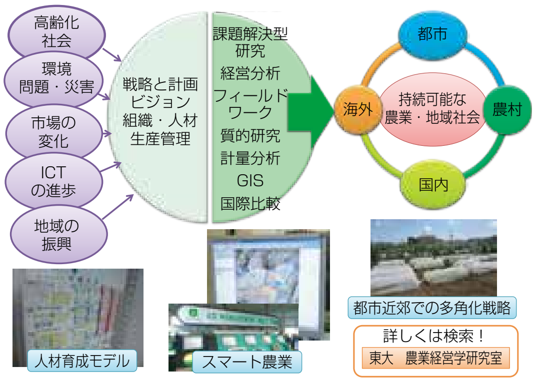
水田圃場へのICT機器の設置

畑地からのCO_2ガス放出に関する調査

生態系・生物多様性の保全と自然共生社会の実現を目指して

自然の中で科学する
フィールド科学への招待
フィールド科学専修

フィールドワークから、農業や地域の課題解決策を描き出す研究室です

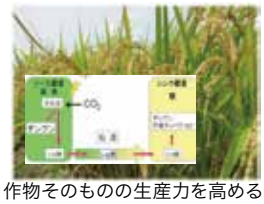


(3)キーワード「食・健康」
農学部の「食・健康」＝地球の未来を救う第一歩

農学から見た「食・健康」
- 「生産」から「消費」まで
- 食糧資源の確保
- いかに「作る」か
  いかに「食べる」か
- おいしく食べて健康に
  「健康寿命延伸」
- 食を通じた〝グローバルスタンダード〟

食べものに関わる多様な分野

食料生産の新展開
- 食料生産の鍵は、
  ①作物の収量の向上
  ②病害虫の最適制御
- ゲノム情報の利用による生理的機能の改良
- 作物の遺伝的特徴と環境との関係の解明
- 広がる海外での研究展開


作物そのものの生産力を高める

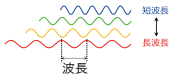
作物の病気や害虫を制圧する

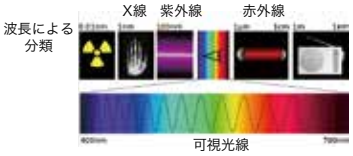
水産資源の利活用
- 動物性タンパク質源としての水産物
  世界で15%、後発国では50%以上
- 食文化「和食」と「だし」
- 豊富な健康機能性

世界文化遺産「和食」と「だし」

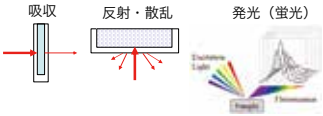
地球と海の恵みの一部を無駄なく最後まで利用する

光で食を科学する
- 食の分析に利用される光
  光は波である（波動性）
  波の周期的な長さ＝波長
  光を波長毎に分ける＝分光法





- 光と物質の相互作用
  物質は特定の波長の光と相互作用する
  相互作用による現象：
  吸収・反射・散乱・発光（蛍光・燐光）
  どんな成分がどれだけあるかが判る



- 食の安心・安全を支える光技術

健康・病気と食品
- 人口増加と食料不足
- 栄養不良と栄養過多
- 健康食品とサプリメント
- 食品（遺伝子組換え食品を含む）の安全と安心
- 生命活動の異常と病気
- 病気の予防と治療薬の開発
- 食品と飼料

世界の多くの地域では未だに食料・栄養不足

ヒトには栄養不足の食品、資源動物には有用な飼料

動物とヒトの健康
- 環境因子の動物への影響
- 昆虫が媒介する病気の制御
- 絶滅危惧動物の遺伝子維持
- 動物の多様性の維持
- 動物の進化
- 環境に応答した育種
- 細胞を取り巻く体内環境

病原体媒介昆虫の野外調査（バングラデシュ）

マウス胚・胎子・胎盤解剖実習（3年次）

産業動物の健康を守る
- 家畜の健康保持
- 繁殖効率の向上
- 生産性の改善
- 安全、安心な畜産食品
- 学問、政策、実践とをつなぐ総合力

⇦ 育種・繁殖学
⇦ 栄養学
⇦ 獣医学
⇦ 経済学
⇦ 飼養・管理学
⇦ 草地学

臨床繁殖学実習

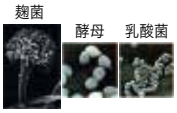
家畜衛生学実習

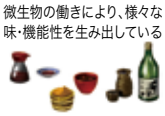
家畜飼養学実習

病理診断学実習

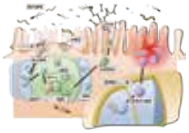
大動物臨床学実習

微生物と食・健康
発酵・醸造に利用される微生物





微生物と腸管との相互作用
腸内においては、様々な微生物がすみ、腸管との相互作用によって免疫が制御されている



農業を支える微生物

水田土壌には多くの種類の微生物がすみ、物質循環を司っている

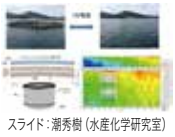
(4)キーワード「生物資源」
農学部の「生物資源」＝持続可能な社会を担う

生物資源：動物

自然の恵み⇔育てる
- ●自然の恵み
  - ・安全性・安定供給性
  - ・乱獲・生態系への影響
- ●育てる
  - ・経済性（高付加価値化、生産性）
  - ・環境への影響（肥料、産業ゴミ）

食料⇔非食料
- ●食料
  - ・畜産・漁業
  - ・安定供給性・競争力
- ●非食料
  - ・鶏卵→ウイルス培養
  - ・昆虫→生物農薬、紡績
  - ・実験動物→医薬品

写真：美辺詩織（獣医繁殖育種学研究室）
ウシの繁殖率をあげるフェロモンの探索


スライド：瀬秀樹（水産化学研究室）
新技術を駆使した水産物の出荷時期調節と高付加価値化

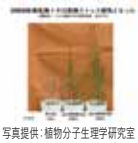
写真：川本宗孝（昆虫遺伝研究室）
無限の可能性を秘めたカイコによる物質生産

使役動物の感染症対策：動物福祉と公衆衛生

生物資源：植物

資源の効率的な利用
- ●食料として
  - ・農作物の生産性向上
  - ・過酷な環境でも栽培可能な植物の創出
- ●非食料として
  - ・バイオエネルギー
  - ・有用物質生産（医薬品など）

資源の持続的な利用
- ●多様な資源
  - ・生態系サービス
  - ・野生植物の持つ遺伝資源
- ●自然共生社会
  - ・生物多様性
  - ・里地里山・農村景観


写真提供：植物分子生理学研究室
乾燥ストレス耐性を有する組換えイネ

写真提供：生物機械工学研究室
エネルギー資源作物の栽培

写真提供：生物環境工学研究室
植物を利用したインフルエンザワクチン生産

写真：緑地環境学専修ウェブサイト http://www.a.u-tokyo.ac.jp/departments/faculty_ryokuchi.html
農地・農村のデザインと農業生態系の保全

森林の生物資源

森林土壌を調べる
土壌は、森林の持続性の最重要指標

森林植生の生理・生態を調べる
生物資源の生育メカニズムを分析

木を使いながら、森を守る
情報技術の活用

健全な森林のサイクルを検証・実現

森林土壌を調べる

森林植生の生理・生態を調べる

健全な森林のサイクルを検証・実現

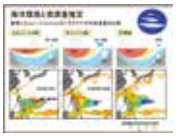
情報技術（ICT）を活用し木材の利用を促進する

水圏（海・河川等）の生物資源

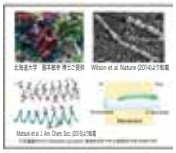
地球上の70%は水圏
- ●多様な環境
  - ・生物資源の多様性
  - ・生物資源の莫大な生産性
- ●未利用生物資源
  - ・食料としての可能性
  - ・食料以外の利用（医薬品・燃料等）

「海の恵み」は誰の物？
- ●再生産可能（子孫が増える）資源
  - ・適切な資源管理が必要
  - ・どう増やすか？

生物学、化学、物理学、数学すべてが貢献


日本に来るウナギの量を調べる

モデルで生物資源量を推定


生物の中に棲む生物も貴重な生物資源

目に見えない藻も生物資源

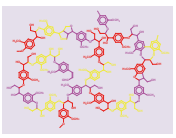
木質資源の高度利用

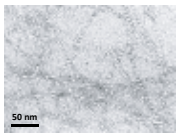
化石資源→ 生物資源
- ●化石資源
  - ・生活を快適で便利に
  - ・枯渇性で CO_2 増加
- ●生物資源
  - ・衣・食・住の基本
  - ・持続的で CO_2 削減

豊富な木質資源で生活を快適で便利に！
- ・グリーンケミストリー
- ・バイオテクノロジー
- ・材料工学

低炭素社会に貢献する基盤的研究

環境にやさしい、植物由来のバイオプラスチック


木材の分析化学により新しい利活用に展開



鋼鉄より軽くて強い、木材由来のセルロースナノファイバー

木や草を分解する酵素でバイオエタノール燃料

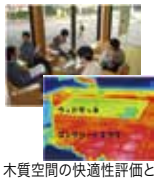
生物資源の利用法

木材を使って炭素を固定
- ●建築構造材
  - ・新しい材料・接合法開発（木材の可能性）
  - ・木造らしい建築物（木を魅せる）
- ●家具・内装材
  - ・快適性（木で心地良い空間に）
  - ・環境改善（吸放湿性、断熱性など）
- ●土木的利用
  - ・木製ダム・木橋（意外と長持ち）
  - ・ガードレール・遮音壁（見た目も穏やか）
- ●その他いろいろ
  - ・楽器（樹種が違うと音色も違う）
  - ・文具（香り・手触りの良さ）
  - ・玩具（子供への安全性）　等々

木を賢く使って、地球環境にも貢献！

大地震にも耐えられる新しい耐力壁を開発

木管楽器の音色はリードの材質・形で決まる？


木質空間の快適性評価とデッキ表面温度の比較

木質構造による美しい架構と五月祭2016で製作した木造展示物

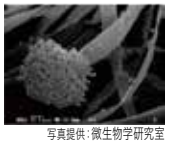
微生物とその酵素の利用

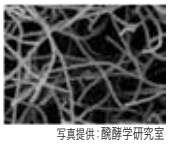
食飼料を造る
- ●真菌類（カビ・酵母）
- ●乳酸菌・酢酸菌など

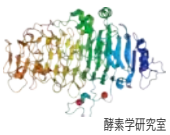
抗生物質（有用物質）を造る
- ●放線菌など

健康に役立つ物質を創る
- ●ビフィズス菌の分解酵素
- ●オリゴ糖合成酵素など

物質生産をデザインする
- ●大腸菌などを用いる


写真提供：微生物学研究室
味噌・醤油・酒などを造る麹菌


写真提供：醗酵学研究室
抗生物質などを造る放線菌


酵素学研究室
ビフィズス菌がヒトの母乳のオリゴ糖を分解する酵素

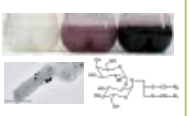
Standards in genomic sciences
応用微生物学研究室
二酸化炭素を固定する水素細菌

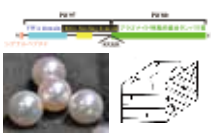
化学を利用した生物資源

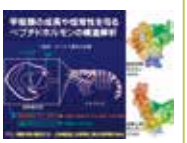
生物資源→有用物質
- ●天然物質
  - ・植物のホルモン
  - ・動物のタンパク質
  - ・微生物の代謝物

物質の探索と有効利用
- ●有機化学
- ●分析化学
- ●分子生物学
  - ・生命現象の解析
  - ・分子の同定
  - ・分子の構造解析
  - ・分子の大量合成
  - ・生命現象の再現
  - ・産業応用への発展

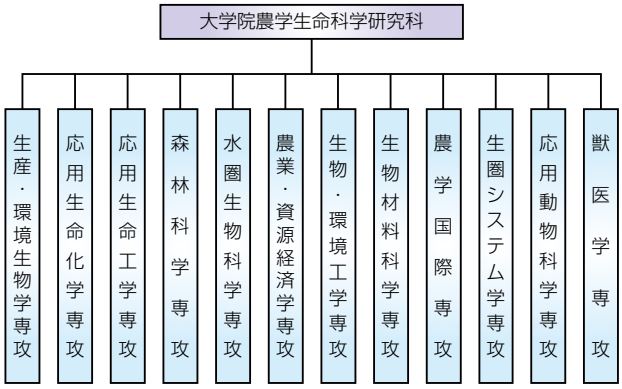
植物ホルモン


微生物による金属ナノ粒子


生体鉱物


動物ホルモン

(2)大学院教育



我々の生活は、生物資源に依存している。農学生命科学は、植物や動物、微生物の生物機能を活用して、人類生存の基盤である生物資源の生産と環境の持続性に貢献するための学問分野である。世界人口の急激な増加が予測されているなか、安全な食料の供給と地球環境の保全が人類にとって最大の課題であり、その解決に向けた技術的基盤や社会的な対策を担う最も重要な研究分野として注目されている。大学院教育では、食料や環境に関する複雑かつ多様な課題に対して専門の立場から取り組める人材を育成することを目標にしている。そのために本研究科は、生産・環境生物学、応用生命化学、応用生命工学、森林科学、水圏生物科学、農業・資源経済学、生物・環境工学、生物材料科学、農学国際、生圏システム学、応用動物科学、獣医学（4年制博士課程）の12専攻を擁し、農林水畜産業の基盤となる生命科学や生態系管理のためのフィールド科学、社会制度や情報に関する人文・社会科学まで非常に幅広い教育研究が行われている。さらに、生態調和農学機構や演習林、牧場、動物医療センター、水産実験所、アジア生物資源環境研究センター、アグロバイオテクノロジー研究センターなどの充実した附属施設が農林水畜産業の現場に即した教育研究を支えている。また、食の安全・安心に対する社会の要請に応える研究の推進を目的に食の安全研究センターが設置され、産学連携による研究が活発に行われている。 修士課程では、講義、演習、修士論文研究を、博士課程では、主に演習、博士論文研究を通じて高度な専門性を身につける教育がなされている。その一方で、先端化、細分化した研究成果を統合し活用できる人材の育成を目的とした専攻横断的な教育プログラムも用意されている。たとえば、ゲノムをはじめ多種多様な生命情報の蓄積が急激に進むなか、それらを統合し活用できる人材育成のための教育プログラムとしてアグリバイオインフォマティクス教育研究ユニットが、学際的な研究交流を通して農学に関わる専門領域の相互理解を深めることを目的としたアグリコクーンが、それぞれ設置されている。

本研究科と交流協定のあるアジアを中心とした海外の大学の研究者を受け入れ、英語で博士課程の教育を行う「環境調和農学特別コース」を設置し、この修了者を通じた学術・研究交流の国際ネットワーク形成を目指している。また平成22年10月から、研究科初の英語のみで履修・修了できる修士課程「国際農業開発学コース（IPADS）」を開始し、アジアのみならず中南米、欧米からの留学生を受け入れている。日本人学生も英語で講義、演習を受ける機会が増え、留学生との交流も相まって本研究科における教育の国際化が着実に進展している。平成24年度からは博士課程も開始した。また平成27年度からはドイツ・ボン大学の開発研究センター（ZEF）との本格的な教育交流がはじまった。平成28年2月に全学協定書を締結し、相互の教員の訪問による単位を伴う交換講義、ドイツの学生の訪日による共同実習が展開されている。

令和4年4月の本研究科の入学者は、修士課程296名、博士課程114名で、そのうちアジアを中心とした留学生が97名含まれている。大学院修了者は、大学や研究所等の教育研究機関、官公庁、民間企業等に職を得て、常に社会の中核を担う存在になっている。本研究科は、時代の要請に応えられる人材を社会に輩出していくための努力を続けている。

弥生講堂アネックス

向ヶ岡ファカルティハウス

農正門

弥生キャンパス木質構造建築物（写真提供：生物材料科学専攻）

共同実習のために来日したボン大学グループとIPADS学生の交流

IPADS ボン大学との共同講義風景
（写真提供：IPADS）

(a)大学院（修士課程）での授業科目名

生産・環境生物学専攻

作物学特論	園芸学特論	昆虫遺伝・発生生理学	昆虫ウイルス・細胞工学
育種学特論	栽培学特論	植物病理学特論	植物ウイルス学特論
植物細菌学特論	植物菌類学特論	生物測定学特論	植物分子遺伝学特論
昆虫学特論	総合有害生物管理学	生産生態学特論	Bioresource Sciences for Asia
Application of Biometrics and Biostatistics to Agricultural Science	Fundamentals of Plant Production and Protection	Fundamentals of Bioresources and Biotechnology	生産・環境生物学特別講義
Introduction to the Agricultural and Environmental Biology	応用生物学特別実験Ⅰ	応用生物学特別実験Ⅱ	応用生物学演習Ⅰ
応用生物学演習Ⅱ	基礎生物学特別実験Ⅰ	基礎生物学特別実験Ⅱ	基礎生物学演習Ⅰ
基礎生物学演習Ⅱ	資源創成生物学特別実験Ⅰ	資源創成生物学特別実験Ⅱ	資源創成生物学演習Ⅰ
資源創成生物学演習Ⅱ	生産生態学特別実験Ⅰ	生産生態学特別実験Ⅱ	生産生態学演習Ⅰ
生産生態学演習Ⅱ			

応用生命化学専攻

Plant Nutrition and Physiolosy	植物栄養生理学特論（1）	植物栄養生理学特論（2）	生物機能開発化学
生命化学フロンティアⅠ	生命化学フロンティアⅡ	天然物構造解析法	有機合成化学
天然物生理化学	細胞調節生化学	環境土壌資源論	生物無機化学
動物生理化学	食品応用生化学	食品機能化学	食品物理化学
生理活性化学	ゲノムと生体情報の科学	正常と異常の生命科学	Animal Biological Chemistry and Physiology
Bioactive Molecules: Structures, Functions and Biosyntheses	応用生命化学特別実験Ⅰ	応用生命化学特別実験Ⅱ	応用生命化学演習

応用生命工学専攻

情報生命工学	醗酵微生物学	分子育種学	生命工学フロンティアⅠ
生命工学フロンティアⅡ	生体触媒分子論	細胞遺伝学	微生物機能開発学
環境微生物学	醗酵醸造学	植物機能工学	pplied Utilization of Microbial Function/Metabolism
Microorganisms in Environments	応用生命工学特別実験Ⅰ	応用生命工学特別実験Ⅱ	応用生命工学演習

森林科学専攻

基礎造林学	造林学特論	熱帯森林学	森林土壌学特論
森林植物学特論	環境植物学	樹病学	森林生態学特論
樹木生理学	森林昆虫学	土壌動物学	環境動物・倫理学
森林経理学特論	森林空間計画論	森林計測学特論	林政学特論
外国森林政策学	林業経済論	資源環境経済学	林業史
森林利用学特論	森林基盤整備計画論	森林生産工学特論	森林機械作業論
森林作業システム学	森林水文学特論	土砂水理学	砂防工学特論
森林環境物理学	環境緑化工学	砂防・治山事業論	造園学特論
風致工学	森林レクリエーション論	環境設計特論	国際森林学特論
持続的森林圏経営論	森林生態圏管理学特論	森林圏生態学	森林圏生物動態学
生物多様性科学総論	森林圏管理システム学	森林流域管理学	森林圏水循環機能学
森林生物機能学	森林遺伝子機能開発学	森圏管理学特論	森林共生生物学
森林科学特別実験	森林科学特別演習	森林科学海外実習Ⅰ	森林科学海外実習Ⅱ
森林科学セミナーⅠ	森林科学セミナーⅡ		

水圏生物科学専攻

水圏生物生態解析法	水圏生命科学実験法	海洋科学概論	生物海洋学総論
海洋生物学	海産哺乳動物学	水産資源管理学	水産海洋学
水族遺伝育種学	魚類免疫学	魚病学特論	水族生理学特論
水圏生物システム学	水圏生物化学特論	水圏天然物化学特論	水圏生物工学特論

水圏生物科学専攻（続き）

水圏生命科学特論
海洋生物資源利用論
水産資源学演習
水圏生物環境学演習
魚病学演習
水族生理学演習
水圏生物化学演習
水圏天然物化学演習
水圏生物工学演習
水圏生物システム学演習
プランクトン学演習
海洋微生物学演習
海洋資源解析学演習
海洋資源生態学演習
海洋環境動態学演習
海洋行動生態計測演習
海洋問題演習Ⅲ
水圏生物科学演習
水圏生物科学特別講義Ⅰ
水圏生物科学特別実験Ⅰ

農業・資源経済学専攻

農業経営学特論Ⅰ
(Farm Management Ⅰ)
農業経営学特論Ⅱ
(Farm Management Ⅱ)
農業経営学特論Ⅲ
(Farm Management Ⅲ)
農業経営学特論Ⅳ
(Farm Management Ⅳ)
農業経営学特論Ⅴ
(Farm Management Ⅴ)
農業経営学特論Ⅵ
(Farm Management Ⅵ)
農業経営学特論Ⅶ
(Farm Management Ⅶ)
農業経営学特論Ⅷ
(Farm Management Ⅷ)
農業構造動態論Ⅰ
(Trend of Agricultural Structure Ⅰ)
農業構造動態論Ⅱ
(Trend of Agricultural Structure Ⅱ)
農業構造動態論Ⅲ
(Trend of Agricultural Structure Ⅲ)
農業構造動態論Ⅳ
(Trend of Agricultural Structure Ⅳ)
農業構造動態論Ⅴ
(Trend of Agricultural Structure Ⅴ)
農業構造動態論Ⅵ
(Trend of Agricultural Structure Ⅵ)
農業構造動態論Ⅶ
(Trend of Agricultural Structure Ⅶ)
農業構造動態論Ⅷ
(Trend of Agricultural Structure Ⅷ)
農業史特論Ⅰ
(History of Agriculture Ⅰ)
農業史特論Ⅱ
(History of Agriculture Ⅱ)
農業史特論Ⅲ
(History of Agriculture Ⅲ)
農業史特論Ⅳ
(History of Agriculture Ⅳ)
農業史特論Ⅴ
(History of Agriculture Ⅴ)
農業史特論Ⅵ
(History of Agriculture Ⅵ)
農業史特論Ⅶ
(History of Agriculture Ⅶ)
農業史特論Ⅷ
(History of Agriculture Ⅷ)
開発経済学特論Ⅰ
(Development Economics Ⅰ)
開発経済学特論Ⅱ
(Development Economics Ⅱ)
開発経済学特論Ⅲ
(Development Economics Ⅲ)
開発経済学特論Ⅳ
(Development Economics Ⅳ)
開発経済学特論Ⅴ
(Development Economics Ⅴ)
開発経済学特論Ⅵ
(Development Economics Ⅵ)
開発経済学特論Ⅶ
(Development Economics Ⅶ)
開発経済学特論Ⅷ
(Development Economics Ⅷ)
資源・環境経済学特論Ⅰ
(Resource and Environmental Economics Ⅰ)
資源・環境経済学特論Ⅱ
(Resource and Environmental Economics Ⅱ)
資源・環境経済学特論Ⅲ
(Resource and Environmental Economics Ⅲ)
資源・環境経済学特論Ⅳ
(Resource and Environmental Economics Ⅳ)
資源・環境経済学特論Ⅴ
(Resource and Environmental Economics Ⅴ)
資源・環境経済学特論Ⅵ
(Resource and Environmental Economics Ⅵ)
資源・環境経済学特論Ⅶ
(Resource and Environmental Economics Ⅶ)
資源・環境経済学特論Ⅷ
(Resource and Environmental Economics Ⅷ)
国際農村開発学特論Ⅰ
(International Rural Development Ⅰ)
国際農村開発学特論Ⅱ
(International Rural Development Ⅱ)
国際農村開発学特論Ⅲ
(International Rural Development Ⅲ)
国際農村開発学特論Ⅳ
(International Rural Development Ⅳ)
国際農村開発学特論Ⅴ
(International Rural Development Ⅴ)
国際農村開発学特論Ⅵ
(International Rural Development Ⅵ)
国際農村開発学特論Ⅶ
(International Rural Development Ⅶ)
国際農村開発学特論Ⅷ
(International Rural Development Ⅷ)
農業・資源経済学特別講義Ⅰ
(Special Lectures in Agricultural and Resource Economics Ⅰ)
農業・資源経済学特別講義Ⅱ
(Special Lectures in Agricultural and Resource Economics Ⅱ)
農業・資源経済学特別講義Ⅲ
(Special Lectures in Agricultural and Resource Economics Ⅲ)
農業・資源経済学特別講義Ⅳ
(Special Lectures in Agricultural and Resource Economics Ⅳ)
農業・資源経済学特別講義A
(Special Lectures in Agricultural and Resource Economics A)
農業・資源経済学特別講義B
(Special Lectures in Agricultural and Resource Economics B)
外国農業特論
(Special Lecture on foreign agriculture)
農業経営学演習Ⅰ
(Seminar in Farm Management Ⅰ)
農業経営学演習Ⅱ
(Seminar in Farm Management Ⅱ)
農業経営学演習Ⅲ
(Seminar in Farm Management Ⅲ)
農業経営学演習Ⅳ
(Seminar in Farm Management Ⅳ)
農業経営学演習Ⅴ
(Seminar in Farm Management Ⅴ)
農業経営学演習Ⅵ
(Seminar in Farm Management Ⅵ)
農業経営学演習Ⅶ
(Seminar in Farm Management Ⅶ)
農業経営学演習Ⅷ
(Seminar in Farm Management Ⅷ)
農業構造動態論演習Ⅰ
(Seminar in Trend of Agricultural Structure Ⅰ)
農業構造動態論演習Ⅱ
(Seminar in Trend of Agricultural Structure Ⅱ)
農業構造動態論演習Ⅲ
(Seminar in Trend of Agricultural Structure Ⅲ)
農業構造動態論演習Ⅳ
(Seminar in Trend of Agricultural Structure Ⅳ)
農業構造動態論演習Ⅴ
(Seminar in Trend of Agricultural Structure Ⅴ)
農業構造動態論演習Ⅵ
(Seminar in Trend of Agricultural Structure Ⅵ)
農業構造動態論演習Ⅶ
(Seminar in Trend of Agricultural Structure Ⅶ)
農業構造動態論演習Ⅷ
(Seminar in Trend of Agricultural Structure Ⅷ)
農業史演習Ⅰ
(Seminar in History of Agriculture Ⅰ)
農業史演習Ⅱ
(Seminar in History of Agriculture Ⅱ)
農業史演習Ⅲ
(Seminar in History of Agriculture Ⅲ)
農業史演習Ⅳ
(Seminar in History of Agriculture Ⅳ)
農業史演習Ⅴ
(Seminar in History of Agriculture Ⅴ)
農業史演習Ⅵ
(Seminar in History of Agriculture Ⅵ)
農業史演習Ⅶ
(Seminar in History of Agriculture Ⅶ)
農業史演習Ⅷ
(Seminar in History of Agriculture Ⅷ)
開発経済学演習Ⅰ
(Seminar in Development Economics Ⅰ)
開発経済学演習Ⅱ
(Seminar in Development Economics Ⅱ)
開発経済学演習Ⅲ
(Seminar in Development Economics Ⅲ)
開発経済学演習Ⅳ
(Seminar in Development Economics Ⅳ)
開発経済学演習Ⅴ
(Seminar in Development Economics Ⅴ)
開発経済学演習Ⅵ
(Seminar in Development Economics Ⅵ)
開発経済学演習Ⅶ
(Seminar in Development Economics Ⅶ)
開発経済学演習Ⅷ
(Seminar in Development Economics Ⅷ)
資源・環境経済学演習Ⅰ
(Seminar in Resource and Environmental Economics Ⅰ)
資源・環境経済学演習Ⅱ
(Seminar in Resource and Environmental Economics Ⅱ)
資源・環境経済学演習Ⅲ
(Seminar in Resource and Environmental Economics Ⅲ)
資源・環境経済学演習Ⅳ
(Seminar in Resource and Environmental Economics Ⅳ)
資源・環境経済学演習Ⅴ
(Seminar in Resource and Environmental Economics Ⅴ)
資源・環境経済学演習Ⅵ
(Seminar in Resource and Environmental Economics Ⅵ)
資源・環境経済学演習Ⅶ
(Seminar in Resource and Environmental Economics Ⅶ)
資源・環境経済学演習Ⅷ
(Seminar in Resource and Environmental Economics Ⅷ)
国際農村開発学演習Ⅰ
(Seminar in International Rural Development Ⅰ)
国際農村開発学演習Ⅱ
(Seminar in International Rural Development Ⅱ)
国際農村開発学演習Ⅲ
(Seminar in International Rural Development Ⅲ)
国際農村開発学演習Ⅳ
(Seminar in International Rural Development Ⅳ)
国際農村開発学演習Ⅴ
(Seminar in International Rural Development Ⅴ)
国際農村開発学演習Ⅵ
(Seminar in International Rural Development Ⅵ)
国際農村開発学演習Ⅶ
(Seminar in International Rural Development Ⅶ)
国際農村開発学演習Ⅷ
(Seminar in International Rural Development Ⅷ)

生物・環境工学専攻

生体計測情報学特論
生物環境基礎工学
生物環境情報工学特論Ⅰ
生物環境情報工学特論Ⅱ
農地環境工学特論
農地管理工学特論
水理学特論
水利環境工学特論
土壌物理学特論
環境地水学特論
地域環境工学特論Ⅰ
地域環境工学特論Ⅱ
生物環境調節学
生物環境工学特論
生物機械工学特論
生物物性学特論
生物加工システム工学
生物プロセス工学特論
生物システム工学特論Ⅰ
生物システム工学特論Ⅱ
エコロジカル・セイフティー学特論Ⅰ
エコロジカル・セイフティー学特論Ⅱ
生物・環境工学特別研究Ⅰ
生物・環境工学実験実習
生物・環境工学演習

生物材料科学専攻

生物素材科学特論
セルロース科学特論Ⅰ
セルロース科学特論Ⅱ
木造建築特論
木材乾燥学特論
木材物理学特論Ⅰ
木材物理学特論Ⅱ
木質構造学特論
木質材料学特論
住環境学特論
材料・住科学特別講義Ⅰ
材料・住科学特別講義Ⅱ
木材保存学特論
森林生物化学特論Ⅰ
森林生物化学特論Ⅱ
木材化学特論Ⅰ
(Basic Lignin Chemistry)
木材化学特論Ⅱ
(Advanced Carbohydrate Chemistry)
高分子材料科学特論Ⅰ
高分子材料科学特論Ⅱ
バイオマス化学特別講義Ⅰ
(Advanced Lignin Chemistry)
バイオマス化学特別講義Ⅱ
バイオマス化学特別講義Ⅲ
バイオマス化学特別講義Ⅳ
生物素材科学特別講義
生物材料科学特別実験Ⅰ
生物材料科学演習

生物材料科学専攻（木造建築コース）

木質構造学特論
木質材料学特論
木材保存学特論
木材利用システム学特論
基礎木材学
住環境学特論
資源環境経済学
建築生産特論
建築事例研究
建築設計製図特論
木造建築特論
構造解析特論
建築材料学特論
木質構造設計論
建築関連規格と法規
木造建築設計演習
建築事例研究実習
木造建築実験

農学国際専攻

国際水産開発学総論
(Global Fisheries Science and Policy)
国際水産開発学特論
(Global Fisheries Science and Economics)
国際水産開発学演習
(Seminar in Global Fisheries Science)
国際動物資源開発学
(Global Animal Resource Development)
国際動物機能開発学
(Functional Animal Sciences)
国際動物資源学演習
(Seminar in Global Animal Resource Science)
国際動物生産学実験
(Research in Global Animal Production Science)
国際植物資源学
(Global Plant Resources)
植物資源管理学
(Cropping System Technology)
国際植物資源学演習
(Seminar in Plant Science for Sustainable Agriculture)
地域資源利用システム学
(Systematic Utilization of Regional Resources)
国際植物材料学
(Global Plant Material Science)
国際植物材料学演習
(Seminar in Global Plant Material Science)
国際植物生産学実験
(Research in Global Plant Production Sciences)
国際森林資源学特論
(Advanced Global Forest Resources)
国際森林環境学特論
(Advanced Global Forest Environmental Science)
国際森林環境学演習
(Seminar in Global Forest Environmental Studies)
植物新機能化学
(Plant Molecular Physiology)
植物機能開発工学
(Plant Biotechnology)
新機能植物開発学演習
(Seminar in Plant Biotechnology)
地球生物環境学実験
(Research in Global Bio-Environmental Studies)
国際農業開発学演習
(Seminar in Agricultural Development Studies)
国際農業開発学実験
(Research in Agricultural Development Studies)
国際環境評価学特論
(Advanced International Environmental Evaluation)
国際環境管理学特論
(Advanced International Environment Management)
国際環境経済学演習
(Seminar in International Environmental Economics)
国際環境経済学研究
(Research in International Environmental Economics)
国際環境資源情報学特論
(Advanced Environmental and Resource Information Systems)
国際情報農学特論
(Advanced International Agro-Informatics)
国際情報農学演習
(Seminar in International Agro-Informatics)
国際情報農学実験
(Research in International Agro-Informatics)
農学国際特論Ⅰ
(Advanced Global Agricultural Science Ⅰ)
農学国際特論Ⅱ
(Advanced Global Agricultural Science Ⅱ)
農学国際特論Ⅲ
(Advanced Global Agricultural Science Ⅲ)
農学国際演習
(Seminar in Global Agricultural Sciences)
農学国際実験・研究
(Research in Global Agricultural Sciences)
農学国際実地研究Ⅰ
(On-site Practical Research in Global Agricultural Sciences Ⅰ)
社会デザインと実践演習A
(Case Study: Social Design and Management A)
国際感染症制御学Ⅰ
(Advanced Global Infectious Diseases Control Ⅰ)
国際感染症制御学Ⅱ
(Advanced Global Infectious Diseases Control Ⅱ)
国際農学英語Ⅰ
(English for Global Agricultural Sciences Ⅰ)
国際農学英語Ⅱ
(English for Global Agricultural Sciences Ⅱ)
海外における安全管理論
(Overseas Safety and Risk Management)

農学国際専攻（国際農業開発学コース）
International Program in Agricultural Development Studies (IPADS)

国際農業開発学各論 (IPADS Case Studies)	国際農業開発学特論 (IPADS Development Studies)	国際農業開発学入門 (IPADS Introductory Course)	作物管理学 (IPADS Crop Management)
国際作物科学 (IPADS Crop Science)	国際土壌肥沃度管理学 (IPADS Soil Fertility Management)	国際食料資源学 (IPADS Food Resources)	国際土壌科学 (IPADS Soil Science)
国際食品科学 (IPADS Food Science)	国際植物新機能化学 (IPADS Plant Molecular Physiology)	国際植物機能開発工学 (IPADS Plant Biotechnology)	国際植物改良学 (IPADS Plant Improvement)
サステイナビリティと作物生産学 (Sustainability and Crop Production)	国際森林開発論 (International Forest Development)	森林昆虫生態学 (Forest Insect Ecology)	国際動物科学 (IPADS Animal Science)
国際沿岸生態学 (IPADS Coastal Ecology)	IPADS 国際水産：科学と政策 (IPADS Global Fisheries : Science and Policy)	IPADS 国際水産：科学と経済 (IPADS Global Fisheries : Science and Economics)	国際環境科学 (IPADS Environmental Science)
国際環境政策学 (IPADS Environmental Policy)	国際農業開発経済学 (IPADS Economics)	IPADS 経済：数量経済学Ⅰ (IPADS Economics : Quantitative Economics Ⅰ)	IPADS 経済：数量経済学Ⅱ (IPADS Economics : Quantitative Economics Ⅱ)
国際農業統計学 (IPADS Statistics)	国際農業開発学客員セミナー (IPADS Guest Seminars)	国際農業開発学実習 (Practice in InternationalAgricultural Development)	国際農業開発学セミナーⅠ (IPADS Research Seminars Ⅰ)
国際農業開発学セミナーⅡ (IPADS Research Seminars Ⅱ)	国際農業開発学研究 (IPADS Master's Research)		

生圏システム学専攻

フィールド科学総論	生圏システム学特論	生態統計学	生物多様性科学総論
生物多様性科学特論	生物多様性科学演習	保全生態学総論	保全生態学特論
保全生態学演習	緑地創成学特論	緑地管理学特論	緑地創成学演習
森圏管理学特論	相関森林学	森圏管理学演習	水域生態学
水域保全学	水域保全学演習	耕地生圏生態学	耕地生圏生態学演習
水圏生産システム学総論	水圏生産システム学特論	水圏生産システム学演習	森林圏生態学
森林圏生物動態学	森林圏生態学演習	森林生物機能学	森林遺伝子機能開発学
森林生物機能学演習	森林生態圏管理学特論	森林圏管理システム学	国際森林学特論
森林圏生態社会学演習	持続的森林圏経営論	森林流域管理学	森林圏水循環機能学
森林流域管理学演習	生圏システム学実験・研究		

応用動物科学専攻

動物科学トピックス	ゲノムと生体情報の科学	神経と行動の科学	動物・細胞の構造の科学
動物の一生の生物学	正常と異常の生命科学	外界と生体のインターラクション	
動物生産テクノロジー概論	生物学における情報科学とプレゼンテーション戦略		動物科学のフロンティアⅠ
動物科学のフロンティアⅡ	高次生体制御学特別実験Ⅰ	高次生体制御学特別実験Ⅱ	高次生体制御学演習
動物機能科学特別実験Ⅰ	動物機能科学特別実験Ⅱ	動物機能科学演習	

(b)大学院（博士課程）での授業科目名

生産・環境生物学専攻

生産・環境生物学特別実験	生産・環境生物学特別演習

応用生命化学専攻

応用生命化学特別実験Ⅲ	応用生命化学特別演習

応用生命工学専攻

応用生命工学特別実験Ⅲ	応用生命工学特別演習

森林科学専攻

森林生態社会学特別演習	森林生命環境科学特別演習	森林資源環境科学特別演習Ⅰ	森林資源環境科学特別演習Ⅱ
森林生態圏管理学特別演習Ⅰ	森林生態圏管理学特別演習Ⅱ	アジア生物環境学特別演習	森林生態社会学特別実験
森林生命環境科学特別実験	森林資源環境科学特別実験Ⅰ	森林資源環境科学特別実験Ⅱ	森林生態圏管理学特別実験Ⅰ
森林生態圏管理学特別実験Ⅱ	アジア生物環境学特別実験		

水圏生物科学専攻

水圏生物科学特別講義Ⅱ	水圏生物科学特別実験Ⅱ	水圏生物科学特別演習

農業・資源経済学専攻

農業経営学特別研究Ⅰ
(Advanced Study in Farm Management Ⅰ)
農業経営学特別研究Ⅱ
(Advanced Study in Farm Management Ⅱ)
農業経営学特別研究Ⅲ
(Advanced Study in Farm Management Ⅲ)
農業経営学特別研究Ⅳ
(Advanced Study in Farm Management Ⅳ)

比較農業政策学Ⅰ
(Advanced Study in Policy of Comparative Agriculture Ⅰ)
比較農業政策学Ⅱ
(Advanced Study in Policy of Comparative Agriculture Ⅱ)
比較農業政策学Ⅲ
(Advanced Study in Policy of Comparative Agriculture Ⅲ)
比較農業政策学Ⅳ
(Advanced Study in Policy of Comparative Agriculture Ⅳ)

比較農業史特別研究Ⅰ
(Advanced Study in Comparative History of Agriculture Ⅰ)
比較農業史特別研究Ⅱ
(Advanced Study in Comparative History of Agriculture Ⅱ)
比較農業史特別研究Ⅲ
(Advanced Study in Comparative History of Agriculture Ⅲ)
比較農業史特別研究Ⅳ
(Advanced Study in Comparative History of Agriculture Ⅳ)

国際農業論特別研究Ⅰ
(Advanced Study in Agricultural Trade and Development Ⅰ)
国際農業論特別研究Ⅱ
(Advanced Study in Agricultural Trade and Development Ⅱ)
国際農業論特別研究Ⅲ
(Advanced Study in Agricultural Trade and Development Ⅲ)
国際農業論特別研究Ⅳ
(Advanced Study in Agricultural Trade and Development Ⅳ)

アグリビジネス論特別研究Ⅰ
(Advanced Study in Agribusiness Ⅰ)
アグリビジネス論特別研究Ⅱ
(Advanced Study in Agribusiness Ⅱ)
アグリビジネス論特別研究Ⅲ
(Advanced Study in Agribusiness Ⅲ)
アグリビジネス論特別研究Ⅳ
(Advanced Study in Agribusiness Ⅳ)

国際農村開発学特別研究Ⅰ
(Advanced Study in International Rural Development Ⅰ)
国際農村開発学特別研究Ⅱ
(Advanced Study in International Rural Development Ⅱ)
国際農村開発学特別研究Ⅲ
(Advanced Study in International Rural Development Ⅲ)
国際農村開発学特別研究Ⅳ
(Advanced Study in International Rural Development Ⅳ)

農業経営学特別演習Ⅰ
(Advanced Seminar on Farm Management Ⅰ)
農業経営学特別演習Ⅱ
(Advanced Seminar on Farm Management Ⅱ)
農業経営学特別演習Ⅲ
(Advanced Seminar on Farm Management Ⅲ)
農業経営学特別演習Ⅳ
(Advanced Seminar on Farm Management Ⅳ)

農業経営学特別演習Ⅴ
(Advanced Seminar on Farm Management Ⅴ)
農業経営学特別演習Ⅵ
(Advanced Seminar on Farm Management Ⅵ)
農業経営学特別演習Ⅶ
(Advanced Seminar on Farm Management Ⅶ)
農業経営学特別演習Ⅷ
(Advanced Seminar on Farm Management Ⅷ)

比較農業政策学演習Ⅰ
(Seminar in Policy of Comparative Agriculture Ⅰ)
比較農業政策学演習Ⅱ
(Seminar in Policy of Comparative Agriculture Ⅱ)
比較農業政策学演習Ⅲ
(Seminar in Policy of Comparative Agriculture Ⅲ)
比較農業政策学演習Ⅳ
(Seminar in Policy of Comparative Agriculture Ⅳ)

比較農業政策学演習Ⅴ
(Seminar in Policy of Comparative Agriculture Ⅴ)
比較農業政策学演習Ⅵ
(Seminar in Policy of Comparative Agriculture Ⅵ)
比較農業政策学演習Ⅶ
(Seminar in Policy of Comparative Agriculture Ⅶ)
比較農業政策学演習Ⅷ
(Seminar in Policy of Comparative Agriculture Ⅷ)

比較農業史特別演習Ⅰ
(Seminar in Comparative History of Agriculture Ⅰ)
比較農業史特別演習Ⅱ
(Seminar in Comparative History of Agriculture Ⅱ)
比較農業史特別演習Ⅲ
(Seminar in Comparative History of Agriculture Ⅲ)
比較農業史特別演習Ⅳ
(Seminar in Comparative History of Agriculture Ⅳ)

比較農業史特別演習Ⅴ
(Seminar in Comparative History of Agriculture Ⅴ)
比較農業史特別演習Ⅵ
(Seminar in Comparative History of Agriculture Ⅵ)
比較農業史特別演習Ⅶ
(Seminar in Comparative History of Agriculture Ⅶ)
比較農業史特別演習Ⅷ
(Seminar in Comparative History of Agriculture Ⅷ)

国際農業論特別演習Ⅰ
(Seminar in Agricultural Trade and Development Ⅰ)
国際農業論特別演習Ⅱ
(Seminar in Agricultural Trade and Development Ⅱ)
国際農業論特別演習Ⅲ
(Seminar in Agricultural Trade and Development Ⅲ)
国際農業論特別演習Ⅳ
(Seminar in Agricultural Trade and Development Ⅳ)

国際農業論特別演習Ⅴ
(Seminar in Agricultural Trade and Development Ⅴ)
国際農業論特別演習Ⅵ
(Seminar in Agricultural Trade and Development Ⅵ)
国際農業論特別演習Ⅶ
(Seminar in Agricultural Trade and Development Ⅶ)
国際農業論特別演習Ⅷ
(Seminar in Agricultural Trade and Development Ⅷ)

アグリビジネス論特別演習Ⅰ
(Seminar in Agribusiness Ⅰ)
アグリビジネス論特別演習Ⅱ
(Seminar in Agribusiness Ⅱ)
アグリビジネス論特別演習Ⅲ
(Seminar in Agribusiness Ⅲ)
アグリビジネス論特別演習Ⅳ
(Seminar in Agribusiness Ⅳ)

アグリビジネス論特別演習Ⅴ
(Seminar in Agribusiness Ⅴ)
アグリビジネス論特別演習Ⅵ
(Seminar in Agribusiness Ⅵ)
アグリビジネス論特別演習Ⅶ
(Seminar in Agribusiness Ⅶ)
アグリビジネス論特別演習Ⅷ
(Seminar in Agribusiness Ⅷ)

国際農村開発学特別演習Ⅰ
(Advanced Seminar in International Rural Development Ⅰ)
国際農村開発学特別演習Ⅱ
(Advanced Seminar in International Rural Development Ⅱ)
国際農村開発学特別演習Ⅲ
(Advanced Seminar in International Rural Development Ⅲ)
国際農村開発学特別演習Ⅳ
(Advanced Seminar in International Rural Development Ⅳ)

国際農村開発学特別演習Ⅴ
(Advanced Seminar in International Rural Development Ⅴ)
国際農村開発学特別演習Ⅵ
(Advanced Seminar in International Rural Development Ⅵ)
国際農村開発学特別演習Ⅶ
(Advanced Seminar in International Rural Development Ⅶ)
国際農村開発学特別演習Ⅷ
(Advanced Seminar in International Rural Development Ⅷ)

農業・資源経済学総合演習
(Special Seminar for Dissertation)

生物・環境工学専攻

生物環境情報工学特別講義
地域環境工学特別講義
生物システム工学特別講義
生物・環境工学特別研究Ⅱ
生物･環境工学特別実験実習

生物材料科学専攻

生物材料科学特別実験Ⅱ
生物材料科学特別演習

農学国際専攻

国際水産開発学特別演習
(Advanced Seminar in Global Fisheries Science)
国際動物資源学特別演習
(Advanced Seminar in Global Animal Resource Science)
国際動物生産学特別実験
(Advanced Research in Global Animal Production Science)
国際植物資源学特別演習
(Advanced Seminar in Global Plant Resource)

国際植物材料学特別演習
(Advanced Seminar in Global Plant Material Science)
国際植物生産学特別実験
(Advanced Research in Global Plant Production Science)
国際森林環境学特別演習
(Advanced Seminar in Global Forest Environmental Studies)
新機能植物開発学特別演習
(Advanced Seminar in Plant Biotechnology)

地球生物環境学特別実験
(Advanced Research in Global Bio-Environmental Studies)
国際環境経済学特別演習
(Advanced Seminar in International Environmental Economics)
国際環境経済学特別研究
(Advanced Reserch in International Environmental Economics)
国際情報農学特別演習
(Advanced Seminar in International Agro-Informatics)

国際情報農学特別実験
(Advanced Research in International Agro-Informatics)
国際農業開発学特別演習
(Advanced Seminar in Agricultural Development Studies)
国際農業開発学特別実験
(Advanced Research in Agricultural Development Studies)
農学国際特別演習
(Advanced Seminar in Global Agricultural Science)

農学国際特別実験・研究
(Advanced Research in Global Agricultural Sciences)
農学国際実地研究Ⅱ
(On-site Practical Research in Global Agricultural Sciences Ⅱ)
環境政策特別講義
(Advanced Environment Policy)

農学国際専攻（国際農業開発学コース）
International Program in Agricultural Development Studies（IPADS）

国際農業開発学特別セミナー
(IPADS Advanced Research Seminars)
国際農業開発学特別研究
(IPADS PhD Research)
国際農業開発学実地研究
(IPADS Field Studies)
IPADS 環境政策特別講義
(IPADS Advanced Emvironment Policy)

生圏システム学専攻			
生物多様性科学特別演習	保全生態学特別演習	緑地創成学特別演習	森圏管理学特別演習
水域保全学特別演習	耕地生圏生態学特別演習	水圏生産システム学特別演習	森林圏生態学特別演習
森林生物機能学特別演習	森林圏生態社会学特別演習	森林流域管理学特別演習	生圏システム学特別実験･研究

応用動物科学専攻			
動物科学フロンティア	応用動物科学特別実験Ⅰ	応用動物科学特別実験Ⅱ	応用動物科学特別演習Ⅰ
応用動物科学特別演習Ⅱ			

獣医学博士課程　獣医学専攻			
生体機能形態学特別講義	生体機能形態学特別演習	生体機能形態学特別実験	生体防御学特別講義
生体防御学特別演習	生体防御学特別実験	獣医臨床学特別講義	獣医臨床学特別演習
獣医臨床学特別実験	獣医学特論	ライフサイエンス統計学講義	科学プレゼンテーション論Ⅰ
科学プレゼンテーション論Ⅱ	科学プレゼンテーション論Ⅲ	生体機能形態学特論	生体防御学特論
獣医臨床学特論			

研究科共通科目			
農学ライフサイエンス研究倫理	農学ライフサイエンス研究管理演習	農林水畜産業と環境負荷	農林水畜産業と生態系攪乱
Statistical Analysis	Theory and Practice for Advanced Statistics	生物配列解析基礎	ゲノム情報解析基礎
バイオスタティスティクス基礎論	知識情報処理論	生物配列統計学	分子モデリングと分子シミュレーション
オーム情報解析	機能ゲノム学	システム生物学概論	構造バイオインフォマティクス基礎
フィールドインフォマティクス	農学生命情報科学特論Ⅰ	農学生命情報科学特論Ⅱ	農学生命情報科学特論Ⅲ
農学生命情報科学特論Ⅳ	農学生命情報科学実習Ⅰ	農学生命情報科学特別演習	食の科学ゼミナールⅠ
食の科学ゼミナールⅡ	食の科学ゼミナールⅢ	バイオマス利用研究特論Ⅰ	バイオマス利用研究特論Ⅱ
バイオマス利用研究ゼミナールⅠ	バイオマス利用研究ゼミナールⅡ	国際農業と文化ゼミナール	国際農業と文化実習
生物多様性と農業	自然再生事業モニタリング実習	農学における情報利用ゼミナール	農業環境における放射線影響ゼミナール
Writing a Research Proposal	Writing a Research Article	サイエンスコミュニケーション	サイエンスコミュニケーション演習
農学現象の数理科学的理解	ワン・アーソロジーⅠ	ワン・アーソロジーⅡ	ワン・アーソロジーⅢ
環境調和実学研修Ⅰ	環境調和実学研修Ⅱ	環境調和実学研修Ⅲ	インターンシップⅠ
インターンシップⅡ	インターンシップⅢ	地域農業マネジメント	社会デザインと実践演習 (Case Study : Social Design and Management)
地球規模感染症制御学Ⅰ (Global Infectious Diseases Control Science Ⅰ)	地球規模感染症制御学Ⅱ (Global Infectious Diseases Control Science Ⅱ)		

大学院共通授業科目			
微生物科学イノベーション特論Ⅰ	微生物科学イノベーション持論Ⅱ	Application of Biometrics and Biostatistics to Agricultural Science	木材化学特論Ⅰ
木材化学特論Ⅱ	国際水産開発学総論 (Global Fisheries Science and Policy)		

(c) 博士論文（課程博士）の論文題目　2021 年度

生産・環境生物学専攻
日本列島の淡水域に生息する魚類個体群の時空間構造の分析
植物の機械的ストレスへの応答の分子機構に関する研究
Studies on abiotic stress-responsive genes in pearl millet (*Pennisetum glaucum* (L.) R. Br.) (トウジンビエの非生物的ストレス応答遺伝子に関する研究)
The effects of ambient temperature to photoperiodic flowering in rice (イネの光周性花成における気温の影響に関する研究)
Studies on modelling and evaluation of crop growth and its surrounding environment (作物の生育とそれを取り巻く環境のモデル化と評価に関する研究)
フレキシウイルスの遺伝子発現制御機構に関する研究
多収イネの登熟特性における品種間差異に関する生理学的研究

応用生命化学専攻
Identification of genes from rice mutants to decipher their role in the distribution of molybdenum and iron （イネ変異株から同定したモリブデンや鉄の分布に影響を及ぼす遺伝子の機能解析）
肝臓の脂質蓄積制御機構の解析研究
Structural study on the molecular mimicry of double-stranded DNA by pyrrolated lysine-containing proteins （ピロール化リジン含有タンパク質による二本鎖 DNA の分子模倣の構造研究）
Analysis of the reduction of norovirus infectivity by proteolysis of the capsid protein VP1 （ノロウイルスカプシドタンパク質 VP1 の分解による感染性低下の機構解析）
オス特異的物質を受容する鋤鼻受容体を介した攻撃行動の神経基盤
Studies on the interaction of α/β-hydrolase-type plant hormone receptors with their regulators （α/β-加水分解酵素型植物ホルモン受容体と制御剤の相互作用解析研究 ）
磁気共鳴画像法を用いたヒトの嗅覚における脳内情報表現の解明
肝機能の生理学的解明を目指したヒト肝臓オルガノイド培養技術の開発
Regulation of Casparian strip formation in *Arabidopsis thaliana* through kinases and nutritional conditions （シロイヌナズナにおけるリン酸化酵素と栄養条件によるカスパリー線形成の制御）
コレステロール及びその代謝産物によるステロール恒常性調節機構の解明
グルコシルセラミドおよびその代謝物による腸管上皮サイトカイン産生制御機構の研究
Studies on roles and regulatory mechanisms of mevalonate pathway-dependent protein homeostasis in the skeletal muscle （骨格筋におけるメバロン酸経路依存的なタンパク質恒常性の機能及び制御機構に関する研究）
サリドマイド系フタルイミド修飾体を介した E3 リガーゼのネオ基質選択性の構造基盤解析
ハイスループットスクリーニングによる SREBP-1 特異的阻害剤の探索
Mechanism for the production of multi-specific autoantibodies in apoE-deficient mice （ApoE 欠損マウスにおける多重交差性自己抗体の産生機構に関する研究）

応用生命工学専攻
Analysis on the role of proteins involved in the process of nucleophagy in the filamentous fungus *Aspergillus oryzae* （糸状菌 *Aspergillus oryzae* におけるヌクレオファジーの過程に関わるタンパク質の解析）
一細胞 RNA シーケンシングにおける大規模細胞検索と統計的推論
指向性進化を用いた芳香族ポリマー原料生合成経路の構築
放線菌が生産する 1-azabicyclo［3.1.0］hexane 環含有二次代謝産物における環形成・環修飾機構に関する研究
Studies on the functions of plant-specific Dof transcription factors in phytohormonal and nutritional responses of *Arabidopsis thaliana* （シロイヌナズナの植物ホルモン反応および栄養応答における植物特異的な Dof 転写因子の機能に関する研究）
放線菌のメロテルペノイド生合成に見出された新規窒素代謝に関する研究
ビフィズス菌の新規糖質関連酵素の構造機能解析
Studies on strain phylogenetic differentiation and physiological mechanism in incompatibility of the industrial filamentous fungus *Aspergillus oryzae* （産業糸状菌 *Aspergillus oryzae* の不和合性における株系統発生と生理的メカニズムの解析）

森林科学専攻
Survival analysis of individual tree populations in natural forest stands: A case study of preserved forests in the University of Tokyo Hokkaido Forest, northern Japan （天然林樹木個体群を対象とした生存時間解析：東京大学北海道演習林における天然林保護区の事例）
Analysis of the Multi-stakeholder Process of a Forest Certification in Japan: A Case Study of FSC National Forest Stewardship Standard Development （日本における森林認証のマルチステークホルダープロセスの分析：FSC 国内森林管理規格策定を事例として）
歴史的環境保全地域における歩行負担を考慮した山岳歩道のトレッキング利用 （Trail for Trekking Considering Exercise Load（METs, bpm）in Historic Nature Conservation Area）
環境 NPO の活動実態からみえる社会的役割と持続可能な活動展開に向けての課題―足尾銅山跡地で活動する森林ボランティアを事例に
人的被害の軽減に向けた土砂災害対策のあり方～住民の関わり方に着目して～
Factors determining species distribution and local adaptation in beetles （コウチュウ類における種の分布と局所適応を決定する要因）
開放地性鳥類の多様性と希少種の分布に関係する草原管理方法と環境要因
池坊立花の風景表現の技法と風景観の変遷に関する研究

水圏生物科学専攻
Studies on delayed convulsion in fish （魚類の遅延性けいれんに関する研究）
Copper-binding organic ligands and their relationship with phytoplankton growth in Japanese coastal waters （日本沿岸域における海水中の銅有機配位子およびその植物プランクトンの生育との関係に関する研究）

東シナ海から黒潮沿岸域におけるマアジの輸送に関する研究
潮下帯岩礁の写真測量を用いた付着生物の生息適地条件に関する研究
数値モデルを用いたサンマ未成魚の成長・回遊・生残に関する研究
Dynamics of trace metal biogeochemistry in the estuary and open ocean: Studies from Ariake Sea, Bay of Bengal and Eastern Indian Ocean （有明海、ベンガル湾、東部インド洋における微量金属元素の生物地球化学ダイナミクス）
動物搭載型記録計で計測した波浪と海上風に関連した海鳥の飛立ち行動の研究
The Effects of Brown Algae-derived Monosaccharide L-Fucose on Obesity （褐藻由来フコースが肥満に及ぼす影響）
Francisella halioticida が引き起こすホタテガイ *Mizuhopecten yessoensis* の新興疾病に関する研究
魚肉加熱ゲル形成時のタンパク質分解およびその重合に関する研究
Studies on the efficient discovery of new cytotoxic compounds from deep-sea sponges （深海性カイメン由来新規細胞毒性物質の効率的探索研究）
Environmental influence on life-history traits in *Uroteuthis edulis* and its associations with population fluctuation （環境条件がケンサキイカの生活史特性へ与える影響とその個体群変動との関係）
水産資源管理におけるステークホルダーの効果的な関与のための研究
Genetic basis and genetic improvement of heterobothriosis resistance and growth performance in the tiger pufferfish, *Takifugu rubripes*, fed with low fishmeal diet （低魚粉飼料給餌下におけるトラフグのヘテロボツリウム症耐性と成長能力に関する遺伝基盤と選抜育種の可能性に関する研究）

農業・資源経済学専攻
自由貿易協定下の農産品・食品輸入の影響の地域間格差に関する研究―産業間・地域間の波及効果に着目して―
マイクロクレジットによる貧困削減メカニズムに関する実証研究―インドとネパールの分析を通して―
RESTORING COMPETITIVENESS OF DOMESTICALLY PRODUCED FOOD VALUE CHAINS IN SUB-SAHARAN AFRICA: EVIDENCE FROM EXPERIMENTAL QUALITY STANDARDIZATION OF LOCAL RICE IN GHANA （サブサハラ・アフリカにおける国内産食料バリューチェーンの競争力の回復：ガーナにおける地元産米の実験的品質標準化に基づく実証）
農業水利システムにおける半需要主導型水管理の効率性
Development of Agricultural Land System and Policies in China （中国の農地制度の発展と政策）
持続可能な農業経営の実現に向けたステークホルダー・マネジメント―日英の土地利用型農業を対象とした実証分析―
Empirical essays on rice technology adoption behavior in developing countries: A case study of the central highland zone of Madagascar （開発途上国農家による稲作技術採用行動に関する実証研究：マダガスカル中央高地を事例として）
Microeconometric analysis of pastoralists livelihood in unfavorable environment in Mongolia （モンゴルの条件不利な環境における牧畜民の生計に関するミクロ計量経済学的分析）

生物・環境工学専攻
砕土不良な粘質土における蒸発促進機構と乾燥前線の進展に関する研究
樹木の構造機能解析のための３次元点群データ処理手法の開発

生物材料科学専攻
Mechanistic study on the *β*-O-4 bond cleavage of lignin model compounds in acidolysis （アシドリシスにおけるリグニンモデル化合物の*β*-O-4 結合開裂に関する機構的研究）
木造耐力壁構造の柱脚接合部の保証設計法に関する研究
アシドリシスにおいてリグニン*β*-O-4 結合開裂反応の速度を律する素反応の解析
ポリ［(*R*)-3-ヒドロキシブチレート-*co*-4-ヒドロキシブチレート］伸縮性繊維の創製と大型放射光を用いた高次構造解析および海洋分解性評価
Development of Enzyme Embedded Polyesters with Marine Biodegradability （海洋分解性を有する酵素内包生分解性ポリエステルの開発）
糸状菌由来キシラン主鎖分解酵素の機能解明
蒸発乾燥により形成されたナノセルロース多孔体に関する研究
Synthesis, Characterization and Biodegradability of Paramylon Ester Graft Copolymers （パラミロンエステルグラフト共重合体の合成、物性および生分解性評価）
Synthesis and Characterization of Bio-based Aromatic Polymers Derived from Divanillic Acid （ジバニリン酸由来バイオベース芳香族ポリマーの合成と物性評価）
リン酸化ナノセルロースの構造およびフィルム特性に関する研究
*α*結合を有する多糖類の高性能部材化と物性および構造解析

農学国際専攻
Epidemiological studies on the cattle fascioliasis in Thua Thien Hue province, Vietnam （ベトナム国トゥアティエン＝フエ省における牛肝蛭症に関する疫学的研究）
Assessing Impacts of Human Disturbance and Fire on Forests in the Protected Area of Russian Far East using Remote Sensing Data （リモートセンシングデータを利用したロシア極東の自然保護区の森林における人為攪乱と火災が及ぼす影響評価）
COMPREHENSIVE STUDY ON TRADITIONAL HERBAL MEDICINE UNDER THE UNIVERSAL HEALTH COVERAGE IN INDONESIA （国民皆保険下のインドネシアにおける伝統的な薬草療法に関する総合的研究）
Studies on association of bovine major histocompatibility complex (BoLA)-*DRB3* polymorphism with bovine leukemia virus infection outcome （ウシ主要組織適合遺伝子複合体（BoLA)-*DRB 3*遺伝子の多型性と牛伝染性リンパ腫ウイルス感染症の相関性に関する研究）
The application and adoption of the Flow Hive system to *Apis cerana japonica* （フローハイブシステムのニホンミツバチ *Apis cerana japonica* への適用及び養蜂家の採用に関する研究）
Studies on a Functional-Structural Model for Determination of P-uptake and Utilization in Upland Rice （陸稲におけるリンの取り込みおよび利用効率を定量化するための機能構造モデルに関する研究）
Study of the governance of eco-certification scheme for shrimp aquaculture in Indonesia （インドネシアにおけるエビ養殖業に対する環境認証制度のガバナンスに関する研究）
園芸作物における仲介市場の役割と制度的条件
The evolution and development of flight and echolocation apparatus in bats （翼手類における飛行・反響定位器官の進化と発生）

生圏システム学専攻
ニホンイシガメとクサガメ間の雑種形成に関する研究
The influence of spatial distribution of vegetation on saltation in an east Asian rangeland （東アジア放牧草原における植生の空間構造が飛砂発生に及ぼす影響の解明）

応用動物科学専攻
マウス栄養膜幹細胞の 3D 培養条件の確立およびその胎盤発生のモデルとしての検証
CRISPR/Cas による必須遺伝子ノックアウト動物作製技術の開発と遺伝子機能解析への応用
卵巣顆粒層細胞の性維持機構に関する研究
インスリン受容体基質（IRS)-1 レベルの変動で引き起こされる細胞競合が筋分化に果たす役割の解明
転写因子の強制発現によるカニクイザル人工栄養膜幹細胞の誘導に関する研究
The Biological Effects of Ethanolic Extract and Chemical Component of Stingless Bee Propolis -Investigation of Hair Growth and Anti-Cancer Activities （ハリナシバチ由来プロポリスのエタノール抽出物および含有化合物の持つ生物作用～育毛および抗がん作用の検討）
インスリン受容体基質（IRS）2と結合するタンパク質、Pyrroline-5-carboxylate reductase 2（PYCR2）による細胞死阻害機構の解明

獣医学専攻
犬の加齢性血管病変の病理発生における脂質およびアミロイド関連分子の役割
Establishment of a diagnostic method for premenstrual dysphoric disorder using machine learning algorithms and hippocampal factors in rats （機械学習を用いたラット海馬での発現遺伝子を指標とする月経前不快気分障害の診断法の確立）
Studies on bovine leukemia virus and its associated factors in Vietnamese cattle （ベトナムの牛における牛伝染性リンパ腫ウイルスとその関連因子に関する研究）
脳内液性因子による神経興奮性制御機構に関する研究
Paracrine interactions in mouse testis （マウス精巣におけるパラクライン制御機構）
Development of a novel immunotherapy targeting indoleamine 2, 3-dioxygenase 1（IDO1）in canine urothelial carcinoma （犬尿路上皮癌における indoleamine 2, 3-dioxygenase 1（IDO1）を標的とした新規免疫療法の開発）
ネコのメルケル細胞癌の起源およびパピローマウイルスによる発癌機構に関する研究
ネコの消化管上皮性腫瘍の発生状況および病理発生機序に関する研究
糖尿病におけるカハール介在細胞による消化管運動異常の分子機構
上衣細胞に着目した後脳グルコースセンシング機構に関する研究
哺乳類の脳における amyloid-β、tau およびα-synuclein の蓄積と蛋白質間相互作用に関する研究
Studies on the pathology of canine protein-losing enteropathy focusing on lymphatic vessel （リンパ管に着目した犬の蛋白漏出性腸症の病態に関する研究）
Study on the usefulness of tannin-related substances as feed additives in pig farming （養豚におけるタンニン関連物質の飼料添加物としての有用性に関する研究）
Evaluation of neuronal differentiation and neural tissue formation abilities of canine bone marrow peri-adipocyte cells (BM-PACs) for neural tissue reconstruction （神経組織再建を目指したイヌ骨髄脂肪細胞周囲細胞の神経細胞分化能および神経組織形成能の評価）

10 社会的活動

（1）農学部公開セミナー

最新の研究成果の社会への還元の一環として春と秋の年２回公開セミナーを企画し、2021年度までに61回実施した（60・61回はオンライン公開セミナーとして開催）。

第60回　（第３回オンライン公開セミナー）『共生』：地球上で生きていくための知恵　2021年６月26日（土）（参加者400名程度）

（1）樹木と微生物の多様な関係―共生・寄生・腐生 ……	森林科学専攻　教授	福　田　健　二
（2）昆虫と微生物の共生関係 ……	生産・環境生物学専攻　教授	勝　間　　進
（3）自然界にみられる多様な共生関係：細胞から地球まで ……	生圏システム学専攻　教授	宮　下　　直

第61回　（第４回オンライン公開セミナー）スマート農業：ICT技術を活用した新しい農業の形　2021年10月16日（土）（参加者320名程度）

（1）生態調和農学機構の紹介 ……	生態調和農学機構　教授	河　鰭　実　之
（2）近接リモセンとAIを用いた植物フェノミクスとその応用 ……	生態調和農学機構　助教	郭　　威
（3）農業ロボットの作り方 ……	生物・環境工学専攻　准教授	海　津　　裕
（4）スマート農業とは何か？　―過去、現在、未来― ……	生態調和農学機構　特任教授	平　藤　雅　之

（2）附属施設のイベント

日程	イベント名	附属施設名
2021年４月10日	「犬山の森」春のふれあい自然観察会	附属演習林生態水文学研究所
2021年５月８～９日	木が香る秩父フェスティバル	附属演習林秩父演習林
2021年５月15日	鴨川市・東京大学交流事業 「野鳥の巣箱をかけよう！（野鳥観察会）」	附属演習林千葉演習林
2021年５月25日～ 2022年１月18日	農と食の体験塾2021　大豆編	附属生態調和農学機構
2021年６月６日	第38回子ども樹木博士認定会	附属演習林田無演習林
2021年６月27日	癒しの森の宵やみ音楽会	附属演習林富士癒しの森研究所
2021年７月30日	公開講座「東大の森林で昆虫採集」	附属演習林秩父演習林
2021年７月30日	高校生のための森と海のゼミナール ～大学の先生と考える環境問題と生物多様性～	附属演習林千葉演習林
2021年７月31日	親子向けオンラインセミナー「植物標本を作ってみよう」	附属演習林北海道演習林
2021年８月１日	シデコブシの会　親子水生生物観察会	附属演習林生態水文学研究所
2021年８月３日	シデコブシの会　中高生向け生水研講義と見学コース案内	附属演習林生態水文学研究所
2021年10月２日	東大教職員向け特別ガイド「きのこに親しむ」	附属演習林富士癒しの森研究所
2021年10月16日	とよた森林学校「森林と災害」	附属演習林生態水文学研究所
2021年10月17日	シデコブシの会　キノコ観察会	附属演習林生態水文学研究所
2021年10月19日	白鳥山ガイドツアー「麓郷の小さな森で秋探し」	附属演習林北海道演習林
2021年10月31日	第39回子ども樹木博士認定会	附属演習林田無演習林
2021年10月31日	犬山市民総合大学環境学部第２回現地講義	附属演習林生態水文学研究所
2021年10月31日	森の文化祭	附属演習林富士癒しの森研究所
2021年11月４～５日	試験一般開放	附属演習林富士癒しの森研究所
2021年11月７日	木が香る秩父フェスティバル	附属演習林秩父演習林
2021年11月13日	しおじの会と巡る東大秩父演習林樹木園	附属演習林秩父演習林
2021年11月13日	「犬山の森」秋のふれあい自然観察会	附属演習林生態水文学研究所

2021年11月28日	東大教職員向け「リース作り体験会」（ハイブリッド開催）	附属演習林田無演習林
2021年12月４日	鴨川市・東京大学交流事業 「野鳥の巣箱をかけよう！（巣箱作り編）」	附属演習林千葉演習林
2021年12月４～５日	休日公開	附属演習林田無演習林
2021年12月27日	千葉演習林オンラインイベント 「おもしろ動画いっぱい！千葉の森に暮らす動物たち」	附属演習林千葉演習林
2022年２月９日	公開講座「樹木のボディランゲージ」（オンライン開催）	附属演習林秩父演習林

森林基礎実習Ⅲ土壌
（写真提供：秩父演習林）

千葉演習林に設定されたダケカンバ産地試験林における樹高の測定
（写真提供：教育・社会連携センター）

子ども樹木博士
（写真提供：田無演習林）

11 研究活動

(1)研究成果発表（研究科WEBに掲載したもの。年月日は同サイト掲載日。役職は掲載当時）

○植物の栄養欠乏応答における翻訳制御：ホウ素が翻訳停止に影響することを発見　応用生命化学専攻　植物栄養・肥料学研究室　助教　反田　直之　2021.4.5
○動物園の普及啓発効果を多角的に実証：絶滅危惧種ライチョウの一般公開は市民の知識や保全意欲を高めていた　附属生態調和農学機構　助教　深野　祐也　2021.4.8
○スギの“香り”が語ること　～生物起源揮発性有機化合物放出の地理変異を解明～　生圏システム学専攻　森圏管理学研究室　教授　日浦　勉　2021.4.14
○地球温暖化に適応した生産性の高いイネを作り出すことに成功（高温環境におけるイネの光合成機能を増強し、イネの生産性を25%向上させることに成功）　附属生態調和農学機構　准教授　矢守　航　2021.4.28
○ソルガムにおける小穂構成器官のサイズおよび子実サイズを制御する遺伝子座を明らかに　生産・環境生物学専攻　植物分子遺伝学研究室　助教　髙梨　秀樹　2021.4.30
○食物アレルギーの尿中バイオマーカーであるtetranor-PGDMを認識する　モノクローナル抗体とそれを用いた酵素免疫測定法の開発　応用動物科学専攻　放射線動物科学教室　准教授　村田　幸久　2021.4.30
○ハチ毒に対する生体防御反応の機構を解明　応用動物科学専攻　准教授　村田　幸久　2021.5.13
○クルクリゴ果実の味覚修飾タンパク質（ネオクリン）は、進化がくれた甘い贈り物　味覚サイエンス（日清食品）寄付講座　特任教授　朝倉　富子　2021.5.17
○高血圧症に対する新たな予防標的としての延髄代謝型グルタミン酸受容体の可能性　獣医学専攻　准教授　関澤　信一　教授　桑原　正貴　2021.5.19
○有毒なアルデヒドが自然免疫を活性化して生体防御に関与する？　応用生命化学専攻　教授　内田　浩二　2021.5.20
○光触媒で空気中に浮遊する“新型コロナウイルス”の感染性を検出限界以下まで消失させることに成功～「Withコロナ」の社会の実現と新たな社会的脅威「変異ウイルス」への対抗策を提示～　社会連携講座地球規模感染症制御学　特任教授　間　陽子　2021.5.21
○スマートな技術で持続的な農業を：ドローン空撮と融合した圃場試験法（GAUSS）を開発し、輪作に適したダイズ品種を推定　附属生態調和農学機構　助教　深野　祐也　2021.5.31
○人間が教えなくても果実を検出できるAIができた～GANを利用した自動アノテーションと果実検出モデルの構築～　附属生態調和農学機構　助教　郭　威　2021.6.1
○植物が幹細胞を永続的に維持できる新しいしくみ～転写因子ファミリー内の競合関係～　養生訓を科学する医食農連携寄付講座　特任准教授　宮川　拓也　2021.6.1
○室内の鉢植えバラを美しく保つ「上方照射法」（根元から上向きに光をあててもバラは美しく咲く）　附属生態調和農学機構　准教授　矢守　航　2021.6.3
○インスリン受容体mRNA前駆体の肝臓特異的選択的スプライシング機構の解明　応用動物科学専攻　准教授　片岡　直行　2021.6.3
○デジカメで鉢植え植物の精密な3次元形質を自動測定できるようになった―カメラ1台あればいい：超低コストな植物の3次元自動測定手法を開発―　附属生態調和農学機構　助教　郭　威　2021.6.15
○三種の光を感知する新しい光受容体を発見―海洋に広く生息する微細藻の光環境への適応―　水圏生物科学専攻　助教　吉武　和敏　2021.6.16
○ユーグレナおよびその成分であるパラミロンの胃がんモデルマウスの初期病変に対する効果　獣医学専攻　教授　平山　和宏　准教授　角田　茂　2021.7.1
○世界初！植物の葉緑体ゲノムのゲノム編集―標的一塩基置換に成功　生産・環境生物学専攻　准教授　有村　慎一　2021.7.2
○紫外線照射による新型コロナウイルス不活化のメカニズム―ウイルスRNAの損傷が原因だった―　社会連携講座地球規模感染症制御学　特任教授　間　陽子　2021.7.5
○鳥が花蜜を味わう新たな仕組みを解明「スズメ亜目を鳥類最大の種数へ繁栄させた糖の受容機構」が明らかに　応用生命化学専攻　准教授　三坂　巧　2021.7.12
○北太平洋外洋移行域表層のマイクロプラスチック分布実態を解明　水圏生物科学専攻　教授　高橋　一生　2021.7.13
○秩父山地の山地帯や亜高山帯からなる森林流域で年蒸発散量を観測から明らかにしたところ、思いのほか少ないことがわかりました　附属演習林　講師　浅野　友子　2021.7.15
○世界初、セミの抜け殻DNAから遺伝子型を決定する方法を開発　生圏システム学専攻　准教授　齊藤　陽子　2021.7.26
○アミノ酸の一種、オルニチンがシグナル仲介因子として糖新生律速酵素の転写を促進することを発見　応用動物科学専攻　准教授　伯野　史彦　2021.7.26
○新種誕生間近か?!ゲノム研究が明らかにした日本産アワビの多様性　附属水産実験所　助教　平瀬　祥太朗　2021.7.27
○膨大な文献データをつなぎ合わせて新たな関連性を導出する手法を開発。COVID-19関連薬探索へ応用。　附属食の安全研究センター　特任准教授　村松　知成　養生訓を科学する医食農連携寄付講座　特任教授　田之倉　優　2021.7.30
○マツ科針葉樹トドマツの標高適応にかかわる生長、生態生理形質の量的遺伝子を検出　附属演習林　准教授　後藤　晋　2021.8.3
○小胞体膜タンパク質INSIGが酸化ステロールを結合し、転写因子ATF4の発現上昇を介して細胞死を誘導する機構を解明　応用生命化学専攻　教授　佐藤　隆一郎　2021.8.4
○膜リン脂質PI4Pが脂質輸送タンパク質Vps13による脂質供給を調節する機構の発見　応用生命化学専攻　准教授　舘川　宏之　2021.8.19
○腸間膜リンパ節のエフェクターメモリーT細胞はIL-4環境を形成して食物アレルギー性小腸炎モデルマウスの骨量減少を引き起こす？　附属食の安全研究センター　特任助教　足立（中嶋）　はるよ　2021.8.20
○自然免疫を制御する新規ポリフェノール修飾リジン構造の同定　応用生命化学専攻　教授　内田　浩二　2021.8.23
○塩味受容にはCl⁻が必要？―クロライドイオンが奏でる塩味の秘密―　味覚サイエンス（日清食品）寄付講座　特任教授　朝倉　富子

2021.8.25
○紅茶ポリフェノールテアフラビンは腸管での胆汁酸再吸収を抑制し、体内コレステロール排泄を促す　食の健康科学（ニップン寄付講座）　特任准教授　小林　彰子　2021.8.26
○霊長類におけるグルタミン酸の旨味の起源―体の大きな霊長類は旨味感覚で葉の苦さを克服―　応用生命化学専攻　准教授　三坂　巧　2021.8.27
○犬のがんを標的とした腫瘍溶解性コウモリアデノウイルスの開発　獣医学専攻　特任助教　松郷　宙倫　教授　堀本　泰介　2021.9.3
○送電線下に広がるチョウの楽園～送電線はチョウの保全に貢献することを発見～　生圏システム学専攻　准教授　曽我　昌史　2021.9.6
○新しい検査法を発見　食物アレルギーの診断、経口免疫療法の効果判定に有用～患者の身体への負担がなく、軽微なアレルギー症状を判別できる尿を用いた検査法に期待～　応用動物科学専攻　准教授　村田　幸久　2021.9.8
○イントロン由来の異常タンパク質が与えるストレス―スプライシング調節化合物による抗がんメカニズムを解明―　応用生命工学専攻　教授　吉田　稔　2021.9.14
○果物が追熟するのは何のため？～見逃されていた生態学的意義を初めて検証～　附属生態調和農学機構　助教　深野　祐也　2021.9.15
○アトピー性皮膚炎の尿中バイオマーカーの発見　応用動物科学専攻　准教授　村田　幸久　2021.10.1
○一度低下したら戻らないと考えられていた「セルロースナノファイバーの結晶性」を回復できることが明らかに～持続可能なバイオポリマー材料の物性制御に向けた新たな戦略～　生物材料科学専攻　准教授　齋藤　継之　2021.10.12
○作物でまれに起こる有機リン系殺虫剤の薬害に関する遺伝子の発見～バイオマス作物ソルガム（たかきび）を用いた研究から～　生産・環境生物学専攻　教授　堤　伸浩　2021.10.15
○水資源のために森を変えることはできるのか？　森林科学専攻　教授　熊谷　朝臣　2021.10.18
○犬の膀胱癌の治療標的を発見‼―新たな免疫療法の臨床試験を開始―　獣医学専攻　教授　西村　亮平　2021.10.22
○加熱調理で生じるオリゴ糖を分解する酵素を口腔内ビフィズス菌から発見　応用生命工学専攻　教授　伏信　進矢　2021.10.25
○キク属モデル系統の高精度全ゲノム塩基配列を決定―栽培ギク品種育成におけるゲノム情報の活用へ―　生産・環境生物学専攻　准教授　樋口　洋平　2021.10.27
○セルロースのナノ構造を活かした全固体リチウム電池用の銅イオン配位伝導体の開発に成功―高い伝導率、輸率、強度、安定性を達成―　生物材料科学専攻　特別教授　磯貝　明　2021.10.28
○8分節改変ゲノムをもつ組換えD型インフルエンザウイルスを作出　獣医学専攻　准教授　村上　晋　教授　堀本　泰介　2021.11.1
○バイオマス発電用植物「ソルガム」の栽培に関する共同研究を開始　～～石炭火力発電のGHG排出削減に貢献～～　生産・環境生物学専攻　教授　堤　伸浩　2021.11.29
○鼻閉（辛い鼻づまり）の原因物質の発見　応用動物科学専攻　准教授　村田　幸久　2021.12.16
○鉄をめぐる真菌の新しい生存戦略の発見―糸状菌による2種のフェリクローム型シデロフォアの使い分け―　応用生命工学専攻　教授　吉田　稔　講師　西村　慎一　2022.1.12
○犬の膀胱がんに対する新しい分子標的療法の確立　獣医学専攻　助教　前田　真吾　2022.1.13
○ロスマリン酸とクエン酸ナトリウムはビブリオ属細菌の鉄取込みを阻害して静菌作用を示す　応用生命化学専攻　教授　永田　宏次　助教　陸　鵬　2022.1.21
○AIを用いてマウスのグルーミングを検出　応用動物科学専攻　准教授　村田　幸久　2022.2.2
○母親マウスは鼻で血を感知して探索・リスクアセスメント行動に出る―体外に出た血中ヘモグロビンが化学感覚シグナルとなる―　応用生命化学専攻　教授　東原　和成　2022.2.3
○植物の地下での情報のやりとりを発見～地下茎で繋がった植物株間でのコミュニケーション～　応用生命化学専攻　准教授　神谷　岳洋　2022.2.4
○進行性前立腺癌に対する新しい免疫療法の確立～制御性T細胞を制御する～　獣医学専攻　助教　前田　真吾　2022.2.7
○AIが明らかにする育種家の感性～育種家は何を感じてカンキツの剥皮性と果実硬度を評価するのか～　生産・環境生物学専攻　准教授　岩田　洋佳　2022.2.10
○タンパク質ピロール化を感知する自然免疫細胞　応用生命化学専攻　教授　内田　浩二　2022.2.15
○メゾスコピック構造を持つ重炭酸カルシウム消毒剤による口蹄疫ウイルスおよび他のウイルスに対する不活化作用　持続可能な自然再生科学寄付講座　特任教授　小野寺　節　2022.2.18
○2021年秋季に北海道東部太平洋岸で発生した有害赤潮の原因種カレニア　セリフォルミスの形態と系統を明らかにしました　附属アジア生物資源環境研究センター　准教授　岩滝　光儀　2022.2.24
○キノコとカビにおけるヘミセルロース分解戦略の微妙な違い　生物材料科学専攻　教授　五十嵐　圭日子　2022.2.25
○ミトコンドリアゲノム編集によりトマトの雄性不稔遺伝子を確定　生産・環境生物学専攻　准教授　有村　慎一　2022.3.1
○タンパク質の新たな分解システム―ファイロジェンによる葉化誘導メカニズム解明で発見！　生産・環境生物学専攻　准教授　前島　健作　2022.3.2
○オープンソースで野外植物フェノタイピング用ローバーを開発～狭い場所でもスイスイ計測～　附属生態調和農学機構　特任准教授　郭威　2022.3.10
○2つの酵素の特徴をあわせ持つ酵素の反応機構の解明　応用生命工学専攻　教授　葛山　智久　2022.3.15

（2）受賞等（研究科WEBサイトに掲載したもの。年月日は同サイト掲載日。役職は受賞時当時）

○日本植物バイオテクノロジー学会　2021年度技術賞　生産・環境生物学専攻　堤　伸浩　教授・有村　慎一　准教授　2021.9.1
○日本獣医学会　獣医学奨励賞　獣医学専攻　加藤　大貴　研究員　2021.10.14
○貞明皇后記念蚕糸科学賞　生産・環境生物学専攻　勝間　進　教授・木内　隆史　准教授　2021.10.25
○科学技術への顕著な貢献2021（ナイスステップな研究者）受賞　生圏システム学専攻　曽我　昌史　准教授　2021.12.14
○第62回日本木材学会賞　生物材料科学専攻　五十嵐　圭日子　教授　2022.3.22
○日本農業経済学会学術賞　農業・資源経済学専攻　八木　洋憲　准教授　2022.3.30
○大学女性協会守田科学研究奨励賞　水圏生物科学専攻　井ノ口　繭　助教　2022.4.19
○令和4年度　科学技術分野　文部科学大臣表彰　若手科学者賞　応用生命工学専攻　勝山　陽平　准教授　2022.4.20
○長瀬研究振興賞　生産・環境生物学専攻　勝間　進　教授　2022.4.28

12 国際交流

(1)国際交流協定

国際交流協定は、下記一覧表のとおり23の国・地域と53の協定が締結されており、関係専門分野を中心に学術交流・学生交流が行われている。そのうち、南開大学（中国）、ボン大学（ドイツ）との全学協定では担当部局として学内の中心的役割を果たしている。

相手国	相手大学（機関）	締結年月日/最終更新日	専門分野	学生交流の覚書（授業料不徴収）
インド	タミルナードゥ農業大学	2013年 5月27日 2018年 5月27日	農学、生物資源環境学	○
インドネシア	ボゴール農科大学（IPB）	1988年10月21日 2021年12月28日	農学	○
	ムラワルマン大学	2006年 1月27日 2022年 4月28日	農学・生物資源環境学	○
	ランプン大学農学部	2014年 4月16日 2019年 4月16日	農学	○
韓国	ソウル大学校農業生命科学大学	2006年 9月 9日 2016年 9月 9日	農学（獣医学を除く）	○
	ソウル大学校獣医科大学	2016年 5月20日 2021年 5月20日	獣医学、畜産学、応用動物科学	○
	釜慶大学校水産科学大学	2007年 1月24日 2017年 1月24日	水産科学、海洋科学	○
	釜慶大学校環境海洋大学	2007年 1月24日 2017年 1月24日	水産科学、海洋科学	○
	江原大学校 山林環境科学学院	2013年 1月31日 2018年 1月31日	木材科学、森林科学	
カンボジア	カンボジア農業開発研究所	2009年 7月15日 2019年 7月15日	農学、生物資源環境学	
スリランカ	ルフナ大学	2011年 6月 7日 2016年 6月 7日	農学	○
タイ	カセサート大学獣医学部・農学部・林学部	1998年 6月 8日 2020年 8月27日	農学、生物資源環境学	○
	コンケン大学農学部	2009年 2月 3日 2019年 2月 3日	農学	○
	農業研究開発庁	2011年 7月12日 2018年12月 7日	農学	
	チェンマイ大学	2016年 6月 8日 2021年 6月 8日	農学	○
	チュラロンコン大学	2018年10月19日	農学	○
台湾	国立台湾海洋大学	2006年 4月27日 2016年 4月27日	水産学・海洋科学	○
	国立中興大学獣医学院	2008年 3月26日 2018年 3月26日	獣医学	○
	台北医学大学 公共衛生栄養学部	2013年 1月28日 2018年 1月28日	公衆衛生学、食品栄養学	○
	国立屏東科技大学獣医学院	2015年 6月12日	獣医学	○
	台湾大学生物資源農学院	2016年 6月 7日 2021年 6月 7日	農学	○
中国	北京林業大学（北京林学院）	1984年 2月25日 2021年 7月11日	農学	○
	東北林業大学	1996年12月23日 2022年 2月 9日	農学、生物資源環境学	○
	中国農業大学	1997年 9月17日 2018年11月28日	農学	○
	南京林業大学	2002年 3月 9日 2022年 3月 9日	農学、生物資源環境学	○
	中国科学院南京土壌研究所	2007年 1月 5日 2022年 1月 5日	環境保全研究分野	
	南京農業大学	2007年 3月21日 2022年 3月21日	農学、生物資源環境学	○
	四川農業大学	2007年 3月29日 2017年 3月29日	農学	○
	浙江工業大学生物工程学院	2017年11月17日	農学	○

中国	＊南開大学	2010年12月 6日 2020年12月 6日	農学を含む全分野	○
	西南大学	2014年 1月 8日 2019年 1月 8日	農学、生物資源環境学	○
	海南大学熱帯農林学院	2017年10月28日	農学	○
	浙江農林大学	2016年12月14日 2021年12月14日	農学、生物資源環境学	○
	福建農林大学	2018年 4月18日	農学、生物資源環境学	○
	河南科技大学	2018年 6月22日	農学,獣医学	○
ネパール	トリブヴァン大学林業研究所	2019年12月15日	農業経済学、林学、国際農学	
フィリピン	セントラル・ルソン州立大学	2018年 5月22日	農学、水圏生物科学	
ベトナム	ベトナム国立農業大学 （ハノイ農科大学）	1995年12月25日 2020年12月25日	農学、生物資源環境学	○
	カントー大学	2010年 7月19日 2020年 7月19日	農学	○
マレーシア	マレーシア・サバ大学	2017年 6月12日	熱帯森林科学	○
ミャンマー	イエジン農業大学	2017年 7月21日	農学	
モンゴル	モンゴル生命科学大学	2003年10月13日 2018年10月 8日	応用生物科学	○
	モンゴル国立大学	2018年 1月23日	農学	○
トルコ	エーゲ大学医学部	2014年 7月24日 2019年 7月24日	農学、医学	
アルゼンチン	ラ・プラタ大学	1990年12月 6日 2020年12月 6日	獣医学	
コロンビア	国際熱帯農業センター	2010年 2月19日	農学	
アメリカ合衆国	ミネソタ大学バイオテクノロジー研究所	2017年 4月 5日 2022年 4月 5日	農学	
イギリス	ニューカッスル大学農業食料農村振興研究所	2017年 4月 3日	農学	
スウェーデン	スウェーデン農科大学	2004年 8月23日 2019年 8月23日	農学	○
ドイツ	カールスルーエ工科大学	2010年12月 7日 2020年12月 7日	農学	○
	＊ボン大学	2016年 2月 3日	農学、薬学、医学などの自然科学分野	○
フランス	アグロパリテック （パリーグリニョン国立農学院）	1996年 1月30日 2021年 3月18日	農学	○
ポーランド	クラクフ農科大学	2012年12月 5日 2017年12月 5日	森林科学	○

＊印は全学協定

(2)教員の海外渡航

教員の海外渡航は、渡航先も多岐にわたり多数の国々が本研究科教員の研究交流の対象となっている。事業別に分類してみると、文部科学省並びにその他の政府関係機関が15%、科学研究費補助金が50%、その他の国内資金が15%、外国政府・研究機関等が20%となっている。

教員の海外渡航件数（事業別）

区　分	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
1.文部科学省事業	5	2	1	0	0
2.科学研究費補助金	181	168	204	2	10
3.その他の政府関係の派遣	179	174	129	1	3
（1）日本学術振興会	(55)	(37)	(38)	(1)	(0)
（2）国際協力機構	(10)	(10)	(9)	(0)	(0)
（3）その他	(114)	(127)	(82)	(0)	(3)
4.その他の国内資金	155	179	148	1	3
5.外国政府・研究機関等	65	73	51	1	4
6.私費	14	3	4	0	0
合　計	599	599	537	5	20

教員の海外渡航件数（地域別）

地域	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
北　米	94	98	88	2	10
中南米	44	26	12	0	0
ヨーロッパ	106	99	112	2	4
アフリカ	12	15	13	0	2
中近東	3	11	3	0	0
中　国	77	70	82	1	3
韓　国	51	49	36	0	0
その他のアジア	207	211	179	0	1
オセアニア	5	20	12	0	0
合　計	599	599	537	5	20

※複数の地域を同一の事業で渡航した場合、複数の事業として計上。

(3)外国人研究者等の受入れ

海外との学術交流は、外国人研究者等の受入れの面でも活発に行われており、アジアからの研究者が全体の7割弱を占めているのが特徴だが、部局協定などに基づいて、世界各国から研究者を受け入れている。このほかに視察などの目的で本研究科を訪れる外国人の数も多数にのぼっている。

外国人研究者等の受入人数（事業別）

区　分	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
1.文部科学省事業	0	0	0	0	0
2.科学研究費補助金	11	7	16	7	7
3.その他の政府関係機関	91	86	65	25	17
（1）日本学術振興会	(32)	(23)	(17)	(7)	(3)
（2）国際協力機構	(3)	(15)	(1)	(0)	(0)
（3）その他	(56)	(48)	(47)	(18)	(14)
4.その他の国内資金	54	34	89	52	33
5.外国政府・研究機関等	0	0	0	0	7
6.私費	76	123	74	0	20
合　計	232	250	244	84	84

外国人研究者等の受入人数（地域別）

地域	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
北　米	11	15	11	4	3
中南米	6	8	2	2	3
ヨーロッパ	24	65	26	9	6
中近東	4	2	6	3	5
中　国	63	65	98	40	44
韓　国	30	7	11	6	7
その他のアジア	90	85	81	15	12
オセアニア	2	1	1	1	1
アフリカ	2	2	8	4	3
合　計	232	250	244	84	84

(4)留学生の受入れ

本研究科では大学院生を中心に多数の留学生を受入れており、2022年５月１日現在の大学院留学生は354名である。全大学院生に占める留学生の割合は、30%以上であり、これは本学でも高い比率である。

出身国・地域別に見ると、アジアを中心に多様な46ヶ国・地域から留学生を受け入れている。

課程別の在籍者数は、博士課程49.4%、修士課程41.3%、研究生9.3%であり、博士課程在籍者数の割合が非常に高い。

専修別留学生数（2022.5.1現在）

学部：応用生命科学課程３名
　　環境資源科学課程１名
　　獣医学課程１名

専攻別留学生数

（各年度5.1現在）

年	専攻名	生産・環境生物学	応用生命化学	応用生命工学	森林科学	水圏生物科学	農業・資源経済学	生物・環境工学	生物材料科学	農学国際	生圏システム学	応用動物科学	獣医学	合計
2018	修士課程	6	21	15	6	11	7	5	3	27	2	2		105
	博士課程	10	21	21	14	20	7	9	20	23	3	3	15	166
	外国人研究生	2	4	2		2	2	3	1	5	2		2	25
	合計	18	46	38	20	33	16	17	24	55	7	5	17	296
2019	修士課程	8	17	9	11	10	11	4	5	36	3	2		116
	博士課程	11	25	19	15	26	8	9	15	22	3	5	17	175
	外国人研究生	1	4	8	2		2	2		6	3	1		29
	合計	20	46	36	28	36	21	15	20	64	9	8	17	320
2020	修士課程	10	13	15	10	11	7	7	8	35	7	6		129
	博士課程	13	27	14	6	25	10	6	12	26	4	6	12	161
	外国人研究生	3	3	8	4	3	1	5	1	3	3	1	2	37
	合計	26	43	37	20	39	18	18	21	64	14	13	14	327
2021	修士課程	8	18	21	8	11	4	12	8	40	9	8		147
	博士課程	17	27	15	8	29	13	7	8	25	4	6	12	171
	外国人研究生	1	4	8	3	1		4		2	4	1		28
	合計	26	49	44	19	41	17	23	16	67	17	15	12	346
2022	修士課程	11	18	17	7	10	7	9	9	40	12	6		146
	博士課程	19	26	16	6	27	15	7	5	32	7	5	10	175
	外国人研究生	1	6	6	3		2	1		3	4	3	4	33
	合計	31	50	39	16	37	24	17	14	75	23	14	14	354

※「外国人研究生」に特別研究学生、特別聴講学生は含まない。

大学院留学生在籍数（出身国・地域別）

		2018年度			2019年度			2020年度			2021年度			2022年度		
		33カ国・地域			38カ国・地域			43カ国・地域			39ヵ国・地域			46ヵ国・地域		
地域	国または地域名	国費	私費	合計	国費	私費	合計	国費	私費	合計	国費	私費	合計	国費	私費	合計
アジア	インド	3	2	5	2	1	3	2	1	3	1	1	2	3		3
	ネパール	3	1	4	2		2	2		2	1		1	1		1
	バングラデシュ	4	2	6	5	2	7	5	1	6	3	3	6	3	3	6
	パキスタン	1		1	1		1	1		1				1		1
	スリランカ	3	3	6	5	1	6	4	1	5	1	5	6	1	4	5
	ミャンマー	1		1	2		2	3		3	2	1	3	4	2	6
	タイ	6	3	9	4	5	9	3	4	7	2	3	5	3	1	4
	マレーシア	5	2	7	4	2	6	3	1	4	2	1	3	3	1	4
	シンガポール											1	1		2	2
	インドネシア	6	9	15	5	9	14	6	8	14	6	9	15	6	7	13
	フィリピン	4	2	6	5		5	3		3	1	2	3	7	2	9
	韓国		8	8	1	9	10	1	8	9	1	10	11	1	6	7
	モンゴル	1		1	1	1	2	1	1	2	1	1	2			
	ベトナム	6	6	12	4	5	9	3	4	7	1	4	5		4	4
	中国	18	158	176	21	178	199	17	198	215	16	217	233	12	220	232
	中国（香港）										1	2	3	1	1	2
	カンボジア	1		1	1		1	1		1	1		1		1	1
	ブータン								1	1		3	3		4	4
	台湾		13	13		16	16		15	15		13	13		7	7
	小　計	62	209	271	63	229	292	55	243	298	40	276	316	46	265	311
中近東	イラン		1	1		1	1		1	1		1	1		2	2
	シリア													1		1
	小　計		1	1		1	1		1	1		1	1	1	2	3
アフリカ	ウガンダ													1		1
	カメルーン													1	1	2
	ケニア														1	1
	マラウイ														2	2
	モロッコ														1	1
	エジプト	1		1		1	1		1	1		2	2		2	2
	チュニジア	1		1	1		1	1		1	1		1		1	1
	マダガスカル		2	2		2	2				1		1	1		1
	ナイジェリア										1		1	1	1	2
	ケニア		2	2		1	1									
	タンザニア		2	2		1	1		1	1						
	ガーナ	1		1	1	1	2		2	2	2	1	3	2		2
	ジンバブエ	1		1				1		1	1		1	1		1
	南アフリカ											1	1		1	1
	ルワンダ		1	1		1	1									
	ブルキナファソ	2		2	1		1	1		1		1	1		2	2
	ガンビア					1	1		1	1						
	ベナン				1	1	2	1	1	2	1		1	1		1
	ガーボベルデ							1		1	1		1	1		1
	小　計	6	7	13	4	9	13	5	6	11	8	5	13	9	12	21
北米	カナダ		1	1		1	1		1	1		1	1		1	1
	アメリカ合衆国		3	3		3	3	1	3	4	1	3	4	2	6	8
	小　計		4	4		4	4	1	4	5	1	4	5	2	7	9
中南米	メキシコ		1	1		1	1		1	1		2	2		1	1
	ボリビア	1		1	1		1	1		1		1	1			
	ペルー		1	1		1	1		1	1						
	コロンビア	2	1	3	2		2		1	1	1	1	2	1		1
	コスタリカ													1		1
	アルゼンチン					1	1		1	1		1	1		1	1
	ブラジル				1		1	1	1	2	1	1	2	1	1	2
	ベリーズ							1		1	1		1	1		1
	小　計	3	3	6	4	3	7	3	5	8	3	6	9	4	3	7
ヨーロッパ	ポルトガル	1		1	1		1		1	1						
	イギリス					1	1		1	1						
	アルメニア														1	1
	フランス					1	1		1	1		1	1		1	1
	イタリア							1		1	1		1		1	1
	小　計	1		4	1	2	3	1	3	4	1	1	2		3	3
	合　計	72	224	296	72	248	320	65	262	327	53	293	346	62	292	354

※特別研究学生は含まない。

（5）国際交流室・国際学務支援チームの留学生への対応

本研究科・学部には、約300人の留学生が在籍しており、これらの留学生を支援することが国際交流室・国際学務支援チームの主要な役割である。国際交流室は常勤教員１名、特任専門職員１名と、４専攻から選出された教員（室長１名と室員３名）の計６名で構成され、留学生が研究に専念できるよう日常生活や大学での様々な疑問や悩みごとの相談に応じている。一方、教務課国際学務支援チームでは、留学生の宿舎、ビザ申請等、事務手続についての支援を行っている。

国際交流室では、また、本研究科・学部留学生向けの各種情報を日・英両言語でホームページに掲載するとともにツイッターでも情報を発信している。留学生関連資料・文書のバイリンガル化にも力を入れており、「Welcome Guide」の作成、来日後に必要な情報提供、入学希望者や留学生のチューターからの問い合わせにも対応している。

年間を通して開催している交流行事については、2021年度はコロナ禍のため対面でのイベントは行わず、代わりにオンラインで坐禅体験、及び留学生と日本人学生の交流イベントShare your Japan in 1 minuteを開催した。従来、留学生・日本人学生を交えて昼食を取りながら行っていたカンバセーションテーブルは現在、Zoomで続けている。

Share your Japan in 1 minute

（6）農学国際専攻での農学国際実地研究

農学国際専攻の大学院生には、カリキュラム「農学国際実地研究（海外実習）」の選択により単位を取得する機会が与えられている。この実習は、教員が引率する比較的短期間のスタディーツアーに参加する場合と、長期滞在型の調査研究を行う場合とがある。後者は、教員が参画している海外プロジェクト研究などでの協力関係をベースにして、海外の大学やFAOなどの国際機関に指導を依頼して行われることが多い。また、博士課程学生の場合は、フィールドワークに加えて行った国際学会等での研究成果発表も単位取得の一部としてカウントされる。

これらの多様な海外活動では、発展途上国の農山村地域の実態を把握する調査のみならず、食料・環境・エネルギー・貧困等の問題解決のためのプロジェクトに参加することもできる。そして、プロジェクトの批判的検討や、合理的に推進するためのスキームを構築したり、目的を達成するための科学的分析や政策提言の方法論について、国際協力の現場で実務に携わる人々と議論する機会もある。

（なお、大学院生は農学国際実地研究に要する経費の一部について、東京大学農学部創立百二十五周年記念事業によって創設された国際交流事業基金からの資金援助を申請できる。）

「農学国際実地研究：シベリアにおける植生調査（ロシア）」

13 環境安全管理室の活動状況

教育研究活動の中でさまざまな実験や野外活動が行われる大学では、そこで生じがちな事故や災害を未然に防ぐ安全衛生管理が欠かせない。また、国立大学法人化によって労働安全衛生法他への対応が必要となった。そのため安全衛生管理にフォーカスした部署である環境安全管理室は次のような教育研究活動への支援を行い事故・災害の防止に努めている。多数の研究室が多彩な活動を行っている当研究科では、各研究室共通の安全衛生活動の仕組みである教育研究安全衛生マネジメントシステム（MS）を、全学に先駆け導入した。MSの主な目的は潜在的な危険有害性の評価（リスクアセスメント）と安全確保技術の伝承による事故災害の防止である。MSのベースは一般企業等で採用されている労働安全衛生マネジメントシステムだが、これを教育研究の現場に適応するよう修正を加えた。2006年度（平成18年度）の４研究室による試行を経て、2007年度から附属施設を含む全研究室で本格的に始動した。始動に際しては2006年度ＭＳ発表会（１回）、MS説明会（９回）、民間企業等見学会（４回）等の開催や、MSワーキンググループによる活動推進を行った。2021年度（令和３年度）は、前年度から続くCOVID-19下にもかかわらず83%の研究室でリスクアセスメントに着手し、79%の研究室がplan-do-check-actの１年間の活動サイクルを回した。

当研究科の野外活動は年間600～700件前後にも及ぶが、2021年度（令和３年度）もCOVID-19による活動制約を受けたものの、感染症対策を図った上で511件の活動が行われた。学生だけで行う活動も多いため、2005年度に発生した無免許潜水作業中のリサーチフェローの死亡事故を受けて、2006年度から野外活動安全衛生管理計画書の事前提出を義務づけ、野外活動計画書ワーキンググループによる検討を毎週行い、野外活動時の事故防止に努めている。

新しく着任した教職員や新入生に対する安全衛生健康ガイダンス、消火訓練や避難・安否確認を含む総合防災訓練等様々な活動を行っている。実験用化学物質・廃棄物の管理状況の把握と助言、不要な試薬や物品の早期排出の促進、化学物質や紫外線露出から身を守る保護具の着用に関する助言、地震など災害時の物品の転倒・落下防止対策提示、ゴミカートへの不適切な分別廃棄への注意喚起等も行っている。2008年秋に旧附属農場において、農薬としての登録が失効し使用できなくなっていた水銀剤が使われたことが判明して以来、旧農場において特別の管理体制を組むなど、農薬の管理に特に注意をしている。

2021年度は休業災害が12件発生し、内訳は通勤通学災害９件、屋内作業２件、屋外作業１件であり、通勤通学時の交通事故や階段等での転倒事故が多数発生した。人的災害を伴わない物損・設備災害は23件であり、重大事故として電気配線や定温乾燥機の火災が４件発生した。不休業災害（虫刺されを除く）は25件であった。そのうち屋内作業が15件を占め、動物による負傷５件、器具等による切傷、物品等による激突、薬傷が各２件だった。

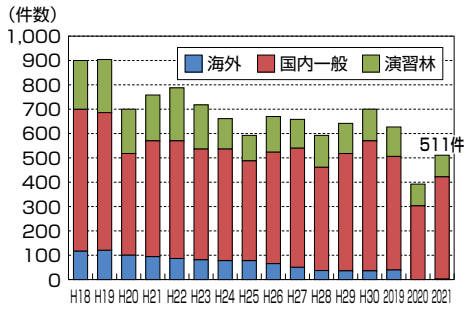
大学における教育・研究が先端的なものであればあるほど、それに対応した積極的な安全意識を身につけた若者の育成の支援も大学における環境安全管理室の責務である。

野外活動安全衛生管理計画書件数（2021年度）

活　動　地		総活動件数（A）	総活動件数のうち学生による活動件数（B）
海　　外		3（ 0.6%）	2（67%）
国　　内		508（99.4%）	112（22%）
	一　般	419（ 82%）	95（23%）
	演習林	89（ 17%）	17（19%）
計		511	114（22%）

（A）における%は、総活動件数に占める割合
（B）における%は、対応する（A）の値に対する割合

野外活動安全衛生管理計画書件数の推移



部局災害対策本部（2021年度研究科総合防災訓練）

水消火器訓練（2021年度研究科総合防災訓練）

14 領域横断型教育プログラム

(1)産学官民連携室

本研究科が2005年に開始したアグリコクーン（産学官民連携型農学生命科学研究インキュベータ機構）プログラムをサポートするために産学官民連携室は設立されました。アグリコクーンプログラムは、農学ならではの６つの学際的なテーマが設定されていて、分野横断的な授業、シンポジウム、プロジェクト研究などから構成されています。

６つのテーマとは、食の科学、バイオマス利用研究、国際農業と文化、生物多様性・生態系再生、情報利用研究、放射線影響です。テーマごとに「フォーラムグループ」が設置されていて、そこには専攻を超えた延べ約60名の教員が参加しています。フォーラムグループをベースにそれぞれが特徴ある活動を進めています。

６つのフォーラムグループ合計で13科目の授業が行われています。当初は大学院生向けの授業でしたが、2011年度からは一部の授業を学部学生が受講できるようにして、専門的な授業の早期履修制度に取り組んできました。毎年延べ約200名の学生が受講しています。授業では、国内外の研究者や企業人を招いた講演やゼミナールを開催することが多く、最新の学外の研究内容や実務面の奥深い話題に触れることができます。企業の協力を得て現地実習も行っています。

アグリコクーンで企画されたシンポジウム等はこれまでの17年間に140回以上開催されました。多岐にわたる活動の事務一切を産学官民連携室が担当しています。アグリコクーンの活動は定型化されていないものが多く、最近では交換留学生の派遣や受け入れにおける支援など常に新しい課題に挑戦していますが、それらが円滑に進められるように産学官民連携室がサポートしており、研究科全体の教育・研究・広報活動にも関わっています。

(2)アグリバイオインフォマティクス教育研究プログラム

農学生命科学分野におけるバイオインフォマティクスの重要性は、ますます高まっています。食、環境、生命に関わる今日の重要な社会問題に対応するため、その具体的な方法論として、また細分化された専門分野を統合する手段として、バイオインフォマティクスは必要不可欠となっています。「アグリバイオインフォマティクス教育研究プログラム」は、2004年に発足して以来、18年間にわたり、農学生命科学分野におけるバイオインフォマティクスの教育・研究活動に取り組んでいます。

本プログラムは、フィールド系も含めたバイオインフォマティクスの基礎、方法論、先端トピックスの16の科目を用意し、目的に応じ選択して受講することができるようにしています。基礎と方法論の科目は、すべて実習と一体化した講義で、実践的な技術を身につけることができます。本学の大学院生だけでなく、他大学の学生や社会人の方も受講することができ、これまでに、本研究科だけでなく他研究科、他大学や社会人を含め、2,591名（延べ7,322名）が受講してきました。所定の単位を取得した人には修了証を発行しており、これまで262名に授与しています。また、学部の展開科目も開講しています。

そのほか、バイオサイエンスデータベースセンター（NBDC）や創薬等先端技術支援基盤プラットフォーム（BINDS）、一般社団法人バイオ産業情報化コンソーシアム（JBIC）との共催により、様々な実践的教育も実施しています。また、企業との共同研究、技術的な相談、大学院生の学位論文の指導を行っており、研究活動にも力を入れています。

(3)One Earth Guardians育成プログラム

One Earth Guardians育成プログラムは、2018年度から受講生を迎えて活動を開始しました。SDGsに表されるように、私たちは今、すべての生物が暮らす地球環境の持続可能性と人類の生活をいかに両立させていくのかという大きな課題に直面しています。このプログラムは、生物資源の利用に根ざした実学たる農学の原点に立ち返り、100年後の地球のために、社会を巻き込みながら行動できる科学者の集団『One Earth Guardians (OEGs)』の育成を目指しています。2022年度からは全学に受講生の範囲を広げ、前期教養過程を含めた様々な所属の１期から５期までの受講生が活動しています。OEGsを目指す志のもと、専門分野や学年の異なる受講生どうしが集まり、交流がうまれる場にもなっています。

カリキュラムを構成する科目「ワン・アーソロジー」では、受講生と企業等の方が共に社会の実課題に取り組み、解決方法を提案する「実学研修」を実施しています。また、受講生や社会人がフラットな立場でディスカッションを行う「One Earthology Seminar」をはじめ、産官学で取り組む多彩なOne Earthology協創の場を次々に企画、開催するなど、産官学の協働により、農学の知見や技術を活かしたSDGsの実現に資する人材の育成に向けた活動を積み重ねています。

活動の詳細についてはウェブサイトやFacebookページもご覧ください。

（One Earth Guardians, 地球医, OEGs, One Earthology, ワン・アーソロジー は東京大学の登録商標です）

15 その他の活動

(1)ハラスメント等相談窓口

近年、学生及び教職員の精神的な病やハラスメントに関わる事案が増加していることに鑑み、本学での対応とは別に研究科独自に以下のような複数の窓口を設けて対応している。

■弥生ほっとライン（農学生命科学研究科・農学部の倫理相談窓口）
■農学生命科学研究科ハラスメント等対策室
■学生相談窓口
■留学生相談窓口

(2)ダイバーシティ推進室

農学生命科学研究科では、国籍・性別にとらわれず、すべての人が尊重され、その個性と能力を十分に発揮する環境を整える努力をしています。「大学に行くのが楽しい」とすべての人が感じることを目指して、日々改善に取り組んでいます。

東京大学において、男女の比率の不均衡は大きな課題です。現在、農学部の女子学生の割合は約25%、農学生命科学研究科の女子学生の割合は約35%です。これら女性比率の改善に向けた活動をサポートしています。

16 自己点検・評価及び外部評価の実施について

2000年に第１回の自己点検・評価を完了し、ただちに外部評価に着手した。外部評価委員会には国内の有識者（８名）のほかに、国連大学のファンヒンケル学長も参加した。2001年３月の外部評価委員会は、教職員のみならず、学生との意見交換会を行い、研究教育の現状を余すところなく報告し、各評価委員から意見をいただくとともに、その結果を報告書にまとめた。その評価結果は、現在の研究科・学部の活動をおおむね支持していたが、一部の施設や研究スペースが不足、および老朽化していること、産業界との連携強化の必要性などの改善も求められた。

それらの意見に基づき、改善策を講じるとともに、2002年度には農学運営諮問会議を設置し、継続的に外部の有識者からの意見を求めている。2006年度には更なる活動強化に向けて、研究科内に再び自己点検評価委員会を設置し、広範な自己点検作業を開始した。

本研究科では、1991年から隔年で「研究者紹介」（当初は「年報」）を刊行していた。2003年度からは、ホームページ上で「研究者の紹介（研究者紹介データベース）」（https://www.a.u-tokyo.ac.jp/researchers/index.html）を公開している。このデータベースでは、研究科・学部に所属する教授、准教授、講師、助教、助手の氏名、学齢、職歴、研究活動、教育活動、社会活動等々の個人情報に加えて、過去５年以上の研究業績のデータを蓄積・検索できる。現在、このデータベースの充実を図り、自己評価等に活用していくための作業を進めている。加えて、2011年度以降は上記データベースのうち各研究者の教育・研究に関する業績を年報としてまとめ、原則として隔年での刊行を続けている。

なお、研究科の附属施設においても、自己点検活動は活発化しており、年報やニュースレターが刊行されている。

東京湾砂浜海岸での魚類相調査
（写真提供：生圏システム学専攻）

牧場実習の風景、ウマとの触れ合い第一歩
（写真提供：獣医学専攻）

17 予　　算

(1)収入・支出（科研費は含まず）

（2021年度決算期：含　附属施設）

収入

科　目	決算額（千円）
授業料	749,321
入学料及検定料	117,880
学校財産貸付料	57,332
寄附金受入	581,142
産学連携等研究収入	2,182,070
動物治療収入	659,780
農場及演習林収入	120,950
刊行物売払代	217
雑収入	17,574
学校財産処分収入	489
弁償及違約金	4,240
延納利子収入	0
計	4,483,345

支出

区　分	決算額（千円）
人件費	1,538,009
物件費	3,654,177
計	5,192,186

※常勤人件費については、本部予算からの支出のため含まず

(2)外部資金等受入状況（附属施設・寄付講座を含む）

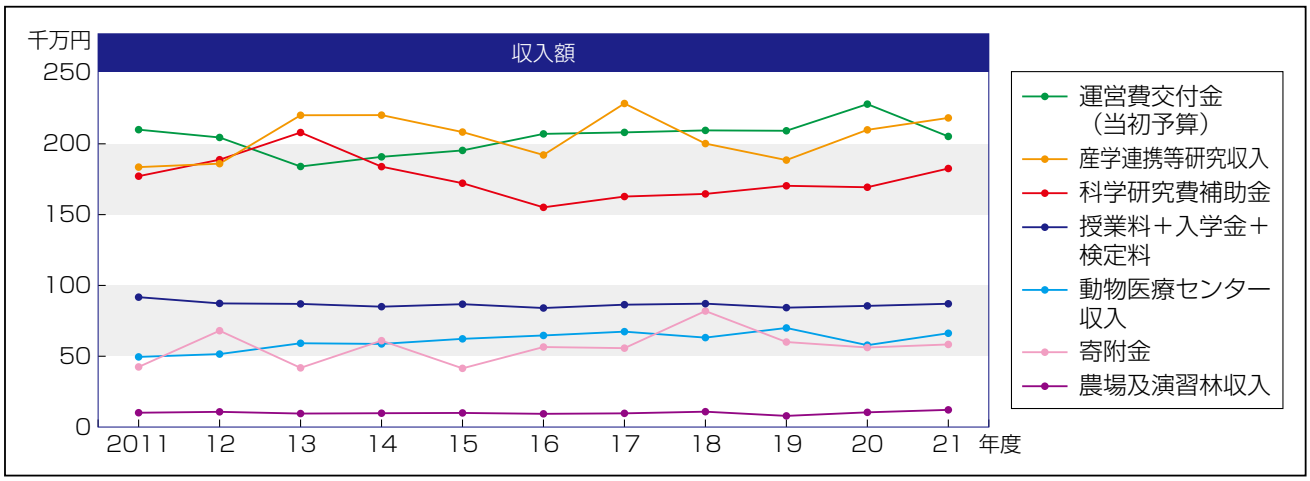
（2021年度）

区　分	寄附金受入		科学研究費補助金		受託研究		預り補助金		民間等との共同研究	
	件数	受入額（千円）	件数	受入額（千円）	件数	受入額（千円）	件数	受入額（千円）	件数	受入額（千円）
農学生命科学研究科・農学部	168	581,142	379	1,818,595	140	1,368,356	12	197,414	191	616,300
計	168	581,142	379	1,818,595	140	1,368,356	12	197,414	191	616,300

(3)農学生命科学研究科・農学部収入合計額の推移

（含　附属施設）（単位：千円）

年度	授業料＋入学金＋検定料	寄附金	産学連携等研究収入	動物医療センター収入	農場及演習林収入	科学研究費補助金	運営費交付金
2017	860,748	555,043	2,275,891	671,106	96,488	1,621,365	2,072,683
2018	867,923	816,227	1,993,899	629,091	108,132	1,639,940	2,086,666
2019	839,892	598,196	1,877,794	697,039	78,571	1,696,882	2,083,980
2020	852,306	559,448	2,090,478	576,070	103,580	1,777,956	2,271,389
2021	867,201	581,142	2,182,070	659,780	120,950	1,818,595	2,044,164



18 出版・印刷物・データベース

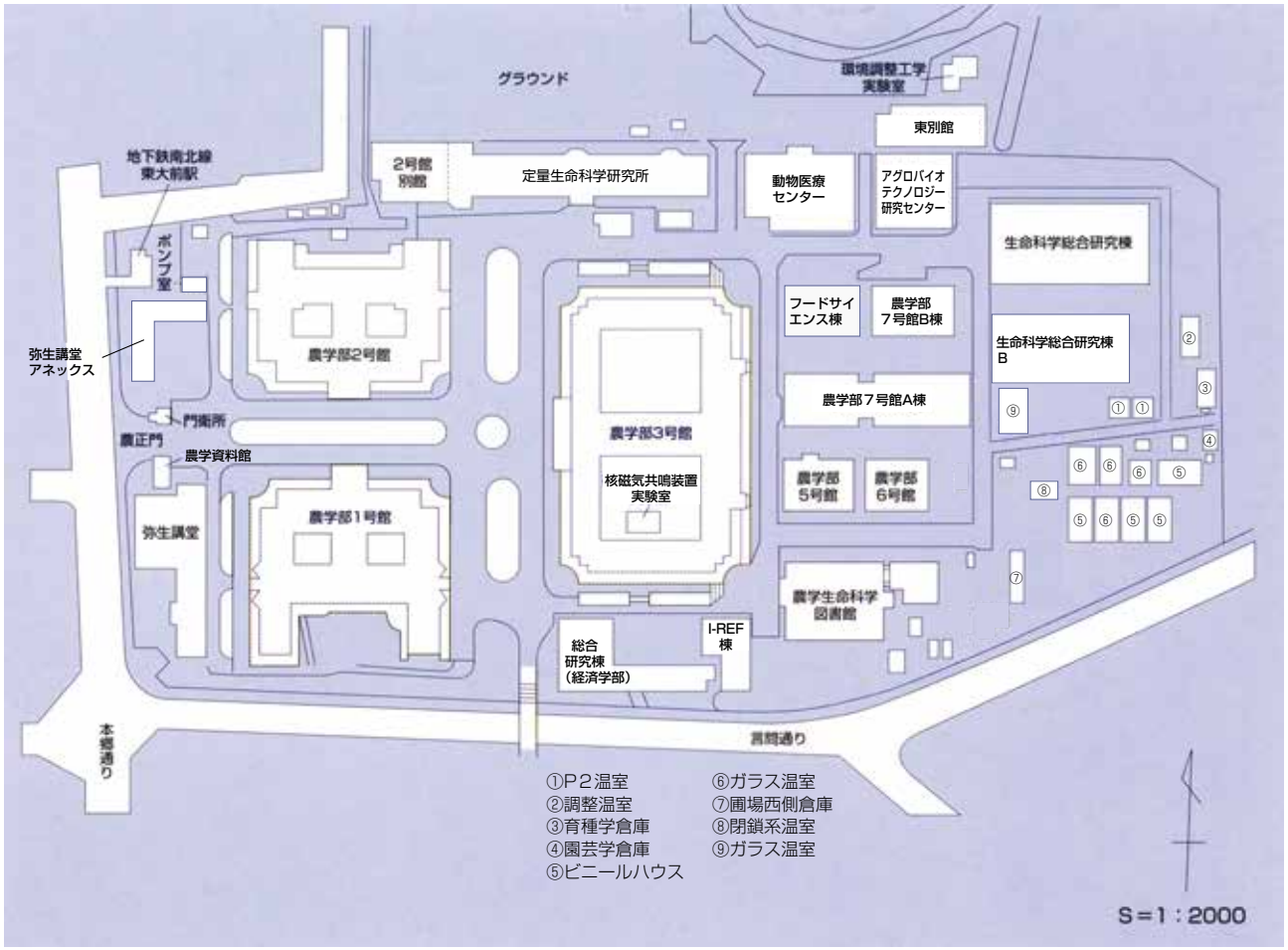
本研究科・学部では、学生及び教員・職員へ情報を提供する目的のほか、研究・教育内容の紹介など外部への広報活動のために、以下のような定期刊行物等を出版している。

(1)刊行物一覧

名　称	発行回数	発行部数	主な配布先
大学院農学生命科学研究科・農学部概要	年1回	1,000 (2020年度と2021年度は700)	教員･職員、来訪者
大学院農学生命科学研究科・農学部英文概要	不定期		外国人来訪者
農学部便覧	年1回	800	学生･教員、他学部
農学生命科学研究科便覧	年1回	1,800	学生･教員
農学部授業時間割	年1回	1,000	学生･教員、他学部
弥生（農学部広報誌）	年2回	6,000/回 (2020年度と2021年度は4,000程度／回)	教員･職員、他学部、他大学、来訪者
農学生命科学研究科技術職員研修会資料集	年1回	200	教員･職員、他学部、他大学
21世紀を担う農学（進学ガイダンスパンフレット）	年1回	2,200 (2021~2022年度版は1,000)	学生･教員
学生によるガイダンスブック	不定期	3,000	学生･教員
演習林概要（全演版）	隔年	1,200	学生、教員、職員、来訪者
演習林概要（各地方演習林版）	隔年	各1,000	学生、教員、職員、来訪者
演習林年報	年1回	700	教員･職員、他学部、他大学
演習林	年2回	700 (印刷版年1回)	UTokyo Repositoryで一般公開。教員、他学部、他大学に2号合本の印刷版を配布
演習林報告	年2回	700 (印刷版年1回)	UTokyo Repositoryで一般公開。教員、他学部、他大学に2号合本の印刷版を配布
科学の森ニュース	年4回	1,600/回	教員、職員、他大学
科学の森で学ぼう	年1回		PDF版を作成し、演習林HPで公開
附属演習林技術職員等試験研究・研修会議報告	年1回	300	教員、職員、他大学
浜名湖を巡る研究者の会	年1回	100	教員･職員、他学部、他大学
農学部公開セミナー　講演要旨集	年2回	400/回 (2020年度と2021年度はWeb掲載のみ)	セミナー参加者
放射線育種場共同利用研究報告集録	年1回	100	教員、利用者、他大学
農学生命科学研究科･農学部研究者紹介データベース（研究者の紹介）	随時更新		HPからの一般公開 https://www.a.u-tokyo.ac.jp/
農学生命科学研究科・農学部　教育・研究年報	隔年	400部	教員・職員、来訪者
生態調和農学機構年報	年1回		機構HP（http://www.isas.a.u-tokyo.ac.jp）とUTokyo-Repository（http://hdl.handle.net/2261/56434）で一般公開
生態調和農学機構紹介パンフレット	不定期	6,000	教員、職員、他学部、他大学、来訪者
食の安全研究センター紹介パンフレット	不定期	1,000	教員・職員、来訪者
VMC News Letter	不定期	2,000	教員・職員・寄附者、他動物病院

(2)公式ホームページなど

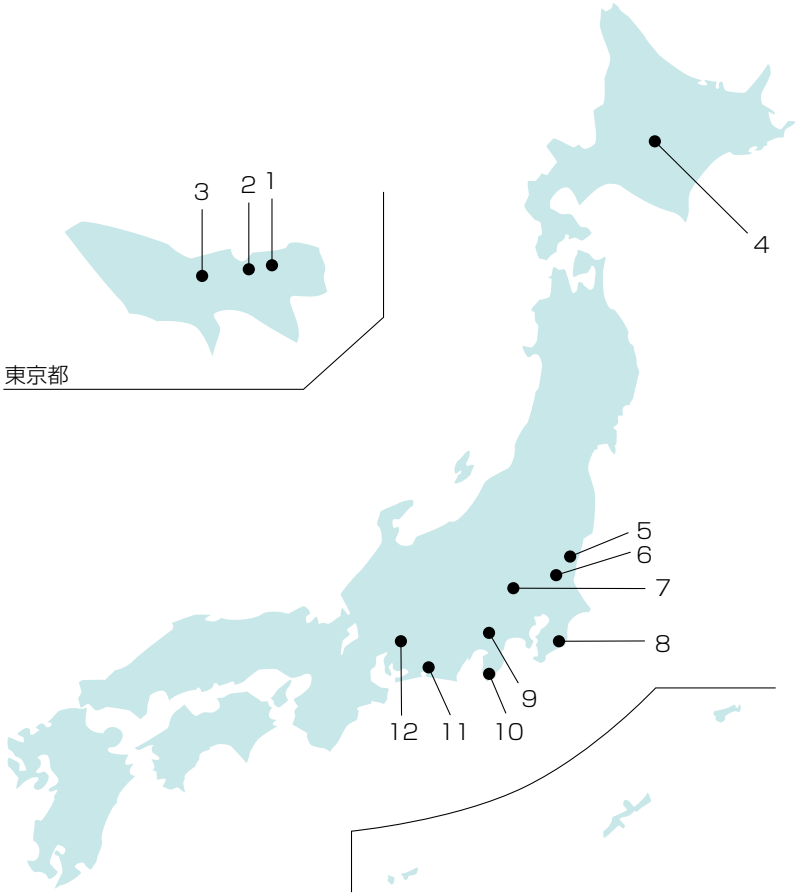
・農学生命科学研究科・農学部　　https://www.a.u-tokyo.ac.jp/index.html



農学生命科学研究科・農学部配置図

附属施設等分布図

1. 弥生地区
2. 小石川樹木園
3. 生態調和農学機構・田無演習林
4. 北海道演習林
5. 放射線育種場共同利用施設
6. 牧場
7. 秩父演習林
8. 千葉演習林
9. 富士癒しの森研究所
10. 樹芸研究所
11. 水産実験所
12. 生態水文学研究所



東京大学大学院農学生命科学研究科・農学部

Graduate School of Agricultural and Life Sciences / Faculty of Agriculture , The University of Tokyo

【発行】東京大学大学院農学生命科学研究科・農学部広報室
〒113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1
TEL.03-5841-5484
HP https://www.a.u-tokyo.ac.jp/